

---

# 魔法少女リリカルなのはA ' S ~ 真紅の英雄 ~

秋風

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはA's 真紅の英雄

### 【Nコード】

N0529M

### 【作者名】

秋風

### 【あらすじ】

一人の英雄がいた・・・世界を守るために、世界の平和を守るために戦い続けた英雄が。英雄は人ではない。だが人のために戦い、少女の願いのために、友から譲り受けた剣を手に、戦い、そして消えた。そして世界の英雄は次元と世界を超えて、一つの世界へと辿り着く。車椅子の少女にとって小さな出会い。英雄にとっては大きな出会い。その新たな世界で、英雄は何を見るのか・・・？ ロックマンゼロコレクション発売記念！ロックマンゼロ×魔法少女リリカルなのはクロスオーバー小説が秋風発で発進！

MISSION・00 「物語の終わり」(前書き)

はい、タイトルどおりロクゼロのクロス小説です。はやてがヒロインという私にとって始めての試みです。クロスオーバーなのでやや苦手なところですが、頑張っ書こうと思っっています。他の小説を期待している読者様のためにも、他の小説は頑張っっていくつもりですので、よろしく願います。

## MISSION・00 「物語の終わり」

英雄ゼロ……その最後の戦い……それは宇宙での戦い。自分の身体を奪い、世界を狂わせた男、Dr・バイルとの戦い。託された刃を握った。時間も無い、身体力も無い。できる全てを注ぎ込み、ゼロはZセイバーを振るった。

「おおおおおおっ！」

翠色の剣、Zセイバーがバイルの顔を入れたガラスを撃ち破った。

「このワシが…人形ごときに…！滅び…滅んでしまえええっ！」

爆発がおき、ラグナロクが崩壊していく。ゼロの足場が崩れ、ゼロは宇宙空間に投げ出される。そしてラグナロクの破片がぶつかり、共に地上へ向けて落下していく。

「……………さよならだ、シエル」

ゼロは静かに目を閉じ、流れに身を任せた。

MISSION・OO 「物語の終わり」(後書き)

次回より本編です

MISSION・01 「母なる妖精」(前書き)

今回の小説は話の一つが短いかもしれませんが。しかしながら努力はしてまいりますので、どうか温かい目で見守って欲しいと思います。

MISSION・01 「母なる妖精」

ゼロはゆっくりと目を開けた。ここが天国というものだろうかと思  
い、身体を起こした。

「ここは……?」

ゼロのいるのは真っ白い空間だった。何もない、白い空間。身体は  
ありえないくらいに再生していた。そして、一つの光が、ゼロの前  
に降りて来た。

「お前は……」

それはかつて闇の精と呼ばれた存在。だが今は違う。母なる精と呼  
ばれたサイバーエルフ

「マザー……エルフ」

「ゼロ……」

慈愛に満ちた光が、ゼロを包み込む。

「お前が、俺を助けたのか?」

「ゼロ……」

そつだと言つように、マザーエルフは微笑む。そして、扉が現われ  
た。

「扉……？」

「ゼロ……わ、たし……は……」

「？」

「みまもつて……います……あなたが……たとえどんな地でも……自分で、道を切り開くことを……貴方の、友に代わって」  
バイルの支配のせいか、喋ることができずにいたマザーエルフが、ゼロに必死に喋っていた。その声もまた優しく、暖かい声だった。ゼロはただ一言、マザーエルフに言い放った。

「感謝する」

ゼロは扉を開けた。これが赤き英雄ゼロの、新たな物語の始まりである。

ゼロは目を開ける。そこは一つの部屋だ。

「ここは……」

先ほどのことが夢ではない。なぜなら、自分が生きているからだ。

「……」

傷は回復していた。エネルギーも、問題がない。ゼロは周囲を見渡した。すると、ヘルメットとZセイバー、バスターはあった。それを腰に入れ、ヘルメットを被って立ち上がった。まずは現状の把握



だ。ここがエリア・ゼロからどれだけ離れた場所なのか、そしてシエルたちは無事なのか。

ガチャ

急に、ドアが開く。ゼロはバスターを構えた。

「ひゃ!?!」

だが、そこにいたのは車椅子に乗った人間の少女だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ゼロは無言でバスター降ろした。

「あ、あの・・・・・・・・」

「お前は？」

「あ、えと・・・・・・・・うちは八神はやて言います。貴方は？」

「・・・・・・・・俺は、ゼロだ」

ゼロはバスターを腰に収納すると、はやてを見た。明らかに、自分たちの服とは違う。どこか、古い感じた。それに、名前もかわったものだ。

「ここはどこだ?」

「ここは海鳴市ですけど・・・・・・・・」

「ウミナリシ？」

聞いたことのない名前だった。ゼロは考える。ここはどこなのか・・・と

「ここは、ネオアルカディアなのか？」

「ネオアルカディア？どこですかそれ・・・」

はやての言葉を聞いて、疑問が生まれる。おかしい・・・人間がネオアルカディアを知らないわけがない。そして・・・

「・・・！！」

不意に見た窓を見て驚いた。そこに広がる世界の全貌。

「あれ？晴れとる・・・さっきまで雨やったのに」

「これが、世界の景色だと・・・？」

そこに広がるのは住宅街。そして人々が談笑しながら、人々が歩きながら食事する様子。ゼロは今までにない、人間の姿を見た。ここで、マザーエルフの言葉を思い出す。

たとえ、どんな地でも・・・

「まさか・・・」

そのまさかだ。ゼロは異世界を渡っていた。

「…………あの?」

「なんだ?」

「できれば事情を話してくれませんか?協力できることがあればしますから」

にっこりと笑うはやて。

「……………そうだな、事情を話したほうが早そうだ」

こうして八神はやてと、ゼロは出会った。

MISSION・01 「母なる妖精」（後書き）

はい、ということでききなり自己解釈です。ヘルメットは取れると  
いうことで（笑）

イメージは今度絵でも書いてみようかなと思います。

はやてとの出会でゼロがどう変わっていくのか、ご期待ください

MISSION・02 「新しい生活」(前書き)

書き溜めていると更新するのが楽しくなります。ただ、どんどん減るのは悲しいです・・・

では本編どうぞ

MISSION・02 「新しい生活」

ゼロが八神家に来てはや数日。

「ゼロ、おはようさん」

「ああ……」

朝早くからゼロは起きていた。というより、寝ていない。

「ゼロ、また起きてたん？」

「まあな」

「駄目やで、ちゃんと睡眠とらな」

「俺はレプリロイドだ。睡眠は最小限でいい」

「まったく……」

はやてはあきれながら料理を作っていた。こうなったのには、ゼロが事情を話すこととなったからだ。

回想開始

「……というわけだ」

ゼロは話した。自分がこの別世界に流れ着いたことを。そして自分がどういうものなのか。怯えるだろうか、それとも逃げ出すだろうか？そこにいるイレギュラーに、はやてがどんな反応を示したかというところ……

「ほえ〜……世の中には不思議なことがあるんやね〜」

感心していた。

「話を聞いていたのか？お前は」

「うん、聞いたよ〜」

いいながらゼロの頬をプニプニと触る。

「やめてくれ」

「へ〜……ロボットなのに柔らか〜い」

ゼロはこのはやての性格がつかめなかった。ふざけているのか、まじめなのか。

「ま、話を聞いてわかったことがあります」

「……」

「この先行くあてないって事やる？」

ゼロの身体にグサツ！と何か刺さった。確信を突かれたからか、ゼロは少しだけへこんだ。決して表情には出していないが。

「まあ、そうなるな……」

「ならええよ？ここにいても」

「何？」

ゼロは驚く。いきなり見ず知らずの人間にここにいていいなどと言うだろうか？さらに言えば、このような人間にあったのは初めてだった。シエルにしろ、エリアゼロの人間にしろ、どこか悲しみを背負い、それが出てしまう。だがは yet は笑顔を絶やしていない。そんななか、ゼロがふと思いつく。

「そういえば、俺はどうしてここに？」

なかなか聞くタイミングがなかったが、当然の疑問だった。今こそ家のリビングにいるが、ゼロがいたのはベッドだ。

「実を言うとその、いきなり落ちてきたんよ……部屋に」

「何？」

はやての話では、机に向かってしていると、急に自分の部屋にゼロが落ちてきたらしい。だから最初はすごく驚いたが、今はそんなでもないという。

「さて、行くところもないんやし、ここにいたらええやん」

「なぜだ？」



「それに、一人より二人のほうがさみしないから」

言われてゼロはハツとする。ここにははやて以外人がいない。いな  
いと言つても、外にはいるものだが、この家の中にはいないのだ。

「お前の、両親はいないのか？」

「うん……もうずいぶん前に……」

「そうか……」

ゼロはその寂しい表情に、シエルの面影を見た。シエルも今、こん  
な顔をしているのではないだろうか？

「……お前の言うとおりだな。お前の世話になるう」

「ホンマ!?!」

「ああ、偽りはない」

こうしてゼロははやてと暮らすこととなった。

回想終了

「しちそつなまー!」

「……」

はやてが食事を終える。ゼロはレプリロイドなので飲食はない。エネルギー水晶のみが、必要になる。だがその心配もなかった。

「その子、やっぱり綺麗やね〜」

「ああ、そうだな」

そこにいるのはサイバーエルフのクロワールだ。

「わーい」

クロワールは嬉しそうに空を飛ぶ。クロワールはアルエットがつけた名前だ。そしてそのクロワールには、ある機能が追加されていた。

「ゼロ、エネルギーいる？」

「いや・・・最小限の使用だけでいい」

「せっかく無限に引き出せるのに・・・」

と、すこしクロワールは残念そうだ。そう、クロワールにはある機能がついていた。それは「半永久的エネルギー提供」である。マザーエルフが付けたであろうその機能によって、ゼロはクロワールから活動に必要なエネルギーを得ることができるといって、食べ過ぎてレジスタンスの司令官及びオペレーター志望の男のようになるのはごめんこうむりたい。

「はやて！遊ぼうよ！」

「あかんよ、お掃除が先や」

「わかった、お手伝いするね！」

いいながらクロワールは布を持っていく。

「せや、ゼロ？」

「なんだ」

「今日はお買い物に行くで。はよう町に馴れなあかんから」

「………ああ、わかった」

何日も家にいるのは正直苦しくもなる。ゼロは外に出ることを考えるが……

「この服で、大丈夫か？」

「せや、服も買いに行くで」

こうして、ゼロは外に出ることとなった。

商店街からデパートへ、そこではやてはゼロの服を買った。基本的にまずズボンと上着だ。6月だからいいとしても、さすがに下半身をほぼ露出状態にするのはまずい。先に採寸してズボンだけははかせるはやてだった。現在は再びデパートに訪れている。ゼロはズボンをはき、ヘルメットを取っている。長い金髪は一つに束ねている。

「ほら、これはどじや？」

「今とあまり変わらないと思うぞ?」

赤いフードのついたパーカー・・・確かに、今と状況は変わらない。

「むー・・・ならこれや!」

「だから、何故赤ばかり選ぶ?」

この後、赤いTシャツや黒い上着・・・さまざまなものを選んで購入していた。まあゼロが青い服を着て似合うかと言われたら似合わないというのが正論かもしれない。

「・・・・・・・・・・」

「どうしたん?」

「いや、なんでもない」

ゼロは何かの気配を感じていたが。それはすぐに消える。

『見張られている』

そう感じる。

「あ、わかった。こんなに人がいて驚いてるやろ」

「・・・・・・・・そんなところだ」

それも一理ある。ゼロの世界には、こんなにも人間はいない。そして表情だって、こんなにも穏やかではいられない環境ではない。

「この後は、どうするんだ？」

「そうやった、夕食の買い物や」

こうして二人は商店街の中へと消えていった。

日も暮れ、すっかり時間は遅くなっていた。

「……………」

「ゼロ、どうしたん？」

「先に帰っててくれ」

「え？」

はやては首を傾げるが、ゼロは表情を険しくさせていた。

「早く」

「う、うん!」

車椅子を走らせ、はやてが公園を後にする。ゼロは着ていた上着を取り、森の影を見つめた。

「出て来い、そこにいるのはわかっている」

「……………」

そこに出てきたのは仮面をつけた二人組みの男だった。

「何者だ？」

「答えるつもりはない」

仮面の男は構えを取った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ゼロも同じように、Zセイバーを手に取る。そして、お互いが駆け出した。

「ふんっ！」

「はあっ！」

拳とZセイバーがぶつかり、衝撃を生んだ。ゼロは数歩分弾かれるが、仮面の男は数メートル吹っ飛ばされた。

「ぐっ・・・・・・・・」

「てああっ！」

チャージされたセイバーが仮面の男を襲う。かろうじて避けるが、その衝撃で地面がえぐられる。

「ぐああっ！」

衝撃によって男が吹き飛ばされる。それを見たもう一人は援護に入る。

「このっ！」

だが、ゼロはそれをわかっていた。

「なにっ!?!」

すでに逆の手でチャージを終え、構えられたバスターがあった。そしてそれが発射される。

「うわああっ!?!」

「ロツテ！」

仮面の男が叫ぶ。吹き飛ばされた仮面の男を抱きかかえる。すると、足元が光りだした。

「!?!」

そして、男たちは消えた。

「・・・・・・・・逃げられたか」

転送、のようにも思えるが、相手は間違えなく人間だった。いや、人間に近い何か・・・・・・・・ゼロはそう感じていた。ゼロは上着を拾い上げ、それを着る。

「・・・・・・・・」

狙いは間違いなく自分だった。なぜ自分が狙われるのか、それを考えた。

「……あいつか？」

不意に、はやてが浮かんだ。はやてに何かあるのだろうか、それとも別の何かか……。ゼロはそんなことを考えながらも、帰宅することにした。



MISSION・02 「新しい生活」(後書き)

はい、いきなり戦闘で仮面の男フルボッコです。まあしばらく登場しないのでいいかなと(笑)

とりあえず順調に更新していきます。感想やアドバイスをくれると嬉しいです。  
それでわw

MISSION・03 「闇の書」(前書き)

溜めていたのはここまで。明日は力の限り話を書いていこうと思います

これからよろしくです

MISSION・03 「闇の書」

『あなたがあの伝説のゼロなのね?』

『ゼロ?俺の名か?.....うう、思い出せん』

赤い英雄は夢を見る。遠くも最近に起きた記憶。それは眠りにつき、  
2度目に目覚めたときの記憶。助けを求める少女に目覚めさせられ  
.....

『エックスはもっと強かった!』

『旧型レプリロイドめ.....僕を侮辱したことを後悔させてやる  
!僕の真の力を、お前に見せてやろう!』

模造品の友と戦い.....

『ゼロ、君にしばらくこの世界を頼みたい』

『.....我侭は聞いてやろう。お前はゆっくり休め』

友と再び約束を交わす。

『力を.....もっと力を!』

狂気に飲まれた男。そしてその男の目を覚まさせた。

『さよなら.....シエル.....さん』

『ゼロ……』

救いし暗黒のエルフ。自らの記憶のかけらを呼び出す者。

そして現われるのは自分の全てを奪った男。

『ヒャーハツハツハ!』

『我はメシアなり!はーっはっはっは!』

自分自身と戦い……

『俺は俺でしかない、俺は………ゼロだ』

新たな決意……

ゼロ………ゼロ……

優しい声が聞こえた。

「ゼロ!」

「ん……」

ゼロは目を覚ました。どうやらソファで眠っていたようだ。

「ゼロ、こんな所で寝たらあかんよ?」

「………ああ」

気がつくともう夜だった。ゼロは身体を起こした。何か、嫌な空気を感じた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ゼロ、どうしたん？」

「いや、なんでもない・・・・・・・・そういえば明日は病院へ行くのだから。早く休め」

「うん、そうするな・・・・・・・・せや、ゼロ」

「なんだ？」

はやてが何故か、少し恥ずかしそうだ。

「今日、一緒に寝てくれへん？」

「何？」

ゼロはよくわからなかった。はやてはいつも一人で寝ているし、ゼロも今までそんなことは一度もない。強いて言うならクロワールと一緒に寝るくらいだが、今までこんなことはなかった。

「実を言うと、明日うち・・・・・・・・誕生日なんよ」

「そうなのか」

「だから、一度くらい家族と一緒に寝たいな・・・・・・・・って」

家族……ゼロに今までなかったものだ。そしてはやても、両親を知らないらしい。初めてできた家族のぬくもり。それが人であれ、人でなかれ、その温もりを一度でいいから欲しかったのだらう。

「……………わかった。いいだらう」

ゼロも少し彼女のことを理解したのか、頷いた。するとはやての顔が明るくなる。はやてを抱えて二階へ運び、着替え終わるまで外で待つ。

「入ってええよー」

はやての言葉があつたので部屋に入る。ほとんど睡眠をとらないゼロにとってベッドはあまり必要のない。ゼロはいつもと違う場所で寝ることで違和感を覚えていたいたが、はやてはすぐに眠りについた。

「……………」

午後11時59分

「……………?」

ゼロは違和感を覚えて起きた。はやては相変わらずだが、ゼロは机の上にあつた本を見た。少しだけ光っていた。そして……

午前0時00分

「……………!」

本が光だし、地面に何か円のようなものが引かれた。それによつてはやくも起きる。

「な、なんや!?!」

ゼロはバスターを構える。はやくはゼロの後ろに隠れ、怯えている。

「!?!」

突然円の上に、4人の人間が現われた

「闇の書の起動を確認しました」

ポニーテイルをしたピンク色の女が喋りだす。ゼロは驚きを隠しながらもバスターを持ち替え、Zセイバーを手を取っている。

「……闇の書?」

「我ら、闇の書の収集を行い、主を守る守護騎士」

「夜天の主に集いし雲」

「ヴォルケンリッター。何なりと命令を」

というが、彼女たちは目を瞑っている。どつやらこちらが見えていないようだ。

(主とは、こいつのことか?)

「ところで、貴様は何者だ?」

女性は先ほどとは違った殺気のコもった声を出した。どっちらこちに気がついたようだ。

「……………」

「答える！」

「人に名を聞くのに自分の名前を名乗ったらどうだ？」

「私はヴォルケンリッター烈火の将、シグナム」

「……………ゼロだ」

Zセイバーを構えながら言う。

「私は答えたぞ。お前は何者なんだ」

「あのよ…………シグナム」

「なんだヴィータ」

ヴィータと呼ばれる少女が、気が抜けた声で言う。

「二人で盛り上がってるところ悪いんだけど……………」

言いながらヴィータがはやてを指差した。

「気絶してるぜ？そいつ」



シグナムが覗き、ゼロが振り返る。

「ほえ〜」

そこではやては目を回していた。

病院

「あの、ゼロ君？」

「なんだ」

「あの人たちは誰？この季節にあんな格好は……………」

「知らん」

石田先生とゼロは4人のことを見ながら話す。石田先生はゼロのことをはやての「親戚」と認識している。

「あの、石田せんせ？」

「なあに？はやてちゃん」

「実はこの人たちも、うちの遠い親戚なんです。私の誕生日にサプライズで来てくれたみたいで……………」

（そんな言い訳が通るのか……………）

「あら……………そう、なの？」

通ってしまった。このあとはやてが何とかその場をまとめ、帰宅となった。

「……というわけです」

この後シャルと名乗る金髪の女性が自分たちの存在、そして「魔法」について説明を受けた。

「魔法……」

はやても驚いている。すると、シグナムがゼロを見た。

「結局聞きそびれたが、お前は何者なんだ？」

「俺はゼロだ」

「それはもう聞いた。見たところお前も我らと同じように、人間ではないようだ」

「俺は人じゃない。レプリロイドだ」

今度はゼロがヴォルケンリッターに自分のことを説明する。すると、シャルが口を開く

「次元漂流者ってことね」

「次元漂流者？」

「何かの力によって空間が裂けて次元断層というものができるの。」

それによって巻き込まれて、次元を移動するというものよ……でも、よくそれに巻き込まれて無事だったものだけだわ」

「というか、よく大気圏で燃えなかったな」

ヴィータと呼ばれる赤い髪の少女があきれ半分、関心半分という感じで言う。話がそれたが詰まる話、ゼロは世界規模の迷子というわけである。

「なるほどな……現状がすっかりと理解出来た。感謝する」

ゼロはお礼をいうと、置いてけぼりとなったはやてを見た。

「それで、お前はこれからどうするつもりだ？」

「せやねー……とりあえず闇の書の主として……」

4人は先ほどの話の「蒐集」というものの命令を受けるものだと思っ  
ているらしく。真剣な表情だ。しかし……

「主として、みんなの衣食住、私がすっかり管理せなあかんということやね」

「……は？」「……」

拍子の抜けた声が、4人から出た。

MISSION・03 「闇の書」(後書き)

はい、ヴォルケンズ登場です。タイミングにはいいかなと(笑)  
少しの間は平和ですが、そのうち本編へと続いていきます。なのは  
やフェイトたちの登場はそうとう後になるかもしれません。

MISSION・04 「ゼロの実力」(前書き)

どれだけ更新できるかわかりませんが、今日は力の限り更新していきます

## MISSION・04 「ゼロの実力」

闇の書の守護騎士、ヴォルケンリッターが八神家に受け入れられて数日。

「おはようございます、ゼロ」

「ゼロ、おはよう」

「よーゼロ！今日も早いな！」

「……ゼロよ、お前は休んでいるのか？」

上からシャマル、シグナム、ヴィータ、ザフィーラの順である。そしてゼロは決まって一言こう返す。

「……ああ」

ヴォルケンリッターも、はやてが蒐集を望まないことに驚いていたがはやていわく「他人に迷惑はかけてはいけない」だそうだ。蒐集をしないばかりか、ヴォルケンリッターははやてに普通の人間と同等の扱いとなった。武器はしまうこと。服は着ること。食事はとること。ゼロも食事はできないが、同じことを言われている。

「はやてっ！買い物行こう！」

「はいはい、ちょっと待ってな」

ゼロにとっては少し騒がしくなった程度だが、はやてにとってはま

た家族が増えたということ、喜びの笑みがあつた。

「……………」

「どうしたゼロ」

「何がだ？」

「いや、少し笑っている気がしてな」

シグナムに言われ、ゼロは自分の頬を触った。確かに、自然と笑みがこぼれていた。はやての笑み……はやての喜びが、かつての仲間のシエルに似ていたからかもしれない。ゼロは静かにその賑やかなひと時を味わっていた。

とある日

「ゼロ、私と戦って見ないか？」

シグナムにこんなことを言われた。

「何？」

「別に決闘ではない。簡単に身体を動かすだけだ」

言いながらゼロに木刀を投げてよこす。

「私の剣が、レプリロイドのお前にどこまで通じるかと思ってな」

「あきらめたほうがいいわよゼロ、シグナムは戦闘狂だから」

シヤマルが洗濯を干しながら言う。戦闘狂と聞いて、ゼロは自分の世界にいた戦士達を思い出した。自分を倒すために身体を強化してまで挑んできた者たちを。ゼロも思うものがあつたのか、木刀を握って庭へ出た。

「わかった、受けて立とう」

「そこなくてはな」

シグナムはにやりと笑い、同じように剣を構える。思えばゼロが誰かと戦うのは正体不明の男達以来である。

「いくぞ！」

「……来い」

- WARNING! -

シグナムが駆け出し、剣を振り下ろした。ゼロはそれを捌くと、そのまま脇腹へ一閃を繰り出す。シグナムはそれを喰らう前に一歩下がった。

「……（こいつ、やはりできるな）」

「……（私の一閃を捌き、私に攻撃を転じるとは……）」

互いに思うところがありながらも、二人は戦いを続ける。



「ふんっ！」

「はあっ！」

再び木刀が混じり合い、音が鳴る。二人の攻防は素晴らしく、どちらも引けをとらない。

「すげえ・・・シグナムと互角・・・」

「いや、それ以上だな」

ヴィータは驚きながら言うが、ザフィーラがそう付け加える。

「なんで？」

「よく見ろ、ゼロはあの場所から動いていないぞ」

そう、シグナムはさまざまな角度から攻撃を転じているが、ゼロはその場を動かさず防御しながら反撃をしている。

「ほんと・・・」

「あのような鮮麗な動きと攻撃はいったいどれだけの時と死線を開くぐりぬけたのだろうか」

ザフィーラたちは知らない。ゼロがかつてイレギュラーハンターとして戦っていたことを。

彼がどんな怪物であったのかを。そして、彼が本当の身体を持って

いないことを。

「はああっ！」

「つああっ！」

二人の渾身の一撃が激突する。そして均衡する。だが、そのときである。

バキンッ！

木刀が悲鳴を上げた。

「あらら、これじゃあ勝負は引き分けね」

「……………むっ」

「……………」

シグナムは汗を掻きながら、もっと戦いたかったと残念そうだ。ゼロは特に汗を掻くというものもないし、無表情だ。

「どうだったゼロ、私の剣は」

「……………そうだな、強い」

ゼロはそう言った。自分と互角に渡り合えるレプリロイドはそういない。さらに言えば、人間に近い魔力生命体のヴォルケンリッターが互角に戦えていることにゼロは驚いていたりもした。

「お掃除終わったで〜」

「終わったよー！」

「って、シグナム汗だくやん」

「はい、少しゼロと運動を」

運動というか、もう決闘に近いものだった気がしなくもない。

「そうなんか・・・ほんならヴィータ、買い物行こか？」

「うんっ！」

こうしてはやてはヴィータとシャマルを連れ、買い物へと出かけた。

「私はシャワーを浴びてくる。ゼロ、今の戦いまたやろうな」

「ああ」

ゼロは折れた木刀を置き、ソファアに腰をかけた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「どうした、ゼロ」

「いや、またか・・・」

「・・・・・・・・？」

ゼロは静かにZセイバーを持っていた。

「いったいどうした？」

「見張られている」

「何？」

ザフィーラは驚いて人型になる。

「……お前たちが目覚める少し前、一度襲撃に会った」

「なんだと？主は大丈夫なのか!？」

「監視対象はあいつかもしれないが、「狙い」は俺のようだ」

自分の命を狙う者がどこかにいる。そしてはやてを監視している。

「……消えたな」

「む……わずかだが転移魔法の後があるな」

「転移魔法？」

「ああ、私たちもできることだ。例えばこの家から散歩コースの公園に移動したいと願えば、魔力によって移動することができる」

「転送装置のようなものか？」

ゼロがたずねると、ザフィーラが頷く。

「うむ、それに近いだろう。だが一体誰が……？」

二人ははやてが帰ってくるまで、警戒を続けた。

これから始まる、一つの悲劇を知らずに

MISSION・04 「ゼロの実力」(後書き)

とりあえずVSシグナムでした。次から本編が始まっていきます。  
お楽しみに！

MISSION・05 「蒐集」(前書き)

いよいよ本編開始です

ちょっと眠いので寝ます。ではじいぞ

しばらくたったある日の検診の帰り。シグナムとシャマルは青ざめていた。

「どうした、調子でも悪いのか」

ゼロがたずねると、シャマルは首を振り、シグナムは顔を伏せたままだった。その次の日から、シグナムたちはしょっちゅう家を空けるようになった。

「みんな忙しくなってもうたなあ」

「・・・そうだな」

今はやてとゼロが家にいる。

「でもゼロはええんか？家にずっといて」

「別にしたいと思うことがない。今の俺にできるのは、お前を守る  
ことくらいだ」

「う、うちを守る・・・」

はやては顔を赤くする。

「どうした、調子でも悪いのか？」

「ちゃ、ちゃうねん！なんでもない！」



はやてが大慌てで首を振る。

「ゼロってこついつのうといよねえ……」

クロワールも呆れてため息をついていた。

数日後 午前0時

「よし、今日も行くぞ」

「ああ、目標まで達してねえからな」

「急ぎましょう」

「ウム」

はやてにデザインしてもらった騎士甲冑を纏い、シグナムたちは海鳴のあるビルの屋上にいた。だが、今日はイレギュラーがあった。

「待て」

「……!?」「……」

そこにいるのは、真紅のボディを輝かせた男、ゼロ。

「ぜ、ゼロ!?」

「……」

「連日急にお前たちがいなくなれば、気にもなる」

ゼロは一步前にでて、シグナムたちを見た。

「……あいつを守護するために作られた服だな」

「……」

「それを着て何をしようとしている」

「そ、それは……」

「蒐集か？」

「……」

ゼロの一言に、全員が驚く。まさか一度で見破られるとは夢にも思わなかったのだろう。

「だが蒐集はあいつに止められている。あいつのいうことに忠実なお前たちが約束を破ると思えん。何かわけがあるのか？お前たちがあいつのと約束を破っても蒐集をする理由が」

「……」

「なんだ」

「今から話すことは、主はやてには言わないでくれ」

シグナムが絞るような声で言った。

「ああ、わかった」

ゼロもシグナムの言葉に頷いた。

シグナムはゼロに話した。はやての身体が弱いが故に、闇の書の闇がはやての身体を蝕んでいることを。そして蒐集してはやてが力を得ないと、はやてが闇の書に蝕まれて死んでしまうことを。そしてここ数日、死ぬ気で魔力生物から魔導士にいたるまでがむしゃらにページを集めるために蒐集を続けてきたことを。

「……………我が主は永くない。闇の書の闇が蝕む限り」

「……………」

「だから、私たちは行かなければならないんだ」

シグナムが言う。ヴィータはいつの間にか泣きながら愛機「グラーフアイゼン」を握り締めていた。

「だからゼロ、このことは黙っていてくれ」

「……………断る」

「なんだとっ!?!」

「はやての命に関わることを、何故お前たちは本人に話さない」

「そ、それははやてちゃんが駄目って言うだろうし、それに……」

「本当にそうか？」

「え？」

ゼロはシグナムたちをにらみつける。

「この数ヶ月。お前たちはいったいあいつの何を見てきた？」

「主の……？」

「少なくともあいつは、俺やお前たちを『家族』だと思っている」

「！」

「お前たちは心のどこかで、あいつのことを信頼していないんじゃないか？」

ゼロの一言に、ヴィータが思わず叫ぶ。

「違う！あたしは！あたしたちは！はやてを本当の家族だと思ってる！今までの奴らとは全然違う！」

「なら何故、お前たちは約束を破る。そして何故道を一つに絞る」

「そ、それは……」

そう、現状を見ればはやてはどう思うだろうか？信頼されていない

と思ってしまうだろう。彼女たちに、言い逃れはできないのだ。

「……………それでも」

「……………」

「それでも、主はやてと暮らせる未来を作りたいのだ！」

シグナムが叫ぶ。ゼロはその言葉を聞くと、不意にエックスを思い出した。

誰とでも手を繋ぎ合わせられる世界を作りたいんだ！

「……………わかった」

「え？」

シグナムたちが少し驚いた顔になる。

「お前たちのことは、はやてに黙っていてやる」

「ほ、本当か「ただし」……………!？」

「『最低限人間に迷惑をかけない』これを約束しろ。そして……………」

ゼロは目を閉じ、決意を固めた目を開いた。

「俺も蒐集に参加させてもらう」

こうして、ゼロとヴォルケンリッターの蒐集が開始された。

数日後、とある管理外世界

「はああああああああっ!」

「ギヤアアアアアアア!」

砂漠に覆われた世界で、ゼロはZセイバーを振り下ろした。ムカデのような生物と戦っているのだ。そしてゼロのセイバーがチャージされ、それが振り下ろされた。

「てあっ!」

「!」

声にならないほどの咆哮が鳴り、ムカデはその場に崩れ落ちた。

「シヤマル、蒐集だ」

「え、ええ……」

シヤマルは参謀的役割だ。直接的な戦闘には向いていない。なのでシヤマルとゼロが組んで蒐集をしている。

「どっだ?」

「えっと、6ページ……まずはまずね」

「もう時間だ。合計で28ページ・・・十分な成果だ」

それにこれ以上だと家を空けることとなる。

「そうね・・・え!？」

突然通信が入ったのだろう。シャマルが通信をする。そして驚いた表情になった。

「大変よゼロ! ヴィータちゃんが魔導士の子供を襲ってるって!」

「なんだと!？」

ザフィーラからの通信によれば、ヴィータも自分の蒐集が少ないことを気にしすぎたゆえ、ゼロとの約束を破ったのだ。

「すぐに行くぞ。場所はどこだ」

「海鳴市みたい・・・急ぎましょう!」

「ああ」

こうして。二人は転移した。

MISSION・05 「蒐集」(後書き)

はい、ということまでゼロ君の辛ロイイベントでした。次回にようやく  
タイトル主人公の登場です。可愛そうなヒロインだ。だが断じてヒ  
ロインははやてなのでよろしく！

それでわw



MISSION・06 「時空管理局」(前書き)

ようやく本来の主人公たちの登場です。まあこの話の主役はゼロな  
んですけどね

MISSION・06 「時空管理局」

海鳴市

「つくそ……まだたりねえ！」

ヴィータは焦りながら空を飛ぶ。時間もないし、蒐集もできていない。すると、近くで巨大な魔力を感じた。一人の少女だ。そしてヴィータはゼロとの約束を破った。

「お前に恨みはねーけど、魔力もらうぞ！」

「話を、聞いてってばあ！」

ゼロとの約束を破り、魔力を回収しようとする。だが、それは金色の光にさえぎられた。襲った少女と年違わぬ少女だった。ヴィータは叫ぶ。

「てめえ、仲間か！」

「友達だ！」

（こいつ、できる！）

ヴィータは焦りながらも、敵の攻撃を避ける。先ほどの奇襲は上手くいったが、がチンコでやるにしてみれば、金髪の少女は強かった。

「私は時空管理局の囑託魔導師フェイト・テストロッサ。こっちはアルフ。今すぐ武装を解除して。そうすれば貴女には弁護の要請が

できる」

「るっせえ！そんなこと誰がするか！」

「そう・・・なら貴女を逮捕します！」

フェイトがヴィータに斬りかかる。だがその刃は別の刃に止められた。

「ぜ、ゼロ！」

「ヴィータ、あれほど約束を守れと言っただけだ」

「そ、それは・・・」

「説教は後だ。シグナム、ヴィータを連れて行け」

「む・・・私もやっと戦ってみたいのだが・・・仕方がない」

シグナムはヴィータを抱え、戦線を離脱した。

「あなたは？」

「・・・・・・ゼロだ」

「私は時空管理局の囑託魔導士、フェイト・テストロッサ・・・聞かせて、どうしてこんなことを・・・」

「戦場で、そんなことを聞いてどうする？」

凄まじい殺気がフェイトを支配する。そして直感した。駄目だ、この人に説得など通じないのだと。

「あなたを逮捕します」

「やってみろ」

Zセイバーを構えたゼロは、空中に静止するフェイトを見据える。風が吹いた瞬間、二人は動いた。

- WARNING! -

「はあああつ!」

「……!」

ゼロは空中から迫るフェイトにバスターを放った。だが高速の機動によってそれを避けたフェイトは愛機「バルディッシュ」を振り下ろした。ゼロはすぐにZセイバーに切り替えると、それを受け止めた。

「っ!」

「はあつ!」

チャージされたセイバーによって、フェイトが吹き飛ぶ。その反動でバルディッシュにひびが入った。

「……つく」

「やめておけ」

「!？」

「もう限界のはずだ。これ以上戦う意味はない」  
言って、ゼロはその場を離脱した。

八神家

「さて、説明しろヴィータ・・・何故約束を破った」

「・・・それは」

ヴィータは顔を伏せていた。

「別に俺との約束を破ったことを怒ってはいない」

「え？」

「『人に迷惑をかけない』というあいつの約束を何故破った」

「!」

ヴィータは思い出す。はやてが一番強く念を押ししていたことを。

「だ、だって・・・はやくしないと、はやてが・・・」

「それでも、あいつとの信頼を潰したのは自分自身だ」

「ゼロ、その辺にしておけ。確かにお前の言うとおりだ。ヴィータも含め、私たちは人間に多大な迷惑をかけた。だが、他人に構ってられる状況ではないことくらい、わかってくれ」

「……俺には、あいつとの約束を破っていることを蒐集しているからという言い訳にしか聞こえない」

「っ!」

「シグナム、ゼロも落ち着いて……もうやってしまったことはしょうがないわ!」

「……」

「それより厄介なものに目を付けられた。」

「時空管理局という組織のことか」

ゼロもヴィータと戦うフェイトという少女の名を聞いていた。だからその組織のことも聞いた。

「時空管理局……この世界では聞かないな」

「ええ……多分管理外なんじゃないかしら?」

「管理外?管理外でもあいつらは活動ができるのか?」

「多分……この世界に協力者がいるんだと思うわ……」

「……………そうか。なら今後の蒐集は警戒を強めるしかないな」  
こうして、一日は終わった。シグナムたちが眠りについたころ、ゼロはリビングにいた。エネルギーを補給しているのだ。

「ゼロ、大丈夫？」

「ああ、なんとかな……………」

ゼロに傷はないが、消費はしている。すると、ヴィータがリビングに来た。

「ゼロ……………」

「なんだ？」

「その、ごめん……………」

もじもじと言うヴィータ。だが、ゼロは特に気にしていなかった。

「別に気にしていない。次から気をつければいい」

「う、うん……………おやすみ」

「ああ」

こうして、今日も夜がふける。

一方、アースラ

「彼ら、何者なのかしら？」

結果的にヴィータに襲われた少女、高町なのははリンカーコアを蒐集された。フェイトも傷は軽いが、バルディッシュは重症。なのはの愛機「レイジングハート」も壊れていた。

「この4人は、魔力生命体のようだ。でも、これは……」

少年、クロノ・ハラオウンはゼロの映像を見ていた。

「解析した結果、彼は人間でも、魔力生命体でもない。機械なの」

アースラスタッフのエイミーが言う。

「ロボットってことか？」

「うん……でもあんな人に近い技術、今の管理局でも作れないよ……」

「もしかしたら、次元漂流者かもしれないわね……」

アースラ艦長、リンディ・ハラオウンが考える。なら、彼は保護の対象となるのだ。

「でも彼は、フェイトに危害を加えている」

「それは何かしら事情がありそうね……一度話が聞ければいいんだけど」



「……それにしても、この本は」

クロノはシャマルが持っていた闇の書を見続けていた。

デバイスルーム

「レイジングハート……」

「コアの損傷があるから、直るまではちょっとかかるって」

なのはは友人のユーノに説明を受ける。毎日特訓していたのに、一度の奇襲でボロボロにされたのだ。ショックは大きい。

「フェイト、大丈夫かい？」

「うん……でも、あの人何者なんだろう」

フェイトはフェイトで、ゼロのことを考えていた。凄まじい殺気と、力……あんなものに会ったのは初めてだ。

「フェイトちゃん、今度会ったら話を聞けばいいよ……きっと、何か事情があるんだし」

「うん、そうだねなのは……」

二人の少女にも、新たな決意と目標が立っていた。

MISSION・06 「時空管理局」(後書き)

フェイトと対決。まあ圧倒だw

でなのはとのOHANASHI フラグ立ちました・・・

MISSION・07 「謎」(前書き)

はい、ということで連続投稿。感想は今夜返させてもらいます

他の小説もその時に更新予定です。いや、更新できるように頑張ります

MISSION・07 「謎」

管理局との邂逅から数日、ゼロたちは人目につきにくい管理外世界での活動を終え、帰宅した。

「おかえり〜」

「ああ……」

「ゼロ珍しいやん、どこ行ってたん？」

「気晴らしの散歩だ」

我ながらこんな嘘をよく言えるとも思える。すると、今日は来客者がいた。

「あ、初めまして」

紫色のウェーブをかけた少女。はやてとそつ変わらないだろう。

「お前は？」

「月村すずかです」

「……ゼロだ」

はやての話によると、図書館で知り合ったそうだ。はやてはゼロを親戚だと言う。どう見ても怪しまれるのだが、すずかは特に疑いもせず笑顔で頷いていた。

「じゃあ、私はこれで」

「ゼロ、送ってあげてや」

「ああ……」

ゼロはさすがと家を出た。

「あの、ゼロさんは……」

「ゼロでいい」

「えと、ゼロは、あだ名……ですか？」

「いや、名前だ」

まあ、苗字も名乗らずゼロと言えばそうもなるだろう。すると、すずかはクスクスと笑う。

「面白い人ですね」

「そうか？」

「ええ、とつても」

この後会話をしながら歩き、迎えの車が来る場所まで差し掛かる。その時である。

キキイイッ！

「!?!」

突然ずかが黒いワゴンに連れ去られる。誘拐だ。

「つち!」

ゼロはダッシュでそれを追う。

「クロワール」

「何?ゼロ」

「先に行つて、場所を特定しろ」

「うん、わかった」

クロワールが先に飛び、サーチを促す。ゼロはただひたすら走り続けた。

とある廃棄工場

「くつくつく……月村家の令嬢か……」

「ああ、身代金を取るにはいい感じだな」

ずかには現在手足を縛られ、口を塞がれている。

「さて、身代金の要求は済んだし……この子を売る算段たてようか」

「んー！んー！」

「安心なお嬢ちゃん、お嬢ちゃんくらいの可愛さなら、どこの奴らも悪くは……」

男が手を伸ばした瞬間だった。

バシユウン！

何かのエネルギー弾がぶつけられた。

「ぐあああつ！」

「誰だ！」

「……」

そこにいるのは赤い閃光だ。金髪に、紅い装甲を纏った男。ゼロだった。ゼロは基本的に上着以外はすべて上から服を着て黒い肌の部分などを隠している。戦闘時にすぐこれを纏えるようにクロワールにヘルメットや武器を転送させたのだ。

「誰だテメエ！」

「……」

ゼロは無言で駆け出し、男を蹴り飛ばす。銃が放たれるも、ゼロはシールドブーメランでそれを弾く。

「なんなんだあいつ！」

「構わねえ！撃て撃てえ！」

拳銃がサブマシンガンやアサルトライフルに変わるが、それでも弾丸はゼロを捕らえることができない。人ではないそのゼロの身体能力で弾丸を避け、空中時に撃たればシールドで防ぐ。

「な、なんなんだあいつは……！」

「はあつ！」

「ギャツ！」

蹴りが飛び、男が吹き飛ぶ。通常ならこれで死ぬのだが、ゼロの最大限の配慮により気絶するだけだった。自分の世界では人間に手を上げればイレギュラーだが、人間が悪党ならそれも人間の中でのイレギュラーなのである。

「大丈夫か」

言いながらすずかのロープを取り、猿轡を取った。

「は、はい……」

「すぐに警察とやらを呼べ……そうすればこいつらの対処をしてくれる」

「あなたは、いったい……」



「俺は俺でしかない。俺は……ゼロだ」

「……………」

そう言い放つゼロを、すずかは頬を染めてただひたすらゼロを見続けた。

帰宅後、部屋に戻るとゼロは武器をメンテナンスする。普段は技師のセルヴェオがやるものだが、この世界に彼はいない。満足なものではないが、今回のように出力の調節も可能になっている。

「ん？」

Zセイバーから何かが落ちる。それは3枚のメモリーチップ

「これは……………」

炎、氷、雷のマークが入ったエレメントチップ。オメガ戦以降使うこともなかったのだが、どうやら最終決戦前にセルヴェオが入れていたようだ。もっとも、最終決戦でこのチップを使うことはなかったのだが……………」

「いずれ使うだろう……………」

言いながらZセイバーに組み込みなおし、メンテナンスを続ける。

コンコンッ

「誰だ？」

「私だ・・・」

声の主はシグナムだった。

「入れ」

ゼロが言うと、シグナムが部屋に入る。

「どうした」

「いや、ザフィーラに聞いたのだが・・・前に襲撃を受けた・・・」

「ああ、一度な」

「ここ最近、確かに妙な気配がある。結界を張ってはいるのだが・・・どう思う??」

ゼロは少し沈黙するが、答えを出した。

「闇の書を狙う・・・ということかもしれん」

「何?」

「いくつか思うものがある。闇の書を知る誰かが、その力を手に入れると考える・・・という考えだ」

かつてのレジスタンス司令官エルピス・・・彼は闇の力を得るために暴走し「英雄」になりたいがため、エックスを破壊するという

暴拳にまで出ていた。

「だが、闇の書は完成したら主はやてしか使えんぞ」

「・・・なら、闇の書に恨みを持っているかもしれない」

「恨み・・・？」

「お前たちと闇の書は主を失えば次の主を探すのに動くらしいな」

「あ、ああ・・・」

「ならあいつが主になる前のことはどうだ？」

「・・・・・・」

シグナムはそこで黙った。確かに闇の書が起動するのはランダムだ。自分たちが何かをしたのか、闇の書の暴走か・・・いずれにしろそれによつて誰かしらが死んだら？その死んだ人間のために誰かが動くかもしれない。

「シャマルに聞いたが、闇の書は破壊不可能だと聞く。ならあいつごとどこかに封印するということもある」

かつてエックスがダークエルフとしてマザーエルフを封印したように、そんなことを考えている輩がいるかもしれない。

「・・・確かに考えられる。だが・・・」

「ああ、それを誰がしているのか・・・だ」

そう、闇の書を知り、ゼロがいったうちのどれかを実行しようとする誰か……

「誰かというよりも、組織……」

「組織？」

「時空管理局」

「何？」

「時空管理局……この世界に干渉しているなら、理由もあつ確かに、管理外で時空管理局を名乗り現われるなら、そういう理由かもしれない。」

「組織的にこちらを攻撃している？」

「さあな……組織的なのか、それとも組織にいる人間が複数あるいは個人で行っているのか……いずれにしろ」

「言いながらゼロは立ち上がる。」

「俺があいつも、お前たちも守ればいい」

「……ふふっ」

「どづした？」

「いや、頼もしいよ……頼むぞ、ゼロ」

「ああ……」

シグナムは思う……ゼロは本当に、私たちを救ってくれるかもしれない……と。だからこそ、あんな風に自然と笑みが零れたのかもかもしれない

MISSION・07 「謎」(後書き)

ゼロの頭がよくキレるのがわかる話でした。そしてすずかフラグ(笑)

アリサがまだ出てませんが、そのうち出します。それも最悪な形でW最悪って? ヒントをあげましょう

アリサの家柄

すずかと同じ状況

なのはのお話フラグ

アリサの性格

ここまでくればわかると思います。次回もお楽しみに!

MISSION・08 「圧倒的な力」(前書き)

皆さんお待ちせしました、執務官Kのフルボッコでございます。私としてはゼロが本音をぶつけまくればこうなるとは思ったので、書いてみました。

今回ゼロがちょっと姑息なことになりますので、ゼロファンの人、お願いだから石を投げないでください。

MISSION・08 「圧倒的な力」

さらに数日が経ったある日、ゼロは珍しく休んでいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ゼロ、どないしたん？」

「いや・・・・・・・・」

理由は簡単だ。シグナムたちの帰りが遅い。この時間帯なら、もう帰ってきてもおかしくはない。最近ゼロは働きすぎということだ、今日は家にいる。レプリロイドの彼には特に休日というものはいらないのだが、彼女たちなりの配慮である。すると、シャマルから電話が入った。ゼロも携帯電話を持っている。

「・・・・・・・・どうした？」

『大変なの・・・シグナムとヴィータちゃんが結界に閉じ込められて』

「わかった、すぐに行く」

こうして電源を切り、リビングへ戻った。

「あいつらの帰りが遅い、探してくる」

「ほえ？」



「夕食の準備をして待ってる」

「う、うん……気をつけてな」

「ああ……」

こうしてゼロは、八神家を飛び出した。

「シャマル」

「あ、ゼロ……ごめんなさいね」

「いや……それより状況は？」

「どうやら管理局の魔導士に囲まれたみたいなの」

結界が張られているところを見ると、閉じ込められたようだ。

「なら、この周囲にも時期に敵が来る。移動するぞ」

「ええ……」

「待てっ！」

移動しようとするゼロたちに、声がかかった。そこにいるのは一人の少年だ。

「時空管理局執務官のクロノ・ハラオウンだ……ロストロギア不正所持の容疑で拘束する。投降をすれば弁護の機会もある。直ち

に武装を解除しろ」

「……………」

「それと闇の書の主はどこだ……教えろ」

クロノがデバイスをゼロたちに向ける。ゼロはそれに答えるように、Zセイバーを構えた。

「何のつもりだ」

「お前に言う義務も、理由もない」

「義務ならある！僕は時空管理局の執務官だ！」

「この世界に管理局などない……管理外であろうこの世界で、お前たちの法律は利かない」

「なんだと！」

ゼロの言葉に、クロノが怒りの表情を浮かべる。

「もしこいつらや俺たちが何かをした場合、裁くのはこの国、この世界の制度だ」

「貴様つ……………」

クロノのデバイス「S2U」を持つ手の力がこもる。ゼロはそれをお構いなしに続ける。

「この世界でお前たちに活動する権限はない。なのにお前たちはただ力を誇示し、都合のいいように動かしているだけだ。」

「黙れっ！」

クロノが叫び、魔力弾が飛ぶ。ゼロはそれを斬り、Zセイバーを構えた。

「クロワール」

「うんゼロ、今はちゃんと録画したよ」

「何!？」

「世界を管理する世界の人間が管理外の人間に攻撃する……お前たちの世界のメディアとやらが知ったらどうなるだろうな……」

「

そう、ゼロの狙いはこれだった。元々はクロワールの考えた手だ。かつてのドクターバイルがコピーエックスMk-2を倒したときにやったように、事実を作りだし不正を手に入れる。しゃくなやり方だが、組織を相手にするには合理的なやり方だ。

「ネオアルカディア同様、貴様らの正義は所詮作り物だ……」

小さく呟く。そう、管理局の行動……それは管理外世界に誰の許可もなく結界を張り、人々の生活に害をなし、それを力でもみ消す……それは人々を守るためという『偽者の正義』を掲げ、不正にレプリロイドを処分するネオアルカディアと同じだった。

「貴様あ！」

クロノがステインガーを放つ。

「シャマル、俺の後ろにいる」

「え、ええ！」

シールドブーメランを展開して球を弾くと、それを投げる。

「ットウア！」

「何！？」

さらにバスターをチャージして、それを撃つ。

「こんなもの当たるか！」

「どつだろつな」

この時クロノはバスターを避けたことで忘れていた。「ブーメラン」という武器の特性を。

「うわあ！？」

戻ってきたブーメランが命中し、地面に叩きつけられる。

「ぐ……あ……」

「油断したな……それで執務官とは情けない奴だ」

クロノは苦虫を噛み締めるような表情になる。クロノの『油断』を作らせたのはもちろんゼロ。理由は簡単だ。ブーメランと同じ機動にバスターを放つ。バスターを放てば遅いブーメランよりもそちらに目が行くだろう。だがブーメランは機動を曲げ、バスターはあさつての方向へ行ってしまう。そうならばゼロは武器を一つ失う。そこでクロノは勝機を見つける。さらに相手のチャージされた砲撃を見れば、ゼロが無防備だと錯覚する。それにより、完全にクロノは油断をしてシールドブーメランの攻撃を受けたのである。

「悪いが、時間も無い。通らせてもらう」

「ま、まだまだ……！ここでお前を通らせるわけには……」

言って、クロノが立ち上がった瞬間だった。

「がっ！」

クロノが蹴り飛ばされる。そこにいたのはゼロを襲撃したあの仮面の男だった。

「お前は……！」

「使え……」

「え！？」

仮面の男は闇の書を指差す。

「仲間を助けたければ、闇の書を使え……ページはまた集めれ

ばいばい」

「……………」

シヤマルは悩んだ。ここで使うかどうかを……

「シヤマル」

「え？」

「撤退しろ」

「でもっ……！」

どうやら仮面の男の言葉に悩んだままのようだ。

「俺に考えがある。ここは俺を信じる」

「……………ええ、わかったわ。あなたを信じる」

「結界を破壊したら、すぐに転移して逃げろ。俺も終わったら連絡する」

「わかったわ……急いでね！」

こうして、シヤマルは転送する。

「貴様……………」

「……………」

「イレギュラーなお前にこれ以上邪魔をされるわけにもいかない・・・ここで死ぬ」

「イレギュラー・・・か」

確かに自分は元の世界でも、この世界でもイレギュラーである。だがそんなことは関係ない。少なくとも、ゼロ自身にとっては。

「そんなことは関係ない・・・邪魔をするなら斬るまでだ」

WARNING!

ゼロはZセイバーを構えて駆け出した。

「せあっ!」

セイバーを振るうと、男は避けて蹴りを繰り返す。だがそれをガードし、再びZセイバーを振るった。それは見事に命中する。

「ぐっ・・・!」

「浅いな・・・」

斬り傷はそんなに強いものではない。

「二人いないところを見ると、一人はどこかで俺を見張っているな」

「っ!」

「二人がかりでも俺には勝てなかったはずだ。一人で勝てるわけないだろう」

「黙れっ！」

男は再び拳を突き出す。

「そんな攻撃、俺には効かん」

ゼロはそれをあつさりと避け、至近距離からバスターを放った。

「ぐあっ！」

男は吹き飛ばされ、地面に転がった。

「終わりだ」

「はあっ！」

「！」

もう一人の仮面の男が乱入し、転移して消えた。

「………逃げたか」

「ゼロ、早く助けないと！」

「そうだな……クロワール」

「なあに？」



「一時的に俺へのエネルギーを上げる」

そう、ゼロの策はこれである。

「でも、大丈夫？」

「知らん」

「もう、ゼロはこういつときアバウト……」

「いいから早くしろ」

ゼロの言葉に、クロワールは頷く。

「わかった、行くよ！」

ゼロの身体にエネルギーが集中する。それはZセイバーへと駆け巡り、翡翠のZセイバーが赤紫色へと変わる。これはかつてオリジナルゼロ……オメガのZセイバーと似ていた。

「ハアアアアアッ！ハアッ！」

チャージされたセイバーが結界を割った。ガラスのような音を立てて割れる。すぐにゼロは携帯電話でシャマルに連絡する。

「シャマル、転送を頼む」

『ええ、わかってるわ！』

こうしてゼロは転移した。

幾重にも転送し、ゼロたちは帰宅した。

「帰ってきたぞ」

「あ、お帰り！」

はやてが夕食の準備を終えて待っていた。

「もう、みんな遅いで！」

「すまない、探すのに時間がかかった」

「ごめんなさいねはやてちゃん」

「ごめんはやて・・・」

「主はやて、すみません」

「主、申し訳ない」

全員が謝ると、はやてはニッコリと笑った。

「ほな、夕飯にしょか」

こうしてシグナムたちは夕食となった。

はやてがシャマルとヴィータと風呂に入っているころ、ゼロはシグ

ナムとザフィーラから話を聞いた。先日の少女たち……高町なのはとフェイト・テストロツサが自分たちと同じカートリッジシステムで対抗してきたことを。ゼロも、仮面の男の話をした。

「なるほど……強力なものを手に入れたのか……」

「ああ、次回以後、敵と戦うのが厄介になる」

「だが、お前たちなら負けないだろう」

「そのつもりだ」

シグナムから笑みがこぼれる。歴戦の猛者の余裕の表情といったところだ。

「だが何よりも……」

「？」

「奴と、テストロツサと戦うと心が躍る」

生粋の戦闘馬鹿である。

「それにしてもゼロ、お前にまた奇襲があつたと聞いたが」

「ああ、仮面の男だ。二人組みのな」

「二人組みの……」

「シャマルに闇の書の使用を促したり、ゼロを倒そうとしたり……」

・なんなんだ」

そう、謎だ。闇の書を知っていることは間違いないが、行動の理由が不明だ。協力するなら戦力となるゼロをイレギュラーとして処分しないだろうし、敵なら脱出の方法を促さないはずだ。

「どちらにしろ、あいつらの対応は俺がやる。」

「ああ、そのほうがよさそうだな……それと、ゼロ」

「なんだ」

「今日はお前に助けられたな」

シグナムが言うと、ゼロは特になんでもないという表情になった。

「別にたいしたことじゃないだろう」

「いや、闇の書のページは減らなかったし、みんな無事だった。ありがとう」

(ありがとう……か)

ゼロはその言葉が少しだけ嬉しかった。

「ああ……」

お礼を言われることは主にシエルやネージュだった。それ以外でも頼られる存在として、お礼を言われても特に何も感じなかったが、今は違う。ゼロの心のどこかに、人のような感情が芽生えたのかも

しれない。

MISSION - 08 「圧倒的な力」(後書き)

いかがでしたか？クロノにまさかの - WARNING - がからな  
いという(笑)

とりあえず今回はゼロがクロノに対処したら・・・というものでし  
た。クロワールがどんどん小悪魔になっていきますが、多分大丈夫  
でしょう。次回はとうとう・・・です。お楽しみに！

MISSION・09 「最悪の再会」(前書き)

というところで予告どおりマリサ登場です

で、やつとも再会です。今回は戦闘はありませんが、色々ギャグ要素があったりなかったりw

ではごいそ

MISSION・09 「最悪の再会」

管理局との戦闘から数日。仮面の男の気配はピタリと止んだ。どうやらゼロが気配を読んだことを気づいたらしい。そして今日は、珍しく全員がいる朝だ。みんな予定と蒐集をこないしているのだが、今日は全員がいる。

「さて、今日は検診や」

「そうでしたね、急いで支度しましょう」

「あー」

はやてが思い出したかのように声を上げる。

「どうしました、主はやて」

「買い物忘れとった。今日タイムサービスやん」

「そついえば……」

八神家では現在ゼロを除く5人が食事をしている。結構な食費だ。なのではやては極力安いものを選んでいる。

「でも今日はあたし老人会でゲートボール大会だし……」

「私は剣道の道場で稽古だ」

「私ははやてちゃんについていかないと……」



「我では人型でも怪しまれる」

そんな話をしていると、一斉にゼロへ視線が来た。

「俺……か？」

「ほかに誰がいる？」

「……………」

確かにそのようだ。結局ゼロが行かなければいけない。

「メモと財布をよこせ、行ってくる」

「これも任務だよゼロー！」

こんな理不尽な任務があつてたまるかと、ゼロは内心で想っていた。こうして、ゼロは家を出た。

とあるスーパー

「（次は人参！あれだよ！）」

「あれか」

ゼロはクロワールをパーカーの下に入れて、どれがどれなのか言わせる。クロワールは普段はやての手伝いをしているので材料である食材を大体記憶している。高いか安いかわか、質はいいか悪いかもわかる。サイバーエルフにこんな使い方があったとは、驚きである。

「で、次は緑茶の茶葉・・・」

「（シグナムの愛用はあれだね）」

「砂糖とこれは・・・なんだ？」

「（シヤマル、今度は何を作るんだろ・・・）」

クロールの声がちよつと震えていた。

「毛繕い用のくし・・・」

「（アレだと思うよ）」

「ポテトチップス」

「（アイス溜めてたからだね、ヴィータちゃん）」

とりあえず一通りを終えたゼロは、レジで買い物済ませた。とりあえず終わった。タイムセールは間に合ったし、必要なものも買った。

「後は帰るだけ「おらっ！早くしろ！」・・・？」

少し離れた場所で、女の子が連れ去られそうになっている。

「（ゼロ、アレってゆーかいだよ！）」

「そうだな・・・」

「（ほら、助ける助ける！）」

言われてゼロはため息をつく。いつの間に自分は人助けの便利屋になったのだろうか。

「おい、やめろ」

車に少女をつめようとする男の腕を掴む。

「な、なんだてめえ！邪魔だ！」

男の拳がヒットする。

ボキッ！

が

「いつてえ！」

折れたのは男の骨だった。ガードした鋼鉄の手に、人間の手がぶつかればそうもなるだろう。

「このっ！」

再び拳が飛んでくるが、ゼロはそれをよけ、回し蹴りを放った。

「うわあ！」

数人が飛ぶ。そして今度はナイフが飛び出る。

「死ねっ！」

「握りが甘い」

「え！？ぎゃあっ！」

突き出したナイフが弾き飛ばされ、顎に一撃を受けた。男はその場に倒れた。

「大丈夫か」

誘拐されかけていた少女は驚きながらゼロを見ていた。

「え、ええ……あ、そうだすずか！」

聞いたことのある名前だった。見ると、ワゴンの中に手足を縛られたすずかがいた。

「……………（こいつはよく誘拐されるな）」

そんなことを思いながら、すずかの拘束を解いた。

「大丈夫か」

「は、はい……また助けてもらっちゃいましたね」

と、顔を赤らめながらすずかが言う。

「お前はもう少し用心しろ」

「はい、気をつけます」

「さすが、この人知り合い？」

「うん、私のお友達の親戚の人」

と、さすがが紹介する。

「あたしはアリサ・バニングス。すずかの友達よ」

「ゼロだ」

「ゼロって、あだ名？」

「本名だ」

なんてすずかと同じ会話をする。アリサは納得しないが、すずかはまたクスクスと笑っていた。この後警察が来て、ことが収まった。

「ではな」

「あ、ゼロさん！」

「なんだ」

すずかがゼロを呼び止めた。

「そのお礼させてくれませんか？」

言われて、ゼロは首を振る。

「いらん」

「ちよつと、そついう言い方ないんじゃない？」

と、不機嫌そうにアリサがいう。

「帰りを急ぐ」

「ちよつとくらいいいじゃない」

「食材が腐る」

「そんな長居させる気ないわよ」

「だからな……」

「拒否権なし！とつと来なさい！」

ゼロはこうして半強制的にアリサとすずかに引っ張られて連れて行かれた。現在は大通りを3人で歩く。

「どこへ向かうつもりだ？」

「翠屋さんっていうケーキ屋さんです。とってもおいしいと評判なんですよ」

「俺は……」

ここで迷ったのは一つ。食事についてだ。食べれないというのにも数通りどうするか迷う。素直に食べれない理由を話すか、それとも誤魔化すか……だがその誤魔化す方法がわからない。

「(ゼロ、こついつたら?)」

「(……ケーキは苦手だ)」

教えられたとおりに言う。すると、さすがクスクスと笑う。

「大丈夫ですよ、ケーキだけじゃありませんから」

「いや、そうではなくてな……」

「ほら、ついたわよ」

そんなことをしているうちに、ついてしまった。

「……(離脱するか?)」

とも考えたが、ここでシャマルに連絡して転送などしたら、非常にまずい。仕方なく、ゼロは店に入ることにした。すると、店員に迎えられる。

「あ、いらっしやいすずかちゃん、アリサちゃ……」

小さな店員……高町なのはがそこで言葉を止めた。そこにもと違う人物否、自分たちが追っている犯人が目の前にいる。武装形態でなくても、その金髪と鋭い目は忘れることはできないだろう。

「あの、すずかちゃん、後ろの人誰？」

「えっとね、こちらはゼロさん。私の友達の親戚の人で、さっき私たちのことを助けてくれたの」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ゼロも気がついた。あのときヴィータが襲った少女なのだ・・・と。奥の席にはフェイトもいた。

「フェイト、あんた何してるの？」

「ううん、なんでもないよ」

こんな状況でも、ゼロはとりあえず席に着いた。

「何食べます？」

「いや、食欲がなくな・・・」

「そうなの？なら持ち帰りように包んでもらいなさい」

「（ゼロー！私あの白いの！）」

「（お前食べれるのか？）」

「（アルエツトが調節してくれたよ！）」

食事はEエネルギーのはずだが、確かに最近食事をしていた気がする。サイバーエルフも進化したものである。あの優しいアルエツト



のことだ。クローフルを大切に育てていたらしい。だがプログラムであるクローフルが食事というのは、ありえないというか、謎だ。

「ならその白いのをもらおうか」

「ほう、お目が高いね。それは妻の自信作だ」

「そうなのか」

体格のいい男がやってきた。この店の店主だろう。そしてその妻らしき女性があらあらと言っている。

「あとは、あいつらにも買っていくか」

言いながら数個ケーキを選ぶと、包んでもらう。それまで時間があるので、そこで待った。アリサとすずかはなのはたちと喋っているが、そのなのはとフェイトはゼロを見続けた。

「君は、何かを背負っているようだね」

「何？」

突然の店主の言葉に、ゼロは驚く。

「この年になるとわかるものさ。君の目を見ればね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何を背負っているか知らないが、あまり一人で背負い込まないことだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・店主」

「なんだい？」

ゼロはケーキの入った箱を受け取り、後ろを向いた。

「感謝する」

「どういたしまして」

「ゼロさん、もう帰るんですか？」

「ああ、用事的时间が早まった」

「でもまだ何も奢ってないわよ」

「気持ちだけで十分だ。ではな」

こうしてゼロは店を後にした。

### 海鳴市臨海公園

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ゼロはなのはたちに悟られないように遠回りで移動をしたが、異変に気がついた。夕方だからかもしれないが、人がいなかった。そう思った瞬間、周囲が結界に覆われる。

「・・・・・・・・」

目の前に白い服を着た少女と、黒い服を着た少女が現われた。

「あ、あの！私高町なのはって言います！」

白い悪魔が光臨した。

MISSION・09 「最悪の再会」(後書き)

というわけで悪魔との邂逅でした。次回は戦闘なのでお楽しみに・  
・

なのは「私、白い悪魔じゃないもん！」

秋風「あーあー聞こえない」

なのは「お話なの！」

秋風「あ！ちよつと待って！やめて！あーっ！」

ゼロ「・・・救えんな」

クロワール「秋風しんじやったー」

MISSION・10 「説得」(前書き)

さて、ついに出てきたあく・・・ゲフンゲフン、なのは、どんなことをするのかお楽しみに

そして全国のフェイトファンの皆さん、ごめんなさい

MISSION - 10 「説得」

「あ、あの！私高町なのはって言います！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ゼロの前に、高町なのは、そしてフェイト・テストロッサが現われた。後から犬の耳をもった女性と人間の少年がも降りてくる。

「あの、貴方がゼロさん・・・・・・・・ですよね」

「・・・・・・・・ああ」

ゼロは言いながらクロワールにヘルメットを転送させ、Zセイバーを手に取った。

「俺がゼロだ」

「あの、どうして闇の書を完成させようとするんですか!?!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あれは危険なものなんです。なのにどうして?」

なのはが言う。だがゼロは答えない。

「あなたはその、守護騎士じゃ・・・・・・・・ないんでしょう?」

どうやらゼロのことはすでにわかっているようだ。人でもなければ、

魔力生命体でもないということ。

「……お前たちには関係ないことだ」

「関係あるよ！私たちだって協力できるかもしれない！」

「余計なお世話だ。それに、偽りの正義を振りかざす<sup>おまえたち</sup>管理局は信用できない。第一、この管理外と呼ばれる世界でお前たちに何の権限がある」

ゼロの言葉に、フェイトが黙るが、なのははあきらめない。

「でも私、管理局員じゃないの！」

「何？」

「民間協力者……私、局員じゃないよ」

「だったらなんだ？」

「すずかちゃんやアリサちゃんと友達だったよね」

「……」

ゼロは答えないが、なのはは続ける。

「敵同士でも、きつと分かり合える、私……ゼロさんと友達になりたい」

「なのは……」

フェイトがなのはを心配そうに見る。本気なのだ。なのはは、ゼロたちの力になりたいと本気で思っているようだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ゼロは考える。この少女、高町なのはは確かに信じられる。だが彼女が局員でないにしろ、繋がっていることには間違いない。フェイトも、なのはと同様、こちらを何とかしたいのだろう・・・・・・だが、管理局員全てが、なのはのような人間であるはずがない。

「お前たちは、確かに信頼できるかもしれない」

「じゃあ！」

「だが、お前たち以外の人間は、信頼できん」

「え！？」

なのはが驚いた表情になる。

「デバイスには通信機能がついているはずだ。今もどこかで、この状況を見ている人間がいるはずだ。そういう汚い連中を、俺は信用しない」

「で、でも！アースラのみんなは優しいからきつと！」

「優しい・・・・か」



この前の執務官の男を見て、優しいという人間はこの世に何人いるのだろうか。

「それに、俺達の目的を知って、本当に協力するとも限らん」

「一応言えば、自分たちのやっていることは犯罪だ。それに管理局という正義を振りかざす連中が手を貸すとも思えない。

「どうしても、駄目なの？」

ゼロは考える。どうやってこの状況を切り抜けるか。すると、一つだけ思いつく。かなり高確率で脱出することができるのが。

「……なら、一つ提案しよう」

「提案？」

「今から、お前たち4人で俺にかかってこい。それで勝てたら、話をしてやる」

「本当に、それでいいの？」

「ああ、だが……」

いいながらバスターを抜き、草むらの方向へバスターを撃った。すると、バラバラとなにかが壊れた。

「誰の監視もなしで……だ。ちなみに俺が勝ったらこの話はなしだ」

「私たちが勝つたら、お話聞かせてくれるの？」

「ああ、嘘は言わない」

「わかったよ、勝つてお話聞かせてもらうから」

「なのは、絶対油断しないで。この人すごく強いから」

「うん、わかったよフェイトちゃん」

「アルフとユーノもね」

「うん、フェイト」

「わかった」

そう言ってそれぞれがデバイスを取り出した。

「レイジングハート・エクセリオン」

「バルディッシュ・アサルト」

『スタンバイデイ』

「セーット・アップ！ドライブイグニション！」

二人の体が光に包まれた。それぞれがバリアジャケットを纏う。この前より少し形状が違っていた。どうやらアレがシグナムの言っていたパワーアップらしい。ゼロもZセイバーを構えた。

WARNING!

「はあっ！」

フェイトがバルディッシュを構えて襲い掛かる。ゼロはそれを受け止めると、そのまま振り払う。だがその背後からアルフが拳を突き出した。

「はっ！」

「遅い！」

しゃがんで足を蹴り飛ばす。それによってアルフがバランスを崩す。そしてそのままガードの上から蹴り飛ばす。

「アルフっ！」

「シューット！」

空中にいたなのはの攻撃が炸裂する。ゼロはそれをバスターで迎撃しながらも避けた。

「ええ！？？」

「はあっ！」

ある程度飛んで行ったのを見ると、今度はフェイトが攻撃をしかけてきた。かなりのスピードで切り掛かってきた。切り掛かろう

とした時。それを避け、体制を崩した所で、バルディツシユを掴んで投げ飛ばす。

「キヤア！」

「アクセルシューター・シュート！」

再びなのはがアクセルシューターを飛ばしてきた。それを難無く回避したがそれはすぐにまたゼロに向かって飛んできた。恐らく追跡タイプなのだろう。その場で回避し続けたが埒が明かない。そう思いゼロはその場から離れた。ある程度距離を取って飛んでくる光球をすべて弾き飛ばす。

「また！？」

「この！」

その隙をついて、アルフが攻撃するが、それはおとりだった。

「ふんっ！」

「うあっ！」

再び吹き飛ばされるアルフ。そして追い討ちをかけるように、バスターを撃ちはなった。すると、アルフの足が凍りついた。

「な！」

「しばらく大人しくしている」

そう、ゼロが撃つたのはただのチャージショットではなく、アイスチップを組み込んだ弾丸だ。これなら足止めにはなるだろう。

「ストラグルバインド！」

ユーノと呼ばれた少年がゼロの手足を縛る。だが……

「ふんっ！」

「ええ！？」

力任せにそれを撃ち破った。そして再びアイスのバスターを撃ちはなった。それにより、木とユーノの腕がくっつく。

「しまった！」

「これで後二人「デイバイン、バスターッ！」っち！」

桃色の閃光が上から降ってくる。まるでクラフトの砲撃だ。

「はっ！」

シールドブーメランを投げてけん制する。

(さて、どうするか……)

遠距離からの強力な砲撃に、近距離では大型の刃……コンビネーションも高い。どうしたものか……

「(ゼロ、どうするの?)」

「……………」

攻撃を片方に集中するのは難しい……

「（ゼロ、これを……）」

「……………」

クロワールが差し出したのはかつて使っていた武器のデータだった。

「これは……………」

「はあああっ！」

フェイトがバルディッシュで襲い掛かる。だが、それは弾かれる。

「え！？」

ゼロのZセイバーは鞭のようになり、ゼロの周囲を舞う。その武器の名はチエーンロッド。かつての戦いで使用したトリプルロッドからの発展武器である。ゼロの攻撃要領によって活かされるその武器は、ものに引っ掛けてそれを引き寄せすることもできる。

「はあっ！」

チエーンロッドが伸び、なのはの足を絡み取った。

「ええ！？」

「はっ！」

「きゃあ!?!」

「なのは！」

なのはが地面に叩きつけられた。フェイトはすぐに駆け寄ろうとしたが、ここで背を向けたらまずいと悟ったのか、そのままゼロへとバルディッシュを振り下ろした。

「甘いな……」

なのはへの心配の焦りによって生まれた隙を、ゼロは見逃さなかった。ゼロナツクルに換装した腕を、フェイトの腹部に叩きつける。

「ガッ……ハ……」

ある程度手加減はしたので気絶程度だ。だがしかし、そこでゼロにバインドがかけられた。戦闘不能となった二人分のバインドだ。

「なのは!」

「うん！ゼロさん受けてみて！これが私の全力全開！」

先ほどとは比べ物にならない魔力がなのはに集中していた。

「スターライト！」

「つく！」

「ブレイカー！」

桃色の砲撃が、ゼロに向かう。

「クロワール……」

クロワールを呼んだ瞬間、スターライトブレイカーは直撃した。

「やった……？」

なのはが勝利を確信する。バインドで縛られ動けない以上脱出は不可能だ。さらに今まで以上に力を込めたスターライトブレイカー……無事であるはずがない。だが、そのなのはの予測は外れることとなる。そこにいるのは赤い閃光……ゼロだ。シールドブーメランを構えたゼロは無傷ではないにしる、その意識は健在だった。

「嘘!？」

「今のは、効いたな……」

「どうやって、スターライトブレイカーを……」

「……この世界の魔法とやらは、プログラムを組んで形成されるものだ。クロワールはサイバーelf……プログラムだ。バインドに逆に入り込み、それを破壊。さらに防御力をクロワールで底上げすれば、耐えることができる。」

そう、クロワールはナース、アニマル、ハッカーの全ての能力を引き出せるelfだ。その中には防御力を二倍にするというものがある。それにクロワールのような高性能のelfなら、バインドのプ



プログラムを破壊することなどわけがない。

「さて、これで決着だ」

「っ!」

再びレイジングハートを構えようとしたが、ゼロのほうが早かった。

「あっ……」

ゼロの手刀が、なのはの首筋にヒットした。それにより、なのはは気を失う。

「俺の勝ちだ」

なのはとフェイトを抱きかかえ、その辺のベンチへと寝かせる。さらにバスターを構えて凍りついたアルフとユーノの氷を破壊した。

「さて、俺は帰る」

「待てっ!まだ……」

「なんだ、まだやるのか?なら……」

今度は先ほどとは比べ物にならない殺気が支配する。

「手加減はしないぞ」

「っく!」

「はあっ！」

チャージされたセイバーで結界を破壊し、ゼロはその場を脱出した。

八神家

「帰ったぞ」

「ゼロ、お帰り……って、お前どうしたんだよ！」

ヴィータが叫ぶ。まあ、ところどころ黒こげならそうもなるだろう。だがゼロは冷静だった。

「食品を整理してから話す。お前も手伝え」

「う、うん……」

この後食品を整理し、そこにいたシグナム、ヴィータ、ザフィーラに話した。

「なるほどな……町で偶然」

「ああ、これからは今以上に警戒を必要とするだろう」

「でも4人相手でも負けないってやっぱゼロはギガ強いな」

ヴィータのギガ強いというのはよくわからないが、とりあえずゼロは圧倒した。これ以後、彼女たちはそれ以上の対策でこちらに望んでくるだろう。

「まあなんにせよ、お前が無事だったんだ。よしとしよう……」

「そうだな……ああそうだ、ゼロ……お茶は買ってきてくれたか？」

「ああ、いつも置いてあるところだ」

「わかった、ありがとう……」

言って、シグナムが台所へとむかった。ゼロはため息をついてソファへ座った。

（この先、どうしたものだろうな……）

ゼロはあの必死に自分を説得した少女のことを考えて、眠りにつくことにした。

MISSION・10 「説得」(後書き)

はい、ということまでゼロのチェーンロッドでした。私としては3のリコイルが一番好きですね。アレ使ってジャンプするの楽しいしw  
で、フェイトファン、ごめんね・・・色々大変だったの  
お願いだから石を投げないで

ではまたw

MISSION - 11 「信頼」(前書き)

再びなのはと対決です。最近寝てないな・・・

MISSION - 11 「信頼」

なのはとの戦いから数日。ゼロはヴィータと共に、無人世界へと足を運んでいた。

「あっじ〜・・・」

「ああ、かなり」

身体が機械のゼロにとっては、こんな世界はごめんだ。

「どうせなら夜のほうがよかったか？」

「いや、あいつは今日検診だろう・・・いないときのほうが、都合がいい」

「そうだな・・・あたしらも、はやてと一緒にいるほうが、それで・・・」

「・・・?」

歩いていたゼロが、急に足を止めた。

「どうした?ゼロ」

「いや・・・砂漠の地面が動いた」

「そうか?お前の見間違いじゃ・・・」

そういつた瞬間だった。

「キシャアアアアア！」

突然魔物が出現した。そしてその触手が、ヴィータを絡みとる。

「……………！」

ゼロはシールドブーメランを投げ、その触手を斬り離した。

「ゲホッ、ゲホッ！」

「大丈夫か」

「…………大丈夫だよ…………ちよつと油断した」

「ここにいろ、すぐに片付ける！」

ゼロは言って、戻ってきたシールドブーメランを手に取り、それをZセイバーに変えて斬りかかる。

「セアッ！」

「キシャアアアアアアア！」

ゼロのZセイバーと、魔物の頭突きがぶつかる。

「ちいっ！」

ゼロは空中へ舞うと、二回転ほどして地面に着地する。

「硬い……」

砂漠の砂の中にいる生物だからか、その甲羅は非常に硬い。

「キシヤアアアアア！」

「何!?!」

一度潜ったかと思うと、尾が飛び出てくる。それを避けるも、今度は頭部が出てきた。

「ちいっ!」

硬い甲羅はゼロの攻撃を簡単に防ぐ。

「(クロワール!一時的に俺のほうへ魔力を……)」

「(駄目だよ!あれやってこの前動けなくなってたじゃない)」

「……ならクロワール、あの武器は出せるか?」

「(やってみる!)」

Zセイバーが変化する。それはトンファーのような武器。そう……リコイルロッドだ。

「はあああああっ!」

ゼロが狙ったのは甲羅と甲羅を繋ぐ間接部分。ここはどうあっても筋肉の生身である。身体を捻った一瞬を狙い、そこを攻撃した。



「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア！」

魔物が悲鳴を上げる。そしてゼロはそこからZセイバーを突き刺し、サンダーチップを装填した。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアガ」

電撃を浴びた魔物はそのまま気絶した。

「今のうちに蒐集しろ」

「お、おうー！」

こうしてヴィータが蒐集する。

「どうだ？」

「6ページちょい……もうちょっと行けると思ったんだけどな」

「仕方がないことだ。次に行くぞ」

「お、ヴィータちゃん！ゼロさん！」「！？」

そこにいたのは白いバリアジャケットを着た少女、なのはだった。

「またおm「先に行け」ゼロ！？」

「あいつは、俺に用があるらしい」

「わ、わかった……気をつけるよ？」

「ああ……後で迎えに来てくれればいい」

こうして、ヴィータが転移する。

「またお前か……」

「その、ゼロさん……」

どつちら前回のことを気にしているのだろう。

「……俺に勝てば全てを話す。それだけだ」

「わかったの……今度こそ勝って、お話聞かよ！」

なのはがレイジングハートを構えた。

WARNING!

「アクセル……シュート！」

「はっ！」

Zセイバーでアクセルシューターを斬りおとすと、リコイルロッドを下に向けた。そしてチャージされたそれを放った。

「と、飛んだ!？」

そう、リコイルロッドをチャージした状態で下に向けると飛ぶことができる。実際かなりのジャンプ力を得る。そこからゼロはZセイバーでなのは斬りかかる。

「セアッ！」

「きゃあ！」

そのままなのはが地面に叩きつけられ、ゼロも着地する。

「や、やっぱり強い……」

この前4人がかりでも駄目だったのだ。一人でも無理だろう。それでも、なのはには譲れないものがあつた。

「必ず勝つて、お話聞かせてもらおうの！」

「……やってみる」

ゼロは少しだけ笑みを浮かべる。何故だろうか、今この瞬間が楽しい。強い相手、負けないという己の誇り……その二つをぶつけてくる彼女と戦うのが、ゼロにとっては嬉しくて仕方がなかった。

「あいつのが感染でもしたか」

「え？」

「こつちの話だ……行くぞ」

「レイジングハー……きゃあ!？」

突然、なのはにバインドが巻きついた。その瞬間、気配のあるほうにバスターを撃ち放った。

「っぐ……」

そこにいたのは仮面の男だった。

「……」

「どういっつもりだ？私は君の味方をしたのだが？」

「……」

ゼロはそれに返さず、なのはの前に立ってZセイバーを構える。

「ゼロさん!？」

「ほう……」

「悪いが決闘の途中だ……消える」

「そんなことをしている場合でもあるまい？」

「お前のような屑に手伝ってもらわなければならない。もう一度言っぞで、失せろ」

ゼロが言った瞬間、仮面の男が消える。だがゼロはそれをはっきりと捕らえていた。

「はあっ！」

「ぐあっ！」

「そんなに戦いたいのなら仕方ない。ここで倒す」

「でえい！」

「遅い！」

飛んできた蹴りを避けると、その背後にリコイルロッドのチャージをぶつけた。

「ぐはっ！」

通常のなのは飛翔距離よりも高く飛べる力である。ぶつけられれば、相当な威力がひとつとするだろう。仮面の男が崩れる。すると、別の仮面の男がゼロに一撃を入れた。

「ぐあっ！」

「大丈夫か・・・」

「ああ、あいつはやはり計画に支障をきたす・・・」

仮面の男が倒れる男の前に立つ。

「今日こそ倒させてもらおうぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・やってみろ」

Zセイバーを再び構えるゼロ。

WARNING！

「ゼロさん！」

すると、なのはが必死にバインドを抜け出そうとしていた。ゼロを助けようとしているようだ。

「死ねえ！」

男が瞬時に回りこんで蹴りを繰り出した。その瞬間、ゼロは仮面の男を素手で殴り飛ばした。

「が・・・・・・・・あ」

「ゼロナックルに換装して正解だったな」

ゼロの手の平にZの文字が浮き上がっていた。ゼロナックルは本来相手の防御を抜いて武器を奪い取る武器だ。だがその拳には莫大なエネルギーが集まるため、それを撃ちだせば強力な威力を持った拳と鳴る。

「駄目だ、撤退するぞ！」

「逃がさん！」

ゼロがバスターを撃ち放つ。だが、その前に転送して二人は消えた。

「ちい！」

「ぜ、ゼロさん……大丈夫ですか？」

「……………ああ」

ようやくバインドから抜け出せたのはが、ゼロのところへ駆け寄った。

「よかったあ……」

なのはがため息をつく。

「お前は変わっているな」

「ほえ？」

「俺はお前の敵だぞ？」

「え、えと……ゼロさん、なんだか優しいし、敵って感じはしないの……それに、友達になりたいし！」

「ふん……それは俺に勝ってから言え」

そんな会話をしていると、ヴィータがやってきた。

「ゼロ！」

「ああ、転送を頼む」

「あ、ゼロさん！」

「今日はお互い良い状態ではない。横槍があつたからな。だからい  
ずれ、決着を付けるぞ」

こうしてゼロは転移し、戦いを終えた。



MISSION・11 「信頼」(後書き)

感想返せなくてすいません。今日中に全て返します。

んでもってリコリルロッドの話ですが、これは本当です。チャージして 押しながら離すと、ジャンプできます。ぜひ使ってみてくださいねw

ではw

MISSION・12 「迫り来る時」(前書き)

話はとうとうクライマックスへと移っていきます。

楽しみに！

MISSION - 12 「迫り来る時」

なのはとの戦いから次の日。再び会議をしていた。もちろん、議題は仮面の男についてである。

「昨日の戦いで私の方にも仮面の男が現れたがゼロ、お前の方にも現れたようだな」

「ああ、二人ともな」

「ゼロ、お前はどう思う？」

「対峙してわかったのは、あいつを信用すべきでないということだ」

ゼロが言うと、シャマルが首を傾げる。

「どっぴいっこと？」

「あの男の目的は闇の書を完成だ。だがやはり、それが目的ではない」

「やっぱり、はやてちゃんを封印しよう？」

「おそらく闇の書を……だ」

力を解放した瞬間を押さえ込み、封印する。確かに覚醒した後より、覚醒の瞬間のほうがいいだろう。

「……家の周りには厳重なセキュリティを張ってるし、万が一に

もはやてちゃんに危害が及ぶことは無いと思うけど……」

「それでも念の為だ。シャマルはなるべく主はやての傍を離れん方がいいな」

「そうね」

そんな話をしていると、ヴィータがこんなことを言い出した。

「なあ、闇の書を完成させてさ、はやてが本当のマスターになつたら……それではやては幸せになれるんだよな？」

「どうしたんだ？ いきなり？」

シグナムが何を今更というような声でいう。

「闇の書の主は大いなる力を得る。守護者である私たちがを誰より知ってる筈でしょ？」

「そうなんだよ。そうんだけどさアタシなんかさ、大事なことを忘れてる気がするんだ……」

「俺にはわからんが、あいつを助ける方法は蒐集のみ……ならそれしかあるまい」

「うん……」

「それで少なくとも闇の書の侵食は止まる」

「そうか……」

カランカラン・・・ガタンッ！

突然何か落ちる音がした。お盆が落ちる音。キッチンにいるのはたった一人。それから、大きな音がもう一度。答えはもう出ていた。

「はやて！」

ゼロが叫び、倒れたはやてを抱き起こした。

「救急車！！救急車！！！」

「ああ！！！」

「はやて！！！」

「待て、あまり動かすな！！！」

「あ、うん・・・」

はやての顔が悪い。はやての倒れてる体勢が悪かったのでゼロははやてを仰向けにして少し抱き起こす。体温が若干高い上に息も荒い。

「シャマル！回復！」

「わかってるわ！」

隣ではシャマルがはやてに回復魔法を掛けている。効果があったのかはわからないがはやての顔色が少しは良くなった。そしてそのま

ま救急車が到着し、病院へと搬送された。

はやてを病院に移動させてほしい数時間が過ぎた。検査が終わるまで心配だったがはやての容態は良くなったようなので、今は一般の病室にいる。

「うん、大丈夫みたいね」

「ありがとうございます」

石田先生がはやての容態を見ていた。どうやら大丈夫のようだ。ゼ口は安堵の息を漏らした。それはシャルたちも同じだった。

「はあ、ホっとしました。」

「せやから少し目眩がして、胸と手が吊っただけやって言ったやん」

「それでも倒れれば心配はするだろう。無理をするな」

「そうですね、ゼロの言うとおりです」

「何かあつては大変ですから」

「はやてが無事でよかったよ、本当に」

そう言ったウィータの頭をはやてが撫でていた。ウィータが一番心配していたので、当然か。

「まあ来てもらったついでに少し検査とかしたいからもう少しゆっ

くりしていったね」

「はあい」

「シグナムさん、シャマルさん少しいいですか？」

「はい」

こうして石田先生によばれた二人は退出。ヴィータは飲み物を買  
に行った。

「まったく、みんな大げさや」

「お前は、うすうす分かってるようだな？」

ゼロがいうと、はやてが顔をこわばらせた。

「な、何がや？」

「とぼけるな、自分の体のことは、自分でわかっているはずだ」

「……………そ、それは」

はやてが言う前に、ゼロがはやての頭を撫でる。

「ゼ、ゼロ？」

「今だけだ、今だけ……………ここにいるのは俺だけだ」

「ゼロ……………」

「今は、強がらなくていい……………」

ゼロの言葉に、はやての目からボタボタと大粒の涙が零れる。

「あ、う……………あ……………う、うち……………いやや、死ぬのなんてイヤ……………」

はやてはゼロに抱きつき、精一杯心からの本音を言った。そう、はやての命が危ない……………闇の書を完成させなければ。

「せつかく……………せつかく家族ができたのに……………死んだらひとりぼっちになってまう……………」

「……………」

「う……………ひ……………」

ゼロはただその涙を拭っていた。自分はレプリロイドだ。涙はない……………例外がいたが、自分は同じようになどできない。だからただ一言、ゼロはこう言った。

「お前は俺が死なせない……………」

聞こえない声で言うてから、はやてが泣き疲れて寝るまで、はやてを抱きしめ続けた。

「入院？」



「どうやらはやての入院が決まったようだ。先ほど、シグナムとシャルが石田先生と話してたのはそのことだよ。」

「はい、そうですねですよ。」

「そうなんか……。」

「あ、でも念の為にというだけです。心配はありません。」

「それはええんやけど……。」

何か言いづらそうにしている。

「どうした？」

「いやな、私が入院しとったら料理とか全部ゼロやクロワールに任せちゃうことになってしまっくんやない？」

「あ、たしかに。」

「もう何言ってるのはやてちゃん、ヴィータちゃん。そこは私とクロワールの交代でやります。」

「「シャルが作るのだけはやめてくれ!!」」

ヴィータとシグナムが間髪いれずに突っ込んだ。二人はどうしてもシャルの手料理は食べたくないようだ。

「二人とも酷い!!ゼロ、この二人に何か言っただけで!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ゼロは言われて、「フイ」と目をそらした。あれは見た目でもそうとう駄目な部類の料理・・・・・・・・いや兵器だ。もしかしたらオメガより強力かもしれない。

「ゼロ」

「まあそれはそれとして、戻って着替えと本などを持って着ます」

「ほかに持って着てほしいものがあつたらなんでも言ってくれよな、はやて」

「そやな……あ！！すずかちゃんからメールとか来るかもしれん」

「あ、それは私の方から連絡しておきます」

闇の書完成まで、あと少し……

MISSION・12 「迫り来る時」(後書き)

というところで優しさを見せたゼロでした。次回からいよいよ最終決戦です

MISSION - 13 「破壊神」(前書き)

今回はロックマンX4のネタが含まれています。あとヴォルケンリッターが消える順番が変わっています。ではどうぞw

MISSION - 13 「破壊神」

それから数ヶ月。シグナムたちは入院が決まったはやてのために、眠らず蒐集を行った。ゼロの協力もあつてか、予定通りにクリスマスには終わりそうである。現在ははやてのお見舞いへ行く途中だ。

「あー！」

そこでシャマルが叫んだ。

「どうした？」

「はやてちゃんに頼まれた本忘れちゃった」

はやてが退屈だということで、暇つぶし用に本を頼まれていたのだ。

「何してんだよシャマル」

「うう、ごめんなさい」

「俺が行く。お前たちは先に行け」

こうしてゼロが鍵を受け取り家へ戻る。本はすぐ見つかり、病院への道をたどった。だが、そこで異変があつた。

「人が、消えた？」

「ゼロ、これって結界じゃない!？」

そう、この現状をゼロは経験している。そして病院の近くのビルへと飛んだ。そこで磔のシグナムを見つけた。

「シグナム！」

「ゼ・・・ロ？」

「しっかりしろ！」

磔を破壊して、シグナムを抱き起こした。

「すま、ない・・・ここまで、だ」

「喋るな、すぐになんとか・・・」

「主・・・はやてを・・・たの・・・」

言いかけて、シグナムが消えた。そこに、なのはとフェイトが現われる。

「残念・・・ちよつと遅かったね」

「守護騎士の人形は消滅、死んだよ」

なのはとフェイトがありえない笑みを浮かべた。その瞬間ゼロは理解する。あいつらは仮面の男だと。そしてゼロの脳裏に、一つの記憶がフラッシュバックした。

『ゼロ・・・』

『しっかりしろ……！アイリス』

一人の少女を抱え、必死に叫んでいた。

『お願い……レプリフォースに手を出さないで……一緒に、レプリロイドだけの世界で暮らしましょう』

『アイリス、レプリロイドだけの世界なんて幻だ！』

『そうよね……でも信じたかった……レプリロイドだけの世界で、貴方と……』

少女が微笑む。そして目を閉じた。ゼロはただ叫んでいた。

「う、うおおおおおおオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！」

「ぜ、ゼロ！？」

ここに、破壊神ゼロが目覚めました。

「なんだ、この威圧感は！？」

仮面の男達は暴走したゼロの威圧感に押される。そして……

「あああああああああああああああ……！！！！！！」

ゼロは武器を持たず、全力でなのはに化けた仮面の男を殴り飛ばした。





今度こそ逃がさないという覇気を出しながら、ゼロが二人に襲い掛かる。だが、ゼロの動きはそこで止まった。

「ゼロ！ゼロ！」

「クロワール……」

「落ち着いてゼロ！あいつら倒しても、何にもならないんだよ！」

クロワールはゼロの中へと進入し、その暴走を抑制させた。クロワール『想い』だからこそできることだったのかもしれない。すると、ゼロの背中に悪寒が走る。

「ゼロさん待ってえ！」

「ゼロ、駄目！」

なのはとフェイトが飛んできた。どうやら本物のようである。だがそれよりも気になったことがあった。それはその強力な殺気だ。

「なんだ！？」

そこにいたのは銀髪の少女。赤い瞳に、黒い服。そして黒い羽……  
・そんな少女を、ゼロは思わず呟いた。

「はや……て？」

「また、すべてが終わってしまった……」

「何？」

「一体幾度、どれだけ同じ悲しみを繰り返せばいい……」

「はやてちゃん!!」

「はやて!!」

一瞬銀色の髪の女性が顔色を変えた。その悲しみと憎しみを持ったその目と表情。今のゼロとまったく同じだ。

「お前は誰だ？いや、はやて中の人間……お前は誰だ？」

「私は闇の書……」

「闇の書だと……!?」

「私の力の全ては……」

そう言っただけで攻撃の準備に入った。

「主の願い……そのままに……」

闇の書に膨大なエネルギーが集まる。ここでエネルギーを放出されたら、周りに膨大な被害が起きてしまう。

「待て！はやてはそんなことを望んでいない！」

ゼロの言葉には耳を貸さずに、闇の書はさらに力を込めていった。

「デアボリック……エミッション……」

攻撃を加えて止めると言うのも考えたが、それはだめだ。闇の書がやてを容れ物として使っている。下手に強力な攻撃を加えたらはやてがどうなるかわからない。魔導師ならば非殺傷というのがあるとシヤマルに教わったが、ゼロにそんなものはない。

「あれって!」

「空間攻撃!？」

そうなのはとフェイトが言った。

「闇に染まれ」

闇の書の攻撃は一気に広がってきた。防御して耐え抜くか、離脱するか……ゼロのすぐ近くになのはとフェイトがいる。このままいけば確実に二人を巻き込んでしまう。そう思った瞬間、ゼロは二人を抱えた。

「「え?」」

「掴まっている!」

こうしてゼロは二人を抱えて飛ぶ。壁蹴りを駆使し、クロワールの補助を受けながらなんとか逃げ切った。

「大丈夫か」

「う、うん……」

「なんとか……」

二人はぎこちないように答える。

「どうした……」

「えと……」

「その……」

そこでゼロは気がつく。先ほど自分が怒り狂っていたことを。

「……気にするな、今は正常だ」

「そっか、よかったあ……」

と、なのはがホツとした顔になった。こんな時に、よく笑顔になれるものだ。

「そうだゼロ……はやてを……」

「ああ必ず助ける」

「私たちも手伝う！」

「はやてを助けるために」

二人ははやての友達になった。だからこそ、友達を救いたいと思っ

ている。

「お前たちが味方なら助かる」

ゼロはZセイバーを握りなおし、闇の書を見つめる。

「どちらにせよ、時間稼ぎは必要だ……それは俺がやる」

「ええ!？」

「あ、危ないよ!？」

「魔法は専門外だ。お前たちの方がはやてを救う方法は浮かぶだろう。俺は戦うことしかできない」

「でも……」

「なのは!」

「フェイト!」

そこへ、ユーノとアルフが降り立つ。

「二人とも無事!？つてあんた!!」

アルフが思いつ切りゼロを睨みつけた。まあ当然と言えば当然なのだが

「待ってアルフ!今のゼロは敵じゃないよ!」

「え！？一体どういうことだい？」

「はやてを救うために共闘する」

「………ほんとかい？」

「偽りはない」

「お願い。ゼロの事信じてあげて………」

「………まあ、そこまで言うなら………ね」

ようやく誤解が解ける。すると、ゼロは凄まじい殺気を感じ取った。

「この場所がばれたな」

「ええ！？」

「嘘！？」

「間違いない………一直線でこっちに向かってきている」

「そんな！！今クロノが解決法を探してるのに！」

「あの男が？」

「うん。援護に向かって来てるんだけど、まだ時間が掛かりそうなんだ………」

「なら、来るまで俺が時間を稼ぐ」

「え、一人で！？危ないですよ！」

だが、ゼロはそのまま壁を駆け上がる。

「俺がやる間にあいつをすくう手を考える」

そう言って、ゼロは闇の書のある場所へと向かった。

MISSION - 13 「破壊神」(後書き)

ゼロの暴走バージョン、いかがでしたか？最強のコピーの力ということ、かつての暴走状態にしてみました。次回もお楽しみに！



MISSION - 14 「絆」(前書き)

さあ、物語も終わりが近いです。  
はりきっていきましょう！

MISSION・14 「絆」

ゼロが闇の書のいる一番近くのビルの上に立った。

「貴方は……」

「……」

「退いてください。私は貴方と戦いたくはない」

「何？」

「私はあなたのことを見ていました……」

闇の書は目を閉じ、胸に手を当てる。

「主が、将が、鉄槌が、癒し手が、盾が、あなたを想い、意識もないのに、私に語りかけてくるのです。あなたとは戦ってほしくない……と」

「……」

「だから「言いたいことはそれだけか」っ!？」

ゼロはZセイバーを闇の書に向けていた。

「なんの、つもりですか？」

「俺はあいつらを助ける。そんな話をするためにここに来たんじゃ

ない」

「……………なら、私は主の使命を果たしましょう」

「使命？」

「そう、永遠の闇、そして安らぎの時を……………この手に」

闇の書は構えを取った。その眼に涙を流しながら。

「……………ひとつ、聞かせろ」

「……………？」

「お前はなぜ、泣いている？」

「これは私のではない、我が主の涙だ」

ゼロはそれを聞き、ひとつわかったことがあった。

「お前の言うそれは、はやての願いではないな」

「何？」

「願いを望むものが、なぜ涙を流す？そしてお前は何故そんなに、悲しみに満ちた顔をしている？」

その瞬間、闇の書が魔力を収束させた。

「刃以て、血に染めよ」

闇の書の周り、ゼロの周囲に無数の赤い剣が漂う。

「……………!!」

「穿て、ブラッディードガー」

そのまま無数の赤い剣はゼロに飛来してきた。ゼロはそれを弾き飛ばし、そして避ける。

「なるほど、最早説得を聞く気はないということか。ならば!」

ゼロがZセイバーを構えた。

「あいつ……高町なのはと同じように『お話』をしてやる」

ゼロがZセイバーで斬りかかった。そのZセイバーと、闇の書の拳が激突して衝撃が生まれる。

「いいでしょう、来なさい……赤き破壊神よ」

「……………」

ゼロはそこを離れ、バスターを撃ち放った。

「こんなもの……」

「せあつ!」

今度はシールドブーメランが飛ぶ。だが、闇の書の魔力によってそ

れは弾き飛ばされる。

「咎人達に……滅びの光を」

「まさか……あれは……！」

「星よ集え……全てを撃ち抜く光となれ」

間違いなく、なのはの必殺技であるスターライトブレイカーだ。なぜ闇の書が使えるのか？するとゼロの脳裏に一つの答えが浮かんだ。それは蒐集。闇の書は蒐集した者の技が全部使えるのだから。ならば技の数は向こうが圧倒的に上だ。それに技の組み合わせもできる可能性がある。当たった相手を氷付けにするとかそういうこともできるかもしれない。

「ゼロさん！」

「どうした？」

「近くに結界内に取り残された人がいるの！」

「何……！？」

なぜだろうか？普通の人間は結界には入れないはず。だが考えるのは後だ。しかし、闇の書が放とうとしているスターライトブレイカーはかなりの大きさだ。まずはこれをどうするか……打ち返すにしても防御するにしても回避するにしても、確実に巻き込む。早く安全な場所まで避難させないと、正直危ない。

「貫け、閃光」

「ちい・・・！」

時間が無い。どうか、砲撃を阻止し、足止めをしなければいけない。

「手荒だが、仕方がない！」

ゼロはZセイバーをチェーンロッドに変えると、闇の書の体を絡め取った。

「!?!」

「せあああああつ！」

そのまま力を利用して闇の書を投げ飛ばした。それによって闇の書はビルに突っ込み、ビルがガラガラと崩れる。

「今のうちだ！」

「は、はい!」

こうして、ゼロはなのはたちとその結界の中に閉じ込められた人間の救助に向かった。

しばらく走っていると、人影が見える。なのはがその人影に呼びかけた。

「すみませーん!ここは危険ですので、そこでじっとしててください

い！」

「え？」

「今の声って……」

そう言つて振り返つた二人を見て、なのはたちが驚愕した。そしてゼロも驚いていた。

「アリサちゃん!？」

「すずかも!？」

「なのは!？」

「フェイトちゃん!？」

「いったい、何?それに二人の格好……」

「お前たち、何故ここに？」

ゼロも驚きながら言つ。

「あ、ゼロさん？」

「ゼロ、あんたも何よその格好」

「あ、あのね……」

「えつと……」

二人とも言葉がでない。アルフとユーノの二人はアチャーって顔して頭を掻いてる。さて、どう説明したものか。

「あの、その、と、とにかく、安全な場所まで移動させるから、詳しいことは後で……！」

急に大気が揺れる感じがして、驚いて空中を見た。少し遠くにかなり巨大な光球があった。

闇の書がもう回復したようだ。

「あ、あれって……」

「間違いない！」

そして闇の書は、それ振り下ろした。

「な!？」

あんな物が着弾すれば確実にここまで被害が来る。町だってただではすまないだろう。おそらくゼロ達の位置が掴めないから周囲全部に攻撃する気なのだ。そう思ったゼロはシールドブーメランを取り出し、クロワールに呼びかける。

「クロワール！俺へエネルギーを最大限に引き出せ！」

「ぜ、ゼロ!？」

「うん!」



展開したシールドが拡大していく。そしてそれによって波のように覆おうとする攻撃が防がれる。

「きゃあああああああああああ！」

「クロワール！俺自身への耐久能力をあげろ！」

「もう駄目！これが限界！」

なんとか耐えている。ふと、ずかたアリサを見た。二人が抱き合っ  
つて座り込んでいる。やはり、怖いのだろう。ここは少し安心させ  
るべきだ。

「……………二人とも」

「「え？」」

「俺を信じる！」

言われて、二人は顔を赤くした。ゼロは一層手に力を込める。する  
と、張っていたシールドにヒビが入り始めた。

「つく！」

「私も手伝いますよ、ゼロさん」

そうやってなのははゼロの横に立ち防御魔法を発動させた。

「一人だけで無茶しないで、ゼロ」

反対側にはフェイトが同じよう立ち防御魔法を発動させていた。

「そういうこと」

「僕も、結界とか防御とか回復は得意なんですよ」

アルフとユーノも手伝ってくれている。これなら何とかなるだろう。しばらくするとエネルギーの奔流も止まった。ゼロはシールドをしまった。

「……………」

「あ、あの……………」

「もう大丈夫、だね」

「すぐ安全な場所まで運んでもらうからね。ユーノ君、二人のこと  
お願いできるかな？」

「アルフも頼める？」

「僕は構わないけど」

「アタシも」

「え？ユーノ君って？」

「それにアルフって？」

二人がそう言った途端すずかとアリサは転移した。アルフとユーノ

も同じように転移して行った。これで二人とも大丈夫だろう。しかし二人とも沈んだ顔している。こんな姿を見られたら、とりあえず複雑な気分だろう。

「うん……」

落ち込む二人を見て、ゼロはため息をつく。

「お前たち、もう少し友を信じたらどうだ？」

「「え？」」

「本当の友や仲間ならば、この程度で嫌いになったりすることはないだろう」

かつていた友……そんな友の顔が浮かんだ。

「そう、だね……」

「そっだよね」

「……さて」

ゼロはZセイバーを構えて、闇の書を見つめる。

「時間を稼ぐ……行くぞ」

「はい！」

「うん！」

「じつじて、闇の書との第二ラウンドが」始まった。

MISSION - 14 「絆」(後書き)

ゼロ、結構無茶してます。まあ、これからもがんばるので楽しみにw

MISSION - 15 「理想郷」(前書き)

はい、散々言っておいて今回ゼロ以外のキャラが登場ですw

MISSION - 15 「理想郷」

闇の書に攻撃するために再びゼロはZセイバーを構え、エネルギーをチャージする。

「あ、ちょっと待って」

フェイトが声をかけてきた。

「……………どうした？」

「今エイミーから連絡があつて……………」

「エイミー？」

「あ、アースラで通信などを担当してる人」

「そいつがなんだ？」

「あのね、クロノ君が闇の書さんに投降と停止を呼び掛けてって」

クロノ……………あのゼロがボコボコにした執務官だ。どうやら解決策だ見つかったらしい。

「奴が言うことを聞くとは思えないが……………」

「でも……………」

まあそれでもやるだけ、やってみた方がいいだろう。

「わかった、頼む」

「うん！」

そうやって二人とも何かに集中し始めた。おそらく、念話を使っているのだろう。

「「！！」」

二人の顔色が変わる。

「どうし……！！」

突如触手のような物が出現した。しかも数が多い……交渉は決裂したのか、突然のことに反応できなかった二人を抱えて壁を蹴り、ビルを飛ぶ。

「くっ！」

ある程度距離を離してもピッタリ付いてくる。

「二人とも、一度離す」

「え、はい」

「だ、大丈夫」

そう言った二人を放し触手の方に向き直り、Zセイバーを取り出す。そしてチャージを終えたZセイバーを振るった。



「はあっ！」

Zセイバーの衝撃波で、触手を消滅させる。

「え！？」

「キヤ！」

二人の悲鳴がしたのでそちらをみると、触手が二人に纏わりついていた。どうやらまだあったようだ。

「せあっ！」

龍炎刃で触手を刻み込んだ。すると、二人の体に纏わり付いていた触手は燃え尽きた。すると突如、ゼロに向かってエネルギー状のものが飛んでくる。ゼロはそれを避けると、闇の書に向き直る。闇の書ははやての為とさつきからこんなことをしている。まさか、本当にはやてがそんなことを望んでいると思っっているのか。

「お前は・・・さつきからあいつのためだと言っているが、これが本当にあいつが望んだことか？」

「そうだ。私は主の願いを叶えるだけだ・・・」

「貴様もはやてと一緒に生活していたのならばわかるだろう。あいつは人を傷つけることを望んだことはない」

「あなたと戦いたいわけではない。守護騎士たちと主がそう言っている」

「なら今、貴様が流している涙はなんだ……貴様も望んでいないのだろう」

何故か、行き成り涙を流し始めた。無意識に流しているものなのか。

「さきにも言ったが、この涙は主の涙だ」

自分の涙を拭いながらそう言ってきた。

「……………」

「私はただの道具だ。悲しみなど……感情などない。」

「なら今、お前の行ってる事はなんだ？」

「何？」

「お前ははやてのためと言ったな。それは、はやてを想つての行為のほずだ。感情のない者が、人の願いを叶えようとは思わん」

「そつだよ！ゼロさんの言うとおりだよ！」

いつのまにかなのはとフェイトが傍に来ていた。

「さつきゼロに言ったよね？悲しみなどないって。そんな言葉をそんな顔で言われたって！そんな涙を流してる顔で言われたって！誰が信じるもんか！」

「あなたにも心があるんだよ！私達と同じように！だから！」

突如大気が揺れ始めた。

「!?!」

「早いな……もう崩壊が始まったか」

「崩壊……だと?」

「私はじきに意識を無くす……そうなればすぐに暴走が始まる。そうなる前に……意識のある内に……主の望みを叶えたい」

「本当にそれがあいつの望みなのか、よく考えろ!」

そう言い放ち、バスターをチャージして放った。だが、突如目の前の空間に穴が開きゼロのバスターショットが吸い取られた。

「消えた!?!」

「……………」

いったい何をしたのだろうか?あれは魔力ではない、純粋なエネルギーである。するとなのはが叫んだ。

「ゼロさん、後ろ!」

後ろを見ると空間に穴が開いており、そこからゼロの放ったバスターのエネルギーが出現する。

「ちっ!」

ゼロは衝撃を受け流した。空間を操れるのか、これは厄介な技である。

「聞け!あいつが本当に望んでいることは……………」

「デイベイン……バスター……………」

「く!」

ゼロは再びシールドブーメランで防御した。こっちは話は聞く気はやらない様子である。ゼロの体も、先ほどの攻撃を防いだことのでかなりの負荷がかかっていた。そして、フェイトが接近戦を仕掛けようとした。さつき遠距離攻撃を空間転移させた。なら必然的に接近戦がメインの戦い方になる。するとゼロの直感が恐ろしい考えを思いつかせた。まさか敵の狙いは接近戦で戦うように仕向けることではないか?

「待て、フェイト!」

ゼロはフェイトの後を追った。

「言うこと……………え、ゼロ!??」

何とか切り掛かる前にフェイトの腕を掴み、ゼロはそのままフェイトをなのはに向かって放り投げる。

「キャ!」

「わっ！」

ちゃんと、なのははフェイトを受け止めた。その瞬間背中に何かに触れる。

「おまえも眠れ」

それは、闇の書の手だった。空中では逃れる術がないゼロは、見事に闇の書に捕まった。

「しまった……！」

ゼロの体が光に包まれていく。

「私の中で……」

「あ……ゼロさん！」

「ゼロ！」

「こ……れ……は……」

「全ては安らかなる、眠りの中へ……」

ゼロの意識は、そこで途絶えた。

「ゼロ……ゼロ……」

誰かの声が聞こえた。懐かしい声が……

「ゼロ！」

大きな声で、起こされた。

「……………」

「ゼロが居眠りなんて珍しいね」

「…………エックス？」

そこには蒼い光を放つレプリロイド、エックスがいた。

「何故、お前が…………」

「何を言っているんだい？今ブリーフィングが終わったんだよ？」

意味がわからない。すると、目の前にはかつて自分が倒した男、クラフトがいた。

「エックス隊長、ゼロ隊長、これより出撃します」

「うん、クラフト副隊長。よろしくね」

「はっ！」

こうしてクラフトが部屋を出る。よくよく見れば、そこはネオ・アルカディアだった。

「……………なぜ、俺がネオ・アルカディアに？」

「何を言っているんだゼロ、僕と君で作り上げたんじゃないか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

もう何もかもがわからなくなった。するとそこへ、一人の人物がやってきた。

「あ、エックス、ゼロ！」

「やあ、シエル」

「シ、エル・・・？」

そこにはいつもと違う服を着たシエルの姿があった。

「どうだい？研究は」

「ええ、もうすぐ完成よ。これでエネルギー問題は解決よ」

「それはよかった」

「・・・・・・・・・・・・・・・・エックス」

「なんだいゼロ」

「いや、なんでもない」

そう言い残し、ゼロは外に出た。そこは楽園、ネオ・アルカディアの中だった。

「あ！ゼロ様だ！」

「ほんと、ゼロ様よ！」

人間の子供や、レプリロイドがゼロのところへ詰め寄る。

「ゼロ様、一緒に遊ぼう！」

「ゼロ様、どうかこの先も平和を……」

など、期待に満ちた目でこちらを見ていた。ゼロは戸惑いながらも、それに懸命に対処した。それからしばらくして歩いてみると、一人の少女に出会った。

「ゼロ？」

「……！」

それは記憶にあつたあの少女……

「アイ、リス……」

「ゼロ、どうしたの？」

「い、いや……」

信じられない光景だった。記憶の断片とはいえ、彼女は死んでいた。そんな彼女が生きている。エックスも、クラフトも、みんな生きている。



「なんなんだ、いつたい……」

その時、放送が入る。

『ゼロさん、ゼロさん、至急研究室Aにお越しください』

「ゼロ、お呼びね」

「ああ、そうだな……」

研究室A？

「研究室は、どこだ？」

「あら、ボケちゃったの？そのエレベーターで最上階」

「ああ、そうだったな」

ゼロはエレベーターで最上階へと向かった。そこにはエックスとシエルがいた。

「見てゼロ、システム・シエルよ」

シエルが嬉しそうにそれを見せる。それは美しい輝きを放っていた。

「幻想的だね」

エックスが言いながらネオアルカディアを見る。

「夢のようね」

シエルの言葉に、ゼロははっとした。これは、夢なのだ。

「あいつは、たしか……」

お前も眠れ……全ては安らかなる、眠りの中へ……

「そうか……そういうことか」

「ゼロ？どうしたんだい？」

いつの間にかシエルが下に降りて行っていた。そしてゼロはエックスを見る。

「ここは、夢の世界なんだな……」

「……」

「これが、俺の望んでいた世界」

「そうだね、君が、そして僕が望んでいた世界だ……君と僕がいて、人とレプリロイドが、平和に暮らす世界」

「だが、夢は夢だ……」

ゼロの言葉に、エックスは苦笑する。

「そうだね、君の言うとおりだ……夢は、夢でしかない……現実を見据えて、未来へ歩く。それは人もレプリロイドも同じだ」

「俺は、どうすれば戻れる?」

「やっぱり戻るんだね?」

「ああ、あいつらを助ける」

エックスは言われて、手にしていたものをそっと渡した。

「クロワール」

「ゼロ!」

「この子の力で『彼女達』を救えるはずだ」

「……………」

「もう一度言わせてくれゼロ、『世界を頼む』」

言われてはっとした、このエックスは幻ではない。このエックスは……

「いつでも見守っているよゼロ……君の、君の心の中だね……」

エックスは粒子となって消えた。目の前にあるのはシステム・シエル。そこにわずかな切れ目があった。

「……もし封印されなければ、こんな生活を送っていたのかもな……さよならだ、エックス」

Ｚセイバーにエネルギーがチャージされた。

「はあっ！」

チャージされたセイバーを振り下ろし、ゼロは再び光に包まれた。

MISSION - 15 「理想郷」(後書き)

夢の世界にダイブするのはフェイトではなくゼロということになりました。

次回もお楽しみに！

MISSION - 16 「夜天」(前書き)

とうとうはやて復活です。とりあえず今回も執務管Kを弄りますW

MISSION - 16 「夜天」

「!?!」

ゼロは気がつくど空中へと投げ出された。そこはビル群の上……海鳴市の夜だった。

「わっ!」

「きゃ!?!」

なのは、フェイトがいる場所へと落ちた。なのはたちはそれを受け止める。

「お前は……なのは?」

「はい、なのはです!」

「いったい、何が……?」

「あのね、突然闇の書さんが苦しみだして……」

「そしたら、いきなりゼロが飛び出して来たんだよ」

つまり、ゼロは脱出に成功していた。やはり体内に衝撃を与えれば苦しむのも当然だ。すると、闇の書がゼロを見る。

「なぜだ……」

「？」

「なぜ、戻ってきた？」

「何？」

「あのまま眠っていれば望むもの……全てが手に入ったのに……」

「……」

「なぜだ？」

「……夢は夢だ。現実ではない……」

「……！」

闇の書が驚いてゼロを見た。

「本当に望むものを手に入れるのは難しい……理想にしろ、夢にしろな……だが、それを必死にあがいて手に入れるのが生きていく者たちがするべきことだ」

理想のために戦っていた男がいて、夢のために研究をし続けた少女がいて……そんな風にあがき続ける人間を見続けた自分がいる。

「俺は、俺の手で理想を掴む……それだけだ」

脱出できたが、はやてをどうやって助けだすか。闇の書の動きが鈍



なくなったようだが、それではなんの解決にもならない。

「えー!? はやてちゃん!?!」

「はやて!?!」

「どうした……?」

「今、はやてちゃんから念話が……」

「ちょっと待っててください、ゼロさん」

しばらくした後二人は笑顔でゼロのほうに振り向いた

「あのね、ゼロさん!」

「はやてを助ける方法が見つかったよ!」

「本当か!?!」

「はい!」

「どうすればいい?」

「わかりやすく言うと、闇の書さんに魔力ダメージ……つまり私かフェイトちゃんの攻撃を当てればいいんだって!」

「お前たちは確か砲撃ができたな」

「うん。私もなのはもできる」

「なら、俺が砲撃をできる場所まで誘導する」

そう言つて少し離れた場所に指を向ける。そこは、海の上だ。ここからそう距離はない。リコイルロッドで吹き飛ばせば、おそらく吹き飛ばさるう。

「そしたらそこに砲撃魔法を撃て」

「え？一人で闇の書の相手をするの？」

二人が心配そうな顔をする。さっきまで取り込まれていたから、無理もないだろう。だが、ゼロの意思是揺るがない。

「俺は大丈夫だ」

「でも……」

ずいぶんと心配性のようだ。ゼロはため息をつく。

「俺はお前たちを信じているつもりだ」

「え？」

「だから、お前たちも、俺を信じる」

共に闘う。それだけで信頼できる理由は十分だ。だからこそ、ゼロは今の気持ちをはっきりさせたかった。すると、なのはとフェイトの顔が笑顔になる。

「うん！」

「わかった、私たちもゼロを信じるよ」

「ではいくぞ！お前達は砲撃の用意だ」

「うん！」

なのはとフェイトが離れ、カートリッジをロードする。ゼロは脚力をあげてビルを飛び移り、一気に闇の書へと接近した。すると、闇の書はゼロに向けて様々な攻撃を放ってくる。

「やはり、動きが鈍い……」

闇の書の攻撃は殆ど……いや全部切れが無い上、直線的すぎる。ゼロは全てを回避しながら接近して行く。そして、目の前で高速移動をし、一旦奴の視界から外れる。そのまま背後に現れリコイルロッドのチャージ攻撃を繰り出した。

「てあああっ！」

クロワールによって強化されたその攻撃によって、闇の書は遠くまで吹き飛ばされる。丁度良くなのはたちのところに飛んで行った。

「今だ！」

「スターライト……ブレイカー！！」

「プラズマ・スマッシュャー！」

なのはとフェイトの攻撃。桜色の閃光と黄色い閃光が闇の書に直撃した。

「ん？なんだあれは……………」

闇の書からなにか黒い物体が吹っ飛んでいった。

「え、嘘！？」

「どうした……………！？」

「闇の書の反応が消えてないって！」

「何！？」

「後、あれには近づいちゃダメだって！」

あれというのは、黒い物体だろう。いったい何がどうなったのだろうか？それに、はやてもわからない。すると、突然光が放たれた。ビルの上に人影があった。

「……………おいで、私の騎士達」

「……………！」

「我等、夜天の主の下に集いし騎士」

「主在る限り、我等の魂、尽きる事無し」

「この身に命在る限り、我等は御身の許に在り」

「我等が主。夜天の王、八神はやての名の下に」

「シグナム、シャマル、ザフィーラ、ヴィータ！」

間違はなく、闇の書の守護騎士、ヴォルケンリッター……無事だったのだ。

「夜天の光よ我が手に集え！祝福の風リインフォース……セツトアップ！」

はやてがバリアジャケット……いや、この場合騎士甲冑と呼べるだろう。それを装着する。その後色々話していたようだが、とりあえずうまく言ったらしい。

「お前達、無事か」

「あ、ゼロ！」

「はやて、無事で何よりだ」

「……………」

ゼロが言つと、はやてが不思議そうにゼロを見た。

「どうした？」

「今、うちに初めて『はやて』って呼んでくれた？」

「そうだったか？」

「そつち、初めてうちの名前、呼んでくれた」

どつちやら相当気にしていたらしく、はやてはとても嬉しそうだった。

「はやてちゃん」

「はやて」

「なのはちゃん、フェイトちゃん、ごめんな。うちの子達がいろいろ迷惑かけてしもたみたいで……」

「うづん、気になしで」

「全然平気だから」

「そつか、ありがとな」

どつちやら、こつちもこつちでうまくまとまったようだ。

「んっ」

そこへ、黒いバリアジャケットを着た少年が現れた。

「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。和んできるところ悪いが、時間が無いのでこちらの話を聞いてほしい」

「うわー！ゼロ見た？みんなが和んでいる空気ぶち壊し！」

「なっ！」

「私知ってるよ、ああいうのKYっていうんだよ!」

「そっなのか・・・」

どこで覚えてきたかわからない言葉をクロワールが言うが、ゼロと周囲が納得した。

「と、とにかく話を聞いてくれ!あそこの黒い物体・・・闇の書の防衛プログラムが、後数分で暴走を始める。僕等はそれを何らかの方法で止めなければならぬ。停止させる方法は、現在二つある」

二つ。たったそれしかないのは、厳しいものがある。というか、さげさん時間があつて2つというのは少ない。

「その方法は?」

「まず一つ目。極めて強力な氷結魔法で停止させる・・・ようするに氷付けだ。そして二つ目、軌道上で待機している戦艦アースラの魔導砲・・・アルカンシエルで消滅させる。でだ、これ以外に他にいい手は無いか? 闇の書の主とその守護騎士の皆に訊きたい」

みな一様に渋い顔をしている。普通に考えて後者はまずいだらう。

「えっと・・・最初の氷付けにするのは多分難しいと思いません。主のない防衛プログラムは魔力の塊みたいなものですから。それに凍結させても、コアが在る限り再生機能は止まりません」

「アルカンシエルも絶対ダメだ!こんなところでアルカンシエル撃つたらはやての家まで吹き飛んじゃうじゃんか!」

「そ、そんなに凄いの？」

「えっとね、発動地点を中心に百数十キロ範囲の空間を歪曲させながら反応消滅を起こさせる魔導砲……つまり、当たり一帯を吹き飛ばしちゃうんだ」

「あ、あの、私はそれ反対です！」

「同じく！」

「僕もかあさ……艦長もできれば使いたくないよ。でもあれの暴走が本格的に始まったら、被害はそれよりずっと大きくなる」

「ようするに管理局はそうならないためならこの町ごと消そうという考えも持っているということか……」

「なんだと!？」

ゼロがさらりと正論をいうと、クロノがくっついてかかる。

「事実だ」

「僕も艦長も使う気はないと言っているだろう！」

「できれば、だろう。そもそも使う気がないなら選択肢にあげるな」

「ぐっく……」

「クロノ、抑えて……」



フェイトになだめられながらも、くっつかかる。

「ならお前はどんな策があるっていうんだ!」

「そうだな・・・」

ゼロはしばらく考えると、一つの案を出した。

「一つだけ、あるな」

「え!?! 本当? ゼロさん!」

「その戦艦とやらは現在宇宙空間にあるのだから?」

「そ、そうだけど・・・」

「なら、あの闇の書の根源を転移させて撃てばいい」

全員がポカンとするが、納得する。

「た、確かに・・・コアを露出させて宇宙空間に転送すれば・・・」

「被害は0で・・・」

「破壊ができる!」

「ゼロ、お前すげえな!」

「・・・さあな。時間も無い、行くぞ!」

こうして、作戦が開始された。

MISSION - 16 「夜天」(後書き)

さあ、とうとうA'Sも終わりに近づいています。STSに行こう  
かはまだ検討中・・・それは最終回までお待ちくださいW

でわW

MISSION・17 「虚空」(前書き)

ここから原作とは違う話が展開します

よろしくですw

MISSION・17 「雪空」

作戦はあれのコアを露出させ、宇宙まで転移させるというものだ。だが、闇の書の防衛プログラムの防御と再生はすさまじい。ゼロもチャージショットを連発している。

「よし、最後の仕上げだ。」

そうクロノが言ったのでゼロはエネルギー弾を撃つのをやめた。

「悠久なる凍土、厚き棺の内にて、永遠の眠りを与えよ！」

その瞬間海一面が完全に凍り、防衛プログラムの再生力と動きを完全に封じた。ゼロは念には念をということで、三人と。はやて、なのは、フェイトと一緒に攻撃を仕掛けることになっている。ゼロは三人の所に移動した。ちなみに現在はクロノによって作られた氷の柱の上にいる。

「タイミングは合わせる・・・行け！」

「うん！！！！」

「全力全開！スターライト！」

「雷光一閃！プラズマザンバー！」

「ごめんな・・・おやすみな・・・響け終焉の笛！ラグナロク！」

「ブレイカアアアア！！！！」

それぞれの砲撃があたり、防御プログラムの動きが止まった。ゼロは最後の仕上げとして、氷の柱からチャージをして、一気に空中へ飛んだ。

「ゼロ！今や！」

「ハアアアアア！ハアッ！」

チャージされた攻撃によつて、核が飛び出した。ゼロは地面へと着地する。すると同時に、防御プログラムが消えた。ようやくすべてが終わったのだ。数分、全員が空を見上げ作戦の成功を祈る。すると、みんなの顔が笑顔になる。

「……終わったのか？」

「うん！成功だった！」

みんな大はしゃぎである。すると突然、はやてが倒れた。

「はやてちゃん！？」

「はやて！？」

「……気を失ったようだな」

ゼロははやてを抱きかかえる。

「そっか……」

「よかったあ」

全員がため息をついた。

ゼロはアースラという戦艦の一室ではやての様子を見ている。はやてが運びこまれた時みんなが心配して来たが、大丈夫だとわかったら凄く安心した顔をしていた。ちなみに、はやてが運び込まれてもう数時間が経過している。

「……………これで終わったのか？全て」

ゼロの心のどこかに、何かが引つ掛かっていた。エックスの最後の言葉。

『これで彼女達を救える』

彼女達……すなわち複数形である。すると、はやてが眼を覚ました。

「はやて、もう大丈夫なのか？」

「うん、もう平気や」

元気そうな顔をしている。笑顔もいつもと同じものだ。

「そうか……………」

「ところでみんなは？」

「さあな……」

「……」

「はやて？」

「みんなを探して！」

「……」

「何かとてもやな予感がするんや！お願い！」

はやての必死の訴えに、ゼロは頷いた。

「わかった」

「わっ！」

ゼロがはやてを抱き上げる。すると、はやての顔が赤く紅潮する。

「わ、わ、こ、これってお姫様抱っこっていうやつ……」

「少し飛ばす。掴まっている」

「う、うん」

こうして、ゼロははやてと共にアースラを飛び出し、はやての魔力の探知を頼りに海鳴へと飛んだ。



しばらく走り続けると、開けた広場になった。雪が積もり、真っ白な広場。そこにははやてが助けた『祝福の風』リインフォースがいた。シグナム、ザフィーラ、シャマル、ヴィータ、なのは、フェイトがいる。

「みんな、何してるん？」

魔法陣が引かれ、その中心にはリインフォースが立っている。みんなは答えない・・・否、答えることができない。

「主はやて、申し訳ありませんが私は消えなくてはなりません」

そうリインフォースが切り出した。

「何でや!？」

「説明してもらおうか」

ゼロも真剣な眼差しでリインフォースを見た。

「基礎構造が歪められたままなのです。このままではまた新たな防御プログラムを組み直してしまいます。その際高確率で主はやてはまた侵蝕されてしまいます」

主を守るために・・・だから死を選ぶ。それがリインフォースの答えだった。

「だめや! 防御プログラムなら私がかんとかする! だから!」

「お聞き訳を・・・」

「……………」

リインフォースとはやての言い合いを見て、ゼロの脳裏にまた一つの記憶がフラッシュバックが起きた。

『ゼロ!』

それはゼロが封印される直前の記憶。エックスが叫ぶとゼロはゆっくりと顔を上げた。

『エック……ス……か……』

『君は……これでいいのかい!? 今までみんなのために戦ってきたというのに! こんなやつて!』

エックスがゼロに問う。そしてその様子を意思のゼロは頑なに見守る。

『俺がいる限り……血塗られた歴史は繰り返される……』

『そんな……! 何言ってるんだゼロ!』

『俺は……いつも考えていた……誰のために……何のために俺達レプリロイドは殺しあわならないのかと……そんなときでもお前は人間達のことを信じ続けていた……俺は友として……お前を信じている。だからお前の信じる人間達の言葉を……信じたい……』

『最終カウントダウン5……4……』

『やめろ！今すぐ封印をやめてくれ！！』

『いいんだ・・・エックス・・・あと・・・たの・・・』

『1・・・0！』

そして扉が閉められた。エックスは膝を付き、泣いていた。

「・・・・・・・・駄目だ」

「「え？」」

言い合っていた二人がゼロを見た。

「お前は死なせない・・・」

「だから言っているだろう！このままでは・・・」話を聞け「！？」

「お前は、人間ではなくデバイスだ・・・機械構造はクロワールがおおよそ把握している」

「だから、なんなのだ？」

「俺が今からお前の中に入り、そのバグを破壊する」

ゼロの言葉に、全員が驚いていた。いや、それよりも・・・

「ゼロが、私の中に？」

「そうだ・・・クロワール」

「うん、大丈夫だよ！準備万端！」

クロワールがゼロの周囲に光の輪を放っていた。

「シグナム、はやてを頼む」

言いながらゼロがはやてを渡した。

「本当に、何をするつもりなんだ！」

リンフォースは混乱しているのか、ゼロを怒鳴る。だがゼロは冷静だった。

「今から俺の体を電子化させ、お前の体内に侵入・・・お前の体を歪ませるバグを破壊する」

かつてラグナロクの通信回線へと侵入したときに使った方法と同じようにして、ゼロはリンフォースを救おうというのだ。

「ゼロ、それは・・・ゼロは大丈夫なん？」

すると、はやてが心配そうな目でゼロを見た。ゼロはそのまま事実を告げる。

「失敗すれば、俺が死ぬ・・・だが、リンフォースを死なせる気はない」

『!!!』

「ゼロ……」

「はやて……」

「……?」

「俺を信じろ……クロワール!」

「!!!」

「うん! 転送!」

ゼロがリインフォースの中に転送される。ゼロにとってのラストミッションが始まった。

MISSION・17 「雪空」(後書き)

さて、とうとうゼロのラストミッションとなります。ゼロがどのような形で戦うのか、そしてリインフォースを救えるのか!?

楽しみに!

MISSION・18 「最強の存在」(前書き)

とりあえず、更新です。最近は感想が来なくてさみしいです、どうか皆さん、感想をください

## MISSION - 18 「最強の存在」

「……………ここが」

サイバー空間と似た世界がそこにはあった。そこは、リインフォースの世界である。

「……………ミッション、開始」

MISSION START!

ゼロはその空間を駆け抜ける。途中でリインフォースの内部を守護するためにあるプログラムの攻撃をよける。すると、他の黒い異物を見つけた。

「……………あれはバグの欠片か？」

バグを切り捨てる。すると、その周囲は清浄されたように輝いた。すると行く手を阻むように、何体もの黒い異形なものが生成された。

「なるほどな……………あの黒いのは倒していいわけか」

ゼロはそのまま、黒い異物を切り捨てながら奥へと進む。途中かなりの敵に囲まれるが、ゼロの力によってそれはせん滅されていく。かれこれ一時間……………ゼロはその通路を走り続ける。すると、広い場所に出た。そこで突然現れた黒い異物がゼロに付着する。

「つく！」



すぐにそれを払うと、それは通路の中へと溶けて行った。ゼロはそれを気にせず、そのまま先へと進む。

「……これは」

扉があつた。そこを開き、中へと入る。そこにあるのは、黒い塊。

「これが……闇の書のバグか」

すると、バグの形が変化する。まるでゼロが来るのがわかつていたように。

「……お前は！」

そこに姿を変えたものが収まつた。それはゼロにあまりに酷似した姿だつた。赤い装甲に金髪の髪……だが、違っている部分があつた。目が赤く、そしてなにより手にあるZセイバーまでもが赤いのだ。かつての敵と同じなのだ。そして……

「我はメシアなり！はっはっはっはっは！」

それはかつての自分、オメガだつた……

WARNING！

「せいっ！はっ！とっ！」

オメガが三段斬りを放つ。ゼロはそれを受け止め、斬りかえした。

「せあっ！」

「滅びよ！」

滅閃光が走り、エネルギー弾がゼロに直撃する。だがゼロは怯まない。

「ぐっ！せあっ！」

「うおりゃ！」

ゼロがチャージを放つと、オメガもチャージセイバーを放ちその衝撃で弾き飛ばされる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

クロワールがない以上、これ以上身体機能を底上げするのは不可能だ。だがそれは『あの』オメガも同じこと。『あの』オメガにもダークエルフ否、マザーエルフの援助がない。そのためか、大きすぎる威力の反動で所々に損傷があった。やはり本当のオリジナルボデイがなければ、本来の攻撃には耐えられないのだろう。だがオメガはお構いなしに攻撃を繰り返す。

「セイハツオリヤ！ハットウオリヤ！ハア！」

乱舞を繰り返してゼロに放つ。

「やはり凄まじい威力だ・・・だがっ！」

ゼロはその軌道を見切り、Zセイバーを逸らして一撃を入れる。

「ぐっ！」

オメガが一撃をくらい、その場で距離を取る。そうとうな痛みがりようだ。それもそのはず。ゼロはその崩壊を始めていたオメガの傷口に一撃を入れていたからだ。

「ぬっ……ぐ……」

「所詮貴様はあいつを模した存在だ……」

実際ゼロもそれであるのだが、目の前にいるのはただのプログラムである。

「ぐっ……おおおおおおおおおおおおお……！！！！！！！！！！」

オメガが怒りの表情でゼロに突っ込んでくる。でたらめの力を振るい、Zセイバーを振り下ろした。

「………セアッ！」

力の流れを読み切り、その一撃をオメガに与えた。それにより、オメガが爆発した。

MISSION COMPLETE!

MISSION

100%

20

タイム	62・35	15						
エネミーカウント	100	15						
ダメージ	8				15			
リトライ	0				20			
エルフ	0				10			
トータル	95							
レベル	A							
コードネーム	破壊神							

オメガが爆発したところから、なにやらデータのようなものを見つけた。

「これは……………」

それはとある記述を残したデータだった。

データ記録を手に入れた！

「……よし、帰還する」

そこで転送機能が作動する。するとゼロの視界が真っ白になり、そこで意識が途切れた。

英雄はまた、夢を見る。

『私はネージユ、人間よ』

出会ったのは、自由を求めた人間たち

『違う！俺は、俺はそんな人間たちのために戦ったんじゃない！』

それを追うのは人を守ることに疑問を持ったレプリロイド

『死ねん！この程度では死ねんのだあ！』

狂気の果て、人の罪が生んだ永遠の憎しみの炎。その炎は止まることなく燃え続けた。

『バイル……！』

『クーツクツクツクツクツクヒヤーツハツハツハツハツ！言っただろう！ワシはこの程度では死ねんのだよ！もはやラグナロクの墜落は誰にも止められん！』

『ぜ、ゼロ……！もうダメ……！戻ってきて！早く！』

『……いや、まだ手はある……バイルごとコアを破壊さえすれば、ラグナロクは崩壊する……バラバラになれば……大気圏と

の摩擦で全て燃え尽きるはずだ……！」

『そんな……ゼロ！そんな事をしたら……あなたは……！』

『クヒヤーツハツハツハツ！出来るかね！？貴様にそんな真似が！レプリロイドたちの英雄である貴様が！人間を守る正義の味方が！地上の人間を守るためにこのワシを……守るべき人間であるこのワシを倒そうというのか！どうだこの痛みは！貴様に分かるかあ！憎しみの炎が激昂する。だが、英雄は迷わない。』

『オレは正義の味方でもなければ……自分を英雄と名乗った覚えもない。オレはただ、自分が信じる者のために戦ってきた……オレは、悩まない。目の前に敵が現れたなら……叩き斬る……までだ！』

英雄の選択を聞き、少女が叫ぶ。

『ゼロ……！ゼロ……！』

そんな少女に英雄はただ一言、こう言った。

『……シエル……オレを、信じる！』

『ゼロ……！』

『ゼロ……ゼロ！』

声が聞こえた……

『ゼロ！目を開けて！』

ゼロがゆっくりと目を開ける。そこには金髪の少女、シエルの姿が・

「シエル？」

「なに言うとんねん！ゼロ！しっかりしー！」

シエルが関西弁を使った。否、この少女はシエルではない……この少女は……

「はやて？」

「ゼロ！」

はやてが涙を流しながら、ゼロに抱きついた。ここはアースラの医務室。先ほどと立場が逆である。

「お、おい……」

ゼロはゆっくりと体を起こした。隣には、リインフォースが立っていた。

「ゼロ、その……大丈夫か？」

「ああ……お前はとうだ？」

ゼロが言うつと、リインフォースは微笑み頷いた。

「ああ、お前のおかげだ・・・本当に体の淀みが消え、正常に稼働している」

「・・・・・・そうか」

「ゼロ！」

「クロワール」

「だめだよゼロ、まだ寝てなきゃ」

確かに、ゼロの体が軋んでいた。おそらくオメガと戦ったのと、無理なプログラムでリインフォースの中に入ったのが原因だろう。

「わかった、少し休ませてもらおう」

そういつて再び横になると、リインフォースがはやてをゼロの横に乗せる。

「おい、何の真似だ？」

「今の主はやての望みだ」

「えへへ、ゼロ。一緒に寝よか」

はやてが布団の中に潜り込み、ゼロの腕を絡ませる。

「何故そうなる・・・」

「ええやん、せっかく全てが終わったんや・・・今日ぐらい・・・」



な？」

何が「な？」なのかわからないゼロは、思わずため息をつく。

「……………好きにしる」

「ふふっ、お休みゼロ、リインフォース」

「はい、我が主」

「ああ……………」

こうして、はやてが眠りについた。リインフォースも、いつの間にか椅子で座って眠りにについている。

「……………」

ゼロは幸せそうに眠るはやてを見る。自分が救った。これが今回の戦いの結果全て。ゼロも体力的に疲れがあったんだろう。珍しく眠くなった。

「……………人の温もりも、悪くないものだ」

そう言って、ゼロははやての温もりを感じながらも、眠りにつくことにした。

MISSION - 18 「最強の存在」(後書き)

リクエストにあったオメガを登場させました。次回はまたゼロの頭がさえます。だんだんゼロがゼロでなくなっていくますが、お気に  
なさらずw

でわでわw

MISSION・19 「交渉と真実」(前書き)

はい、ゼロがおかしいお話です

まあここまで頭がキレてこそゼロなのではないかな・・・と

MISSION - 19 「交渉と真実」

戦いから数日して、ゼロはアースラで事情聴取を受けることとなった。

「こんにちは」

「……………」

そこにいるのはこのアースラの艦長、リンディ・ハラオウンだ。ゼロは無言でリンディを見据える。

「とりあえず……お茶でm」「いらん」「あらそう……」

残念そうにリンディが緑茶に砂糖を入れる。するとクロワールが隣で気持ち悪そうにしている。確かに、普通の人間なら絶句するだろう。そのお茶「リンディ茶」に。

「聞かせてもらうが、今この会話を聞くものはいないのだな」

「ええ、そうよ……では聞きましょうか。フェイトから聞くところ、あなたは人間ではないのね？」

「そうだ……俺はレプリロイドだ」

ゼロはレプリロイドについて話した。人を守るために作られた、その機械人間であることを。

「なるほどね……つまりあなたは完全な機械の人間なのね」

「ああ……」

「なら、もう少しw」断る「……やっぱり、そう？」

「体を弄られる趣味はない」

確かにレプリロイドという存在は素晴らしいものだ。テクノロジーも、発達している。管理局からすれば、喉から手が出るほどのものだろう。

「まあいいわ……それで、あなたの今後んだけど……あなたの身柄は管理局で預かろうと思うの」

「何故だ？」

「だって次元漂流者ですもの。帰る世界を探すならそのほうがいいでしょう？」

「断る。管理局の世話になるつもりはない」

「あら、ずいぶんと嫌われたものね」

やれやれとリンディがため息をつく。リンディの見る限りでは、ゼロはフェイトにこそ強く言ったりはしないが、クロノに対しての当たりかたは相当ひどいものだ。

「よかつたら聞かせてくれる？どうして私たちが信用できないの？」

「……では聞こう。お前達は何様だ？」

「え？」

「この世界で、貴様らの言う管理外という世界で、誰の許可を得てこの世界で活動をしている？」

ゼロの鋭い言葉に、リンディは怯む。

「そ、それは……」

「先ほどからお前は自分たちがまるで神であるかのように振舞っているようだが、お前達が偉いのだと誰が決めた？自分たちの力を示し、弱い立場の人間を脅しているようにしかとれん」

そう、先ほどのリンディの「ゼロを保護する」「元の世界が見つかるまで、こちらで身柄を預かる」まるで、ゼロを管理局に引き込もうとするような言動だった。

「……」

「自分たちの力を誇示し、人々を支配する……俺の世界にあったネオアルカディアという場所となんらかわらん……力による支配……そして都合の悪いことは排除するのだから」

「……」

リンディは何も言えなかった。確かにゼロの言うとおりだ。この世界は管理外世界であり、自分たちはこの世界のトップの機関というものになんの許可もなく活動をしている。だがそれは自分たちのことを認識させないためでもあり、そして魔法という存在を露見させ

ないためでもある。だがゼロの弱い立場を狙って自分たちはゼロを管理局に引き込み、そのテクノロジーを得ようとしているもの事実だ。

「そしてお前達のことだ。今回の事件をきっかけにはやてたを管理局に引きずり込もうという算段だろう」

「そ、それは・・・彼女たちが自分たちから言い出したことよ？」

「真実を知らず、か？」

「え？」

ゼロの言葉が理解できない。いったいどういうことなのか。

「確かに俺やシグナムたちははやてのために魔物を襲った。だが人を襲った例はないはずだ。なのはを除いてな。だがなのは本人は気にしていないという」

「・・・でも、あなたたちは希少指定の魔力生命体にも手を出してるわよ？」

「そんなこと『管理外』にいた俺たちが知るわけがあるまい」

確かに、管理局が勝手に決めたのであって、ゼロたちが知るわけがない。

「なら、あなたのクロノへの暴行は？」

「あれは正当防衛だ。クロワール」

「はいはい」

それはクロノが何もしていないゼロやシャマルを攻撃する様子だ。

「っ・・・話が逸れたわね。言い忘れたけど、彼女は今回のことを罪と受け入れて管理局へ入るのよ？」

「罪だと？」

「『今回はいろいろな人に迷惑をかけた。だから罪を償いたい』だそうよ」

「・・・・・・・・なるほどな」

「どうかしら？まだ彼女たちが管理局に入るのに納得できない？」

少し余裕ができたリンディが笑みを浮かべる。

「・・・無実の罪であいつが苦しむ必要はない」

「なんですって？」

「これを見てもらおう。リインフォースの体内で見つけたものだ」

それはオメガを倒したときに手に入れた記録だった。

「クロワールに解析させたところ、これには夜天の書の改ざん記録が残っていた」



「改ざん、記録？」

「これによれば・・・元々夜天を闇に変えたのは・・・・・・・・『時空管理局』だそうだ」

「!？」

これにはリンディも驚いて記録を見た。確かに、管理局の名が載っている。まさか、自分の夫を死に追いやったのが自分が勤めている組織だとは、夢にも思わなかった。

「ちなみにこのデータをハッキングして、今回の真実をそっちの世界にぶちまけることができるんだよねー」

「っ・・・何が、望みかしら？」

クローラーの言葉に、リンディの口から思わずそんな言葉が出る。そう、ゼロの『取り調べ』に応じた本当の理由だった。

「・・・聞いてくれるのか」

「・・・・・・・・私達にできる範囲なら、何でもしましょう」

管理局の失態を自分たちが撒くのもまずいわけではない。だが、時期を見なければ確実に時空管理局が基盤のミッドチルダの人々の不信が高まり、反乱がおきる。これは避けなくてはならない。これがリンディの出した答えだった。

「いいだろう、俺が望むのは・・・」

ゼロが掲示したのは以下の内容だった。

・はやてたちの完全無償無罪

・ゼロの世界の搜索

・ゼロの体についての秘匿

「この三つだ」

「わかりました……その条件を飲みましょう」

「どうせ上を脅すのに使うんだろうが……保険のためだ。渡すのはコピーを渡す」

「ええ、十分だわ」

こうして、リンディとの取り調べ否、取引は終わった。そしてゼロは扉のへ向かうと、リンディに言い放つ。

「忘れるな。あいつらは『何も知らずに』罪を償おうとすることを」

家に帰ると、ゼロの他にも来訪者がいた。

「ゼロさん……」

「ゼロ……」

なのはとフェイトだった。

「お前たちか・・・」

「あ、お帰りゼロ」

「ああ・・・そっちは取り調べは終わったのか？」

「うん、後は守護騎士のみんなだけや」

「そうか・・・」

とりあえず彼女達も無罪にはなるだろうが、今は黙っておくべきだろう。

「お前はこれからどうするんだ？」

「一応・・・うちは管理局に入って、これからうちの罪を償っていくつもりや」

「・・・」

ゼロはただ何も言わず、椅子に座った。はやては何も知らない。ゼロはそれのことを話さないことにした。

「あ、ゼロ？」

「今から料理作るから、手伝ってや」

「ああ、わかった」

言いながら台所で材料を切る。最近では手伝うことが多かったの  
お手の物だ。そんな中、なのはとフェイトも料理作りを手伝っている。

「お、二人とも中々やるな」

「ほんと？」

「あんまり慣れてないんだけどね」

「私は基本的なことはリニスに教わってたんだ。材料切ったり火を  
使ったりするのは少し得意かな。」

「私は一応喫茶店の娘だから、味付けとか盛り付けとかは得意かな。」

「二人ともそないなとここまでコンビの相性発揮せんでもええのに。」

「「あ、あはは。」」

ゼロはただ静かにその少女たちの楽しい会話を聞いていた。はやて  
が笑顔になれることがよかったと思ったのは、心の中にしまってお  
くことにした。

しばらくして、料理が完成した。

「おーし完成や。後は温めるだけや」

「「わー」」

と、二人が拍手する。途中色々あったが無事完成した。といっても全員が帰ってくるまでまだ少し時間がある。

「休憩だな。茶でも入れよう」

「あ、お願いな。二人も飲む？」

「うん、お願い」

「私も」

ゼロが人にお茶を入れるなど、ゼロの世界の人間たちが見たらどう思うだろうか。まあそれ以前にクローワールの我がままで何度かお茶を入れたりはしている。

「持ってきたぞ」

そう言ってみんなに紅茶を配る。ゼロが配る光景は、なかなかシュールなものだ。

「ありがとうゼロさん」

「ゼロ、ありがとう」

「おおきに」

言いながら紅茶を飲む3人。すると、はやてがゼロを見る。

「なあゼロ？」

「なんだ」

「この前言ってた、シエルって誰や？」

ずっと前から気になっていたのだろう。はやては少しもじもじと言  
う。

「シエルは・・・俺を蘇らせた科学者だ」

「科学者？」

「蘇らせるって・・・？」

この時はやては思う。自分たちはゼロのことを何も知らないのだと。

「なあ、ゼロ？」

「・・・今度はなんだ？」

「教えてくれへんかな・・・ゼロのことや、ゼロの、世界のことを  
・・・」

ゼロははやての言葉に、考え始める。どうしたものか・・・と。自  
分の世界は正直な話ショッキングだらけだ。人に反逆したレプリコ  
イドの話など、こんな少女たちにするべきではない。

「何故、そんなことを聞くんだ？」

「家族だからや」

はやての真剣な目を見てから、なのはとフェイトを見る。二人も真剣だった。

「いいだろう。だが・・・」

「大丈夫、管理局には言わないよ」

「だから、私達にもお話を聞かせて欲しいの」

「・・・いいだろう。俺が覚えていることを、話そう」

こうして、はやてたちはゼロの過去を知ることになる。

MISSION・19 「交渉と真実」(後書き)

次回はゼロの過去の話です

今までの買いそつだと思ってくねてもいいと思います



MISSION・20 「過去」(前書き)

ゼロの過去の話です。自分なりの解釈やサントラなどによって構成しました。

物語も終盤へと向かっていきます

MISSION - 20 「過去」

現在ははやて、ヴォルケンリッター、なのは、フェイトがいた。みんなが食事を済ませてから話すことになったのだ。

「さて、何から話せばいい？」

「そうやな・・・ゼロは・・・レプリロイドって、どうして生まれたん？」

「・・・そうだな、詳しくは知らん。人のために戦い、人のために生きる。そういう存在だ」

そう、それがレプリロイド・・・

「でも、ゼロの力は人のための力なの？」

「ああ、そうだ。イレギュラーを倒すための・・・だ」

「イレギュラー？」

「ウイルスが入り込んでバグが生じたレプリロイド・・・そして危険思想を持ったレプリロイド・・・それがイレギュラーだ」

「待って！じゃあハンターって・・・」

「そうだ。俺は同じレプリロイドをこの手にかけてきた」

そう、それが人間が出した答えだ。同じレプリロイドは、同じレプ

リロイドの手で処分させるのだ・・・と。これは人同士が殺し合いをするのと変わらない。

「もっとも・・・らしい・・・なのだがな」

「らしいって?」

「俺は目覚める以前の記憶がない」

「目覚める?」

「俺はかつて、ある研究所で眠りについてた・・・100年近くな」

もはや数年前のことだが、目を閉じればあの研究所はいつも思い出す。

「そんな、なんで?」

「・・・さあな。だが、俺がいることで血塗られた歴史が繰り返される。夢で見た俺はそう言っていた」

血塗られた歴史・・・ゼロ自身の? ウイルスの感染によって、イレギュラーの数は増えていった。そしてゼロは自らを封じる道を選んだのだ。

「お前は蘇ったと言ったが、何故お前は蘇ったのだ?」

「俺は、レジスタンスのリーダー・・・シエルの手によって蘇った」

「レジスタンス？」

なのはたちにとっては、聞きなれない言葉だ。

「俺が復活した当時、人間の理想郷・・・ネオアルカディアというものが存在した」

「理想郷？」

「戦争も争いもない・・・人々のパラダイス・・・だ」

「すごいね・・・そんなものができるなんて」

フェイトのイメージはおそらく人々がレプリロイドと平和に暮らしているイメージだろう。だが、現実は違っていた。

「だが、レプリロイドにとっては地獄だった」

「え！？」

「レジスタンスのメンバーは皆、不当な廃棄処分から逃れたイレギユラー指定のレプリロイドだ」

「どういうことや？理想郷なんやる？」

確かに、理想郷ならばなんでも叶う場所である。レプリロイドが不当に処分される理由が見つからないのだ。

「ネオアルカディアには問題があった・・・それは、エネルギーの消費問題だ」

「エネルギー？」

「エネルギー不足のせいで、無能と判断されたレプリロイド達は次々と廃棄されていった」

「そんな・・・」

なのはが声を上げる。レプリロイドも生命体である。そんなことが許されないというのがなのはの心なのだろう。

「それを重く見た人間の科学者シエルが、レジスタンスを引き連れて俺を蘇らせた」

「なるほど・・・お前の力が欲しかったわけだな」

「・・・それもある。だが、もうひとつ理由があった」

「理由？」

「当時そのネオアルカディアを納めていたのは俺の親友であり、英雄だったエックスというレプリロイドだったからだ」

英雄エックス・・・数々の事件で戦い、人を救ってきたエックスは英雄だった。

「なるほど、ゼロにエックスを止めようとさせたんだな」

「違う」

「え!？」

「エックスは、本物ではなかった」

「本物じゃ、ない？」

「エックスはネオアルカディアを作ると、行方不明になった。だからシエルが作り出した。」

一同が騒然となる。フェイトなどはとくに驚いていた。

「代用品としてシエルは『コピーエックス』を作り出した」

「つまり、その同等の力を持つお前を蘇らせたのか……」

ザフィーラの言葉に、ヴィータが叫ぶ。

「そ、それって!人間の都合でお前がいいように使われたってことじゃねーか!」

「そうよ!ゼロはそのシエルっていう子に利用されたってこと!？」

ヴィータとシャマルの言葉に、ゼロは冷静だった。

「結果を見ればそうなるが……俺も戦うことしかできないからな。結局戦った」

ゼロの言葉に、再び沈黙し、ゼロは言葉をつづけた。

「そして俺はコピーエックスと戦い『本物』のエックスと再会した」

「え!？」

「もはや体を失い、サイバーエルフとなったエックスは、俺にこう告げた」

『君がボクを残し、この世界から姿を消してから・・・ボクは10年近く、たったひとりで途方もない数のイレギュラーと戦っていたんだよ・・・それは、つらく悲しい戦いの日々だった・・・しかし何よりも悲しかったのは・・・だんだんと何も感じなくなっていく自分の心だったんだ・・・ゼロ・・・この世界のとは、しばらく君に任せたい。だからこのボクを・・・まだ、少しの間休ませて欲しい・・・ごめんね・・・』

「それから一年間・・・俺はレジスタンスが逃げるために囷となり、追っつてから逃げ続けた」

「一年も・・・」

それは体がボロボロになりながらの逃走劇。そして終わりを告げた。

「それからしばらくして、俺は新しいレジスタンスベースである男と出会った」

司令官エルピス・・・彼はゼロを嫌悪し、自分が英雄になると言い続けていた。

「エルピスは・・・エックスのボディに封印されたあるサイバーエルフを得るために狂った」

「ある、サイバーエルフ？」

「そうだ・・・名を『ダークエルフ』」

「ダーク、エルフ？」

「元々はイレギュラー戦争という戦争を終結させるエルフだったが、とある事情からダークエルフと呼ばれ、エックスが自身に封印したが・・・」

「まさか・・・」

シグナムが予想したことを言おうとして震えだす。そう、そのまさかだ・・・

「エルピスは、エックスを破壊して力を得た」

『！！！』

親友の本当の死・・・それを見たゼロはどれだけ辛かっただろうか・・・どれだけ悲しかっただろうか・・・

「そして俺はエルピスを倒した・・・だが、ダークエルフの開放によって恐ろしいレプリロイドを蘇らせてしまった」

「恐ろしい、レプリロイド？」

「名をオメガ・・・そしてそれを作り出したドクターバイルが、再びコピーエックスを復活させ、ネオアルカディアを統治した・・・さらに、奴らはダークエルフを得るために、そのオメガを乗せたミ



「サイルを人間の居住区に落とした」

「そんな・・・」

「そして俺が再びコピーエックスを倒すと、ドクターバイルは統治者となり・・・俺たちはテロリストとして認定された。だから俺はバイルを倒しに向かった・・・だが「ゼロ!」」

突然クロワールが声を上げる。

「それ以上は、駄目だよ・・・」

「クロワール・・・」

「クロワール? いったいどうしたん?」

「それ以上の話は・・・「クロワール」ゼロ・・・」

「ここまで来た以上、全てを話す・・・それしかない」

「ゼロ・・・」

「さて、続けよう」

ゼロは一度深呼吸をして、話を続けた。

「結局、俺はダークエルフを吸収したオメガを倒した・・・そこで、俺は真実を知った」

「真実?」

目を閉じると、ゼロは静かに目を開け、言った。

「オメガは、俺自身だった」

「どういう・・・ことや？」

「エックスによれば・・・俺は、オメガにボディを奪われ、コ  
ピーの体にその記憶や精神・・・

人間で言うなら、魂を・・・入れられたのだそうだ・・・」

「そ、そんな・・・そんな、ことが！」

フェイトが声を荒げる。彼女自身、一番信じられないという顔だ。

「そして、俺は・・・俺は、オメガを倒した」

「倒したって・・・自分自身の体だろ!？」

「戻りたいとは思わなかったのか!？」

ヴィータやシグナムの言うことはもつともだ。自分の体があるのなら、戻るべきだったはずだ。だが、ゼロは迷わなかった。

「あいつが、俺に言うてくれた・・・大切なのは心なのだ・・・と」

「心・・・」

「だから、俺はあいつを信じて全てに決着をつけた・・・それによ

つて、ダークエルフも、バイルの呪いから解放された」

「じゃあ、これで全てが終わったんだね？」

なのはの言葉に、ゼロは「いや……」と首を振った。

「確かにレプリロイドにとってはな……だが、人間がここから地獄を見ることになる」

「人間が……つて、あ！」

「そうだ……ネオアルカディアは、バイルが支配を続けた」

ゼロたちは旅を続け、平和になる方法を探しながら、バイルの軍勢と戦い続けた。

「俺はそこで、一人のジャーナリストと出会った。名をネージユ・ネオアルカディアから逃げてきた人間のキャラバンだった」

「ネオアルカディアを抜け出したって？」

「バイルは気に入らない奴を片っ端から処分していたらしい。今度はレプリロイドではなく、人間が地獄を見た……だが、人間たちはとある場所を見つけた」

「とある場所？」

「エリア・ゼロ……自然が存在する、機械の管理もない場所だ」

かつての戦争の傷跡からできた、そのオアシス。理想郷には遠いも

の、レプリロイドが一切いないというものだった。

「でも、それって……」

「そうだよ。人間が作って、勝手な都合で毛嫌いするなんて……」

「だがそれが人間だ……そして俺は、そのエリア・ゼロのわずかな自然を守るためにバイルと戦うこととなった。シエルがきつとわかりあえると……そう願ったからな」

「そうなんだ……」

人とレプリロイド……一度できていた傷の溝は一度は広がったが、少しずつ少しずつ……互いを理解し合って溝を埋めていった。

「そしてバイルのラグナロク作戦が発動した」

「え……ゼロが止めたんやないの？」

「地上からのエリア・ゼロへの攻撃は止まったが……それは囿だった」

「囿？」

「そうだよ……本来のバイルの目的は、宇宙から衛星砲台による地上無差別攻撃だったの。私とゼロは、それを止めるためにラグナロクに乗り込んだの」

地上への無差別攻撃……人間に絶望を与える。それがバイルの真の目的だった。

「ねえゼロ？」

「なんだ……」

「ここからは、映像があるよ……私が見て、記録してきたすべてが」

「……」

ゼロは迷う。その映像を見せるか否か……だが、ゼロはそれを見せることにした。

「わかった、頼む」

クロワールの力によって、その映像が白い壁に映し出された。それは、ラグナロクのコアがある場面だった。

『これが……ラグナロク・コア……』

『クーツクツクツクツ……ようこそ……はめつのシヨウのとくとうせきへ……！』

『その声……ドクター・バイルか……！あのラグナロクのコウゲキの中で、生きていたのか……！』

映像のゼロの言葉に、一同が驚く。

「……」

「バイルの配下にいたレプリロイド・・・クラフトが反乱を起こした。エリア・ゼロにいる人間・・・ネージュを守るために、まだ人やレプリロイドが残るネオ・アルカディアに砲撃をおこなった」

「え!？」

「結果的にその前にレジスタンスが動いてなんとかしたが、中心部にいたバイルは死んだ・・・そう思われていた」

「続き、流すよ?」

『生きていた・・・?・・・違うな・・・死ねなかつたのだよ・・・』

『・・・その力才は!』

それは皮膚が剥がれ、機械の顔をしたバイルの姿だった。

『クツクツクツ・・・このキカイの体に驚いたかね・・・?それとも・・・ワシがレプリロイドなら戦えると安心したか?ザンネンだったな・・・これでもワシは人間なのだよ・・・こんな体でも・・・ワシは人間なのだ・・・!!』

『なんだと・・・?』

『ダークエルフによるレプリロイドのシハイとイレギュラーの抹殺・・・のちに妖精戦争と呼ばれる争いを起こしたワシは妖精戦争が終わった時に、当時の人間どもの手である改造を施された。ワシの記憶の全てをプログラムデータに変換し・・・年老いたわしの体とともに、』

再生機能を持ったこのアーマーにおしこみおつた……」

そう、当時の人間たちはバイルへ死以上の苦しみを与えた。これが、後に大惨事を起こすとも知らずに。

『これがどういふことかわかるかね……？歳をとり…ワシの体がキズつくと、このアーマーがすぐに再生させる……戦争のあとの……光も自然も何もない世界で死ぬことさえ許されず、永遠に苦しみの中で生き続ける呪いをかけ……人間どもはワシをネオ・アルカディアから追放したのだよ！』

『……！』

『セイギだと！？自由だと！？くだらん！実にくだらん！キサマらレプリロイドがこの地上 何をした！機械人形のくせに自由をかげ、遙か昔に戦争をはじめたのはキサマらだろう！キサマら人間がこのワシに何をした！正義などという言葉を吐き、このワシを追放したのは貴様らだろう！』

バイルの怒りは止まらない。その長きにわたる苦しみがバイルを支配し、その憎しみの炎を燃やしている。その炎は人間、レプリロイドいや……全てのいけとし生けるものに向けられていた。

『ゼロ！キサマはそんなレプリロイドどもをすくおうというのか！？ そんな人間どもを守ろうというのか！？レプリロイドの支配など生ぬるい……！人間の抹殺など一瞬の苦しみでしかない……！生かさず……！殺さず……！ワシと共に……永遠に……！苦しみの歴史の中を歩き続けさせてやるのだ……！』

バイルの体に、ラグナロクコアが装着される。

『！』

『クヒヤーツハツハツハツハツ！このワシが教えてやろう・・・！愚か者どもに逃げ場などないということをや！ブタどもの居場所は・・・このワシの元にしかないということをや！この・・・ラグナロクを使つてなあ！』

『それが・・・お前の理想か？』

『理想だと！？戯言だ！』

そして戦いが始まる。激しいその憎しみの攻撃・・・だがそれさえもゼロは払いのけ、攻撃を続ける。そして、その決め手が決まる。

『流石だなあ！英雄・・・』

バイルが爆発し、その衝撃によって周囲の壁が崩れた。蒼く美しい星が映し出される。だが、それでも落下が止まらない。

『・・・クツ・・・！落下が、止まらない・・・！？』

『ゼロ！もう限界高度だわ・・・！』

『これ以上落下スピードが上がったらゼロを地上に転送できなくなつてしまう・・・！ お願い！戻ってきて！』

シエルが必死に訴える。だが、ラグナロクの落下は止まらない。



『まだまだ・・・まだ終わらんよ・・・!』

『バイル・・・!』

『クーツクツクツクツクツクツクツクヒヤーツハツハツハツハツ! 言った  
だろう! ワシはこの程度では死ねんだよ! もはやラグナロクの墜  
落は誰にも止められん!』

『ゼ、ゼロ・・・! もうダメ・・・! 戻ってきて! 早く!』

『・・・いや、まだ手はある・・・バイルごとコアを破壊さえすれ  
ば、ラグナロクは崩壊する・・・バラバラになれば・・・大気圏と  
の摩擦で全て燃え尽きるはずだ・・・!』

『そんな・・・ゼロ! そんな事したら・・・あなたは・・・!』

『クヒヤーツハツハツハツ! 出来るかね!? 貴様にそんな真似が!  
レプリロイドたちの英雄である貴様が! 人間を守る正義の味方が!  
地上の人間を守るためにこのワシを・・・守るべき人間であるこの  
ワシを倒そうというのか! どうだこの痛みは! 貴様に分かるかあ!』

憎しみの炎が激昂する。だが、ゼロは迷わない。

『オレは正義の味方でもなければ・・・自分を英雄と名乗った覚え  
もない。オレはただ、自分が信じる者のために戦ってきた・・・  
オレは、悩まない。目の前に敵が現れたなら・・・叩き斬る・・・  
までだ!』

英雄の選択を聞き、少女が叫ぶ。

『ゼロ……！ゼロ……！』

そんな少女に英雄はただ一言、こう言った。

『……シエル……オレを、信じる！』

『ゼロ ……！』

最後の戦いが始まる。バイルの攻撃で腕が、足が、肩が……斬られ、抉れ、吹き飛ばふ。それでもゼロは何の迷いもなく戦い続ける。

『おおおおおっ！』

ゼロの一撃の一ガキが当たり、バイルが崩れさる。

『このワシが……人形ごときに……！滅び……滅んでしまえええっ！』

爆発がおき、ラグナロクが崩壊していく。ゼロの足場が崩れ、ゼロは宇宙空間に投げ出される。そしてラグナロクの破片がぶつかり、共に地上へ向けて落下していく。

『………さよならだ、シエル』

そして、映像は切れた。

「……これが、俺がこの世界に来る前の全てだ」

「ゼロ……」

はやてがゆっくりと、ゼロに抱きつく。

「はやて・・・？」

「うっぐ・・・ひっぐ・・・」

はやては涙を流していた。はやてだけではない。そこにいた全員が、泣いていた。あのシグナムやリインフォースでさえ、涙があった。

「何故、お前達は・・・泣いている？」

「だって・・・悲しすぎるやん・・・なんで、ゼロはそこまで・・・」

「言ったはずだ・・・俺は、俺の信じる者のために戦った・・・ただ、それだけだ」

ゼロの言葉に、みんなが鎮まった。

「話は終わりだ・・・お前達は寝ろ」

言って、ゼロはリビングを後にした。

MISSION・20 「過去」(後書き)

どうだったでしょうか？ゼロの過去です

ゼロの過去というか、1〜4のまとめでした。次回はまた日常へと戻っていきます

MISSION・21 「平和の中で」(前書き)

一か月ぶりに更新です。テストを頑張ろうにも風邪気味なので力が  
入らずこっちに逃げてしまった。とりあえずテストがんばらなきや  
ゝ・・・

今回はあとがきにみなさんへ相談を載せましたので、協力をお願いします

MISSION・21 「平和の中で」

ゼロが映像を見せた次の日、ゼロはいつもどおりに朝を迎えた。起きて下に降りる。するとすではやては起きていて、朝食の準備をしている。するとゼロに気がついたのか、笑顔を向けた。

「お、おはようさん、ゼロ」

「ああ・・・」

あの映像を見せて変わるかと思いきや、あんまり変わっていない。むしろ、はやての顔が紅潮している。

「・・・どうかしたか？」

「ふえ!?!」

「顔が赤いようだが？」

言われてはやてはさらに顔を赤くした。

「そ、そんなことあらへんよ!?!」

「そうか、ならいいが・・・」

そんな会話をしていると、ドアが開かれた。

「」「」「おはようございます」「」

「ただいまー」

「今戻りました、主」

シグナム、シャマル、リインフォースが降りてきて、ヴィータとザフィーラが散歩から帰って来た。

「みんなおはよー」

「む、ゼロ・・・おはよう」

「おはようゼロ」

「ゼロ、おはよう・・・」

「よう、ゼロ・・・」

シグナム、シャマル、リインフォース、ヴィータの順である。若干リインフォースの様子がおかしかったりする。

「どうかしたのか？」

「いや、なんでもない」

「ザフィーラ、どういことだ？」

「さあな・・・」

こんな感じである。

「さ、朝ごはんにしようか」

こうして、いつもどおりの朝を迎えた。

朝食を終え、ソファで座っているとメールが来た。

「ん？」

「ゼロ、誰からや？」

「すすか・・・だ」

名前の表記はツキムラ スズカと出ていた。内容は以下の通り。

『おはようございます、月村です。今日はうちでお礼がしたいので是非ともはやてちゃんといらしてください。アリサちゃんやなのはちゃんたちとお待ちしています。迎えは出しますので、お待ちください』

とのことだ。

「はやて」

「なんや？ゼロ」

「すすかから、家への招待が来ている。はやても来てほしいそうだ」

「あ、そうなん？じゃあ準備せな」



シヤマルに連れられ、着替えるはやて。数分で着替え終える。10分後迎えが来て車に乗り込んだ。この世界では高級な車である『リムジン』という車だ。それからしばらくして車が止まり、扉が開く。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ゼロ、どないしたん？」

「いや、でかい・・・と思ってな」

そう、すずかの家はお屋敷だ。とにかくでかい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・（あいつが誘拐されるのがわかった気がするな）」

そんなことを思いつつ、ゼロは屋敷に入ることにした。

屋敷に入ると、見渡す限りの猫、猫、猫である。

「にゃ〜」

「わぁ、可愛いっ」

はやてもやはり女の子である。可愛い猫達に対して、目をキラキラさせている。

「あちらになります」

メイドに案内され、庭のような場所に出た。そこにはすでに、すず

か、アリサ、なのは、フェイトがいた。

「あ、はやてちゃん！ゼロさん！」

「はやて、ゼロ」

「はやて、ゼロ・・・遅いわよ」

「はやてちゃん、ゼロさん、いらっしやい」

4人とも若干ゼロを読んだ時の顔が紅潮していた。ゼロはそれを気にせず、はやての車いすを押して、席に着かせた。

「あ、ゼロ・・・うち椅子に座りたいんやけど・・・」

「わかった」

言っつて、ゼロは特になんの抵抗もなくはやてを抱き上げ、椅子に座らせた。そんな光景を4人はうらやましそうに見ていたりした。このあと、なのはが切り出す。魔法との出会い、フェイトとの出会い。そして、はやての事件・・・巻き込んだことへの謝罪。そんな話を、ゼロはその場で静かに聞いていた。今後この子どもたちは管理局に協力していくだろう。だからこそ、ゼロはこの子たちを見守っていることも、ひそかに思っていた。

「そういえばゼロ、ゼロってロボットだったのね」

「ああ、それがどうかしたか？」

「なんか、ロボットに見えないから・・・」

まあ、髪の毛があつて、人の様な肌があれば、ロボットには見えな  
いだろう。

「正確にはレプリロイド・・・機械ではあるが、限りなく人間に近  
いロボットになる」

「そして私はサイバーエルフ。プログラムだから、リインフォース  
みたいな感じだよ」

なんていいながら、すずかやアリサのところまで可愛がられている。

「でも綺麗・・・クロワールみたいなのはたくさんいるの？」

「そうだな・・・昔は何回か見たことがある。だがクロワールを使  
用してからは見ていない」

「サイバーエルフって、何種類かいるの？」

「ああ、ナース系という傷の回復をするエルフと、アニマル系とい  
う身体能力を上げるエルフ、そしてハッカー系という敵の戦闘状況  
を変えるエルフだ。たいていのエルフは一度使用すると死んでしま  
う」

「え!？」

なのはが驚きの声を上げる。

「だが、ここ最近ではクロワールのように、能力を使っても死なない  
エルフも出てきている」

「そうなんだ・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そんな話をしていると、アリスとすずかが不思議そうな表情でゼロを見る。

「どうした？」

「あ、いえ・・・」

「別に、なんでもないわよっ！」

慌てる二人。いったいどうしたのだろうか？よく見れば二人の顔は少しムっとなっている。おそらくなのはとフェイトたちしか理解できない会話をしていてヤキモチを妬いているのだ。それをクロワールが見逃さなかった。

「あれれ？二人とももしかして妬いてるの？」

「え、ク、クロワール、べ、別にそんなんじゃないよ・・・」

「そ、そ、そ、そ、そうよ！な、な、ななな・・・何を言ってるのよー！」

もう大慌ての二人。まったくもって説得力がなかった。

「あはは、顔真っ赤」

「うるさい!」

「いふあい」

アリスがクロワールの頬をつねる。この後楽しくお茶をし、ゼロは静かにその時の平和を楽しむことにした。

お茶会が終わり、ゼロははやてが乗る車椅子を押して、商店街を歩く。今日の夕食をまだ決めていないからだ。

「今日は何がええかな」

「さあな・・・だが、昨日は鍋物だったな」

「せやねえ・・・じゃあ今日はお魚にして・・・と」

色々買い物を終えた後、デパートを出る。

「寒つ・・・」

夕焼けが綺麗に染まっている。

「・・・」

「あ、あれ・・・」

「なんだ?」

そこにあるのは露店だ。どつやら射的のようである。

「ゼロ、あれとれる？」

「……どうだろうな」

「お、あんちゃんやるかい？」

そこにあるのは綺麗なブレスレットだ。どつやら宝石が付いていて、それなりに価値があるらしい。この店の目玉商品だろう。前の客が狙うが、重いせいで少ししか動かない。

「一回10発で400円だ。どうだい？」

「……」

キラキラした目でゼロを見る。はやて。

「わかった。店主、一回頼む」

「あいよー！」

と、銃を渡す。

「……なるほどな（クロワール）」

「（うん、私も思った）」

そう、ブレスレットの箱の裏に、粘着テープが付いているのだ。

「（にひひ、えいっ！）」

クロワールは気付かれないようにテープを引っぺがし、少しだけ落ちる方向へ寄せる。

「……………」

パンッ！

それは見事命中し、ブレスレッドは倒れる。それによって、店主は顔を真っ青にした。

「そ、そんな馬鹿な！」

「もうござ、店主……さてはやて……後は何が欲しい」

「あれとか、あれ……あとヴィータとかにあれもええな」

この後いかさまを見破られたこの射撃の店に残るものはなかった。

「あははは！やっぱりいかさまがあつたんか」

「うん、私が全部とっちゃった」

ゼロは現在大量のゲーム本体やらカセット、さらにはぬいぐるみなんかも置いてある。

「悪いことをする人間には必ず帰ってくるからねー」

「あはは……さすがはクロワールや」

「そういえばはやて」

ゼロは思い出したかのようにブレスレッドを差し出した。

「えへへ、ありがとな・・・ゼロ」

はやては嬉しそうに笑う。それをつけて、はやては上機嫌だ。公園に差し掛かり、はやてが車いすを止めた。

「どうした、はやて」

「ちよっとちよっと・・・」

はやてが手招きをする。

「なんだ」

「ええから」

はやてはゼロの手を引っ張り、自分のところへ寄せる。そして・・・

チュ

ゼロの頬へ、はやてがキスをした。

「なんだ？」

「えへへ、今日のお礼や」

「そうか・・・」



「あれ〜？ゼロもしかして照れてる？」

夕焼けに染まっただか、それとも違うものなのか、ゼロの顔は夕焼け色に染まっていた。

「さあ、早く帰ろう・・・あいつらが待ってる」

「うん、せやね・・・」

そんなことを言って、公園を後にしようすると、そこに人影が現れた。猫耳の二人の女性と、初老の男だった。

「・・・・・・・・何者だ？」

「・・・・・・・・私はギル・グレアム・・・・・・・・闇の書の輪廻に囚われた一人だよ」

MISSION・21 「平和の中で」(後書き)

とりあえず今回は平和&後半ギャグを入れました。最近は何の話がどんどん別方向に行ってるので心配です。

そくだみなさん、この話はSTSまでやるべきでしょうか?意見待ってます

MISSION・22 「家族」(前書き)

今回はかなりシリアスです。

MISSION - 22 「家族」

夕焼けに染まる海鳴臨海公園だ。そこには5人+1・・・ゼロ、はやて、ギル・グレアム、そして猫の耳からしてアルフのような使い魔・・・もしくはザフィーラのような守護獣という奴かもしれない。そしてクロワールを含めた6人だ。

「…………お前が、ギル・グレアムか」

ゼロは聞いていた。リンディから今回の事件の発端、そして理由を・・・それは、はやても同様であった。

「こうして、会うのは初めてだね」

「…………何の用だ」

ゼロははやての前に立つと、Zセイバーを手取る。クロワールからも笑顔が消え、戦闘態勢へと入っている。

「待ってくれ…………今日は、君たちに…………謝りに来たのだ」

「……………」

戦闘態勢としようとする使い魔二人を止め、グレアムは一步前に出た。

「お話…………お聞きします」

はやても静かに車椅子を押して、そう答えた。

それから20分ほど、グレアムは話をした。今まではやての生活面の資金援助をしていたこと、そしてそれがはやてを封印するまでの自分自身の偽善だったこと・・・そして大切な部下だった男・・・すなわちクロノの父のクライドのために復讐に囚われ続けたこと・・・その全てを、グレアムは語った。

「私は・・・本当に君たちに悪いことをした・・・そう思っている」

「・・・・・・・・それだけか？」

「何？」

話終えたグレアムは、驚いてゼロを見た。

「貴様は、確かに一種の被害者だっただろう・・・だが、それは・・・本当にそのクライドという男のためにやったことだったのか？」

「なんだと！」

「お父様はクライド君のために！」

「お前達には聞いていない・・・それに、人間と言う生き物は人のために忠を尽くすなど・・・そう簡単にできることではない」

レプリロイドだからこそ・・・というか、ゼロの言うことは的を得ていた。グレアムのクライドのために・・・これは、結局のところ自分のミスで封印確認をできなかったことへの罪滅ぼしなのだ。クライドが死んだという事実で美化しているだけであって、闇の書が

消えて喜びを得るのはグレアム一人なのだ。

「貴様らが本当に謝りに来たと言うなら・・・せめて、その服を脱いでくるべきだ」

そう、今の服は時空管理局の制服だ。ギル・グレアムは事件の事実を認め、管理局を辞任する考えを示していた。

「ゼロ・・・もうええよ」

「はやて・・・」

ゼロに微笑み、手を握った。その手は汗をかき、若干ながら震えていた。

「私は、貴方のことを怒ってはいません・・・でも」

一拍置き、グレアムを睨みつけた。

「うちの家族を傷つけた！それだけは絶対に許せへん！」

そう、はやてを覚醒させるため・・・シグナムを、ヴィータを、シヤマルを、ザフィーラを、使い魔の彼女たちに指示し、一度消し去った。

「プログラムだからとか・・・魔力生命体とか・・・そんなこと関係あらへん・・・みんなうちの家族で、大切なものや！それを傷つけた事実だけは、絶対に・・・あなたを許すことはできません」

はやては涙目になりながらも、その言葉を言った。自分を利用した

ことではなく、孤独の中からできた、5つの絆・・・そしてゼロとクロワールを合わせた7つの絆を傷つけられ、そして破壊されたことをはやては何よりも怒り、悲しんでいた。自分のことを援助してくれていたという事実が織り合わさって出て来た涙だったのかもしれない。

「・・・私は、確かに君の・・・いや、君たちの・・・その心に一生修復できないような傷を与えてしまった・・・それは本当に覆らない事実だ・・・だから、許してくれ。そしてこれから先・・・人を信頼できない人間にだけは、ならないで欲しい・・・」

そう言つてグレアムは地面に膝をつき、頭を下げる。何故イギリス人に土下座ができるのかは置いておき、誰もいないとはいえ公園で土下座など普通はできるものではない。

「・・・その心配はいらない、ギル・グレアム」

どこからか声が聞こえて来た。そこにいたのはシグナム、シャマル、リンフォース、ヴィータ、ザフィーラ・・・夜天の書の主、八神はやてに仕える騎士たちだった。

「みんな!？」

「お前達、どうしてここに?」

「私達だけではない」

その後ろから、なのはとフェイトも出て来た。

「なのはちゃんに、フェイトちゃんまで・・・」

「……ギル・グレアム……確かに、貴方がしたことは許されることではない。だが……」

「主はやたとゼロが……我らを救い……」

「私達は今ここにいて、そして幸せに生活を送っている」

「そんな生活をくれたはやてを、今度はうちらが守るんだ」

「主の意思と心は、これから我らが守り続ける」

「だから、もうグレアムさんが引きずることはありません」

「はやてには、私達がいるから……」

みんなの言葉に、グレアムは涙を流す。彼女たちは許そうと言っただ。グレアムと、グレアムがしてきたことについて。

「ありがとう……私は、救われた気がするよ……闇の書の輪廻から」

「あの……グレアムさん」

「何かね？」

「覚えておいてください……もうこの子たちは闇ではなく、夜天ということを」



はやては優しくそうグラムに告げる。

「・・・そうか、そうだな・・・ありがとう、夜天の主と、その守護騎士たち・・・そして、それを守ろうとする者たちよ・・・」

こうして、グライドとその使い魔であるリーゼロッテとリーゼアリアは公園から姿を消した。それからして、はやてが驚いてみんなを見ていた。

「みんな、どうしてここに?」

「主とゼロが遅いので、様子を見に来ました」

「心配したよ、はやて」

「はやてちゃんがまだ家に帰ってないって言うから」

「そっか、ごめんなあ・・・みんなに迷惑かけてもった」

いうと、シヤマルが首を振った。

「そんなことないですよ・・・みんな、家族なんですから」

「そうですね、主はやて・・・私達は、皆家族です」

「だからこそ、心配になって探しに来たんだから・・・迷惑じゃないよ」

「主は少し背負いすぎです。我らは主が背負うものを共にすることも使命ですから」

「我が主が望むのなら・・・私達は、どこまでも共にいますよ」

5人の言葉に、はやては涙を流した。

「ありがとうみんな・・・うちは幸せ者や・・・」

涙を流したはやての顔と、守護騎士たちの顔は、みんな笑顔だった。そんな話の後、みんな家で帰る。そしてウィータがあることに気がついた。

「そういえばはやて。このゲームとかおもちゃの山は何？」

「ああ、これ？」

「射的の商品だ」

「そうなんや、聞いて聞いて」

一緒に来ていたなのはたちも手招きして、はやてはさっきのことを楽しそうに話した。

「へっ・・・ゼロさんすごい」

「店主が悪事を働いていたんだから、私達は悪くないよ」

と、いじわるっぽい笑みを浮かべるクロワール。

「では我が主、その手にあるのも？」

そう、先ほどゼロが取ったブレスレットだ。

「せやよ〜ゼロが取ってくれたんや」

「そ、そうなんだ〜・・・はやてちゃん、ずるい」

「いいな・・・はやて」

「・・・お前達も好きなのを選び」

ゼロは言いながら袋を広げる。今話題のゲームから、携帯用ゲーム機・・・ぬいぐるみにモデルガン、アクセサリなど・・・どうやら店主も相当荒稼ぎをしたかったらしく、子供から大人まで目を引くようなものばかりが並んでいた。

「あ、じゃあ私これ！」

なのははレイジングハート同様に光るルビーの指輪。大人用なので、首からかけることにした。

「じゃあ、私はこれを・・・」

フェイトはネックレスだ。エメラルドの形が微妙にひし形で、彼女自身のことを連想させるからか、それを選んだらしい。それにしても、店の店主は一体どれだけの損をしたのだろうか。

「じゃああたしこれな！」

と、ヴィータは迷わずゲーム機を手を取った。

「ヴィータ？別にええけど一日一時間やで？」

「はい」

「では私はこれを頂こう」

シグナムが取ったのは綺麗な髪留めだ。ポニーテイルを降ろし、それを付け替える。

「わあ、シグナム似合ってるよ」

「そうか、ありがとう」

クロワールの言葉に、シグナムは若干照れている。

「じゃあ私はこれを頂きます」

シヤマルが取ったのはモデルガンとその弾だった。

「シヤマル、お前そんなものどーすんだよ」

ヴィータの言葉に、シヤマルが黒い笑みを浮かべる。

「先日キッチンに出て来た黒いあのカサカサと動き回るのを潰すためよ」

そつと驚いたらしく、その笑みに全員が若干引いていた。

「では、私はこれをもらおう」

ザフィーラが啞えたのは手の握力などを鍛える筋トレグッズだ。ザフィーラらしいと言えば、ザフィーラらしいだろう。

「では、私はこれを・・・」

リインフォースが言いながら手に取るのはアメジストが付いたイヤリングだった。簡単に取り外しができ、穴を開けないタイプなので彼女の美しい肌は守られている。

「だいたい配り終わったな」

「みたいだね・・・あ！これもらい！」

クロワールは嬉しそうにチョコレートを取った。

「あ！クロワール！ずりいぞー！」

「いいじゃない、早い者勝ち」

言いながら逃げ回るクロワールをヴィータが追いかけてまわす。そんな行動に、全員が笑っていた。

なのは、フェイト達を含めた全員で食事を終え、今ゼロは布団の中にいる。当然はやてが隣にいる。だが、今日はいつもと違った。

「何故お前達までここにいる」

「にははは、いいじゃないですか」

「はやてばかりずるいから・・・」

そう、なのはとフェイトも今日はお泊りだ。元々彼女達はそういう予定だったらしい。

「まったく・・・」

ため息をついて、ゼロは目をつぶる。

「ねえ、ゼロ・・・」

すると、なのはの隣にいたフェイトが声をかけて来た

「どうした」

「少し、聞いて欲しいことがあるんだ・・・」

フェイトは眠っているなのはとはやてを起こさないように、静かに喋りだす。彼女の生い立ち・・・そして、その人生を・・・それはフェイト自身コピーエックスのように、役割を演じるために作られた人間であり、そしてゼロと同じようにそれを知らないで生きて来たというものだった。

「・・・私はね、なのははやてたちが優しい言葉をかけてくれても、自分は人間じゃないって・・・そう思えてくるんだ」

「・・・」

「ゼロは、どうだったの？」

「俺は……俺は、前にも言ったぞ。フェイト」

「え？」

ゼロは静かに語り始める。

「俺はゼロだ……それ以上でも、それ以下でもない。俺は、オメガではない」

「どういうこと？」

「大切なのは心だ……そしてお前がお前であるように、フェイトは一人しかいない」

「ゼロ……」

自分と同じ境遇を背負う者同士……ゼロはその彼女の想いが良く分かっていた。

「だから、お前も……お前自身の答えを見つけて」

「うん……！」

ゼロが言い終わると、フェイトは起き上がってゼロの上に乗った。

「フェイト？」

「今日は、ここで寝たいな……」

「・・・好きにしろ」

こうして、今日も一日が過ぎる。翌日、なのはとはやてにフェイトが『お話をくらったのは言っまでもない。』



MISSION・22 「家族」(後書き)

とりあえずはやての怒りと、フェイトの告白・・・これがどうしても書きたかったので、書きました。この小説自体はあと3、4話位で終わると思います。

みなさんの意見をいただいた結果、STSを別小説として展開することを決めましたので、これからもよろしく願います。

MISSION - 23 「今と未来」(前書き)

最近感想がたくさん来て嬉しいです。ありがとうございます。で、その中にゼロシリーズのキャラを活躍させてほしいときていますが、一応言っと、四天王は3で死んでしまったらしいです。

オフィシャルコンプリートワークスという本のスタッフたちが話す欄でゼロ4にはなぜ四天王が出ないかという質問でプロデューサーが

「実はゼロ3の最後の大爆発でゼロを庇ってみんな死んじゃったのでいないんですよ」

とのこと・・・最初聞いたときは「はあ!？」と思いました。しかしこういう設定事実があるので、四天王が出ることは多分ないです。その代わり最終話と続編ではシエル、セルヴォが登場します。アルエットはどうだろうなあ・・・

まあ、ご期待ください。とりあえずバイルは出ません

平和な日々が過ぎ、季節はもう春で、明日から4月になる。

「えへへ・・・どや？似合っ？」

「わー！はやて似合ってる！」

「えへへ」

はやてはなのはたちの通う聖祥小学校の制服を着ている。明日から新学期なのだが、どうも待ちきれなかったようだ。ちなみにはやての足は大分回復し、リハビリにはゼロも付き合ってる。しかもかなりのペース。といっても、まだ誰かに手を繋いでもらえれば歩けるといったレベルで、一人ではまだ歩けない。しかし夏が終わるまでには一人で歩けるようになるだろう。

「よくお似合いですよ」

「ありがとな、リインフォース」

現在リインフォースはやてを支えている。はやてとのユニゾンではなくなってきたが、その魔力は健在だ。そのため単体で力を発揮することもできる。近い将来には、ゼロとのユニゾンもできるのではと言われている。なので、近いうちにリインフォースの2代目であるリインフォース？が誕生するらしい。どういう経緯で誕生するのかは知らないが、デバイスの開発は少し難航気味だが、少しずつ前には進んでいるのだという。

「はやてちゃん、そろそろお風呂に入っちゃいませよ」

「せやね」

そう言うてはやてとシャマルとヴィータがお風呂場に向かっていった。すると、ゼロが明日の日程についてシグナムに尋ねた。

「そういえば、明日の日程はどうなっている？」

「明日は入学祝いのパーティーするという話だったな」

「我々は翠屋という喫茶店でその準備を手伝うことになっている」

「シャマルは主はやての始業式の付き添いだ」

「なるほどな・・・なら俺たちは翠屋に向かえばいいのか」

「ああ」

その後色々雑談していると結構な時間が過ぎていた。

「そろそろはやて達があがる・・・か」

「そうだな。入る順番は私、リインフォースだったな」

「ゆっくりして」

「ああ、ありがとうゼロ」

こうして、静かに時は動いていく。

翌日、服に着替えた後いつもどおりにリビングに降りるゼロ。珍しいことにゼロしかいなかった。少し朝食の準備をするが時間経つてもはやてが起きてこない。おそらく、まだ眠っている。今日が楽しみで中々寝れなかったという考えが妥当だろう。ゼロは静かに料理を始めることにした。つくづく、この世界に来て今までしてこなかったことに慣れたのがおかしくて仕方がない。料理を始めて30分料理は全て作り終えた。すると、ようやくはやてが起床した。

「ゴメン、寝坊してもうた」

「はやてか・・・少し遅かったな」

「おはよう、ゼロ。朝ご飯の準備は？」

「もうできている」

「あ、そうなん？私のこと起こしてくれてもよかつたんとちゃう？」

「起こそうかは迷ったが、今日が楽しみで眠れなかったのだろう？」

「え・・・何でわかつたん？」

「昨日の様子を見てれば、だいたいわかる」

昨日の様子を見れば、確かにすぐわかるだろう。そんなゼロの言葉に、はやては顔を真っ赤にしていた。

「はう・・・・・・・・」

「料理はできた・・・後は運ぶのを手伝ってくれ」

「うん、わかったで」

それからしばらくして全員が下に降りて来た。朝ご飯を食べて皿洗いして着替えた後にはちょうどいい時間になった。

「もついい時間ですね」

「そやね。いってきまーす」

「道中、気をつけてな」

「うん」

「それではそろそろ行きましょう」

家を出てはやたとシヤマルは学校に。ゼロ、ヴィータ、シグナム、ザフィーラ、リインフォース、クロワールは翠屋に行った。今日は貸し切りなので臨時休業と言っことらしい。ゼロは店の中を飾り付けたり、料理作るのを手伝ったりする。ちなみに店の中なのでザフィーラは獣人形態をしている。

「ゼロさん、このテーブルをあっちに運んでくれるかしら？」

「ああ」

ゼロにとってこう言った力仕事はお手の物だ。レプリロイドと人間の力の差はずいぶんとあるので、ゼロは楽に2、3個テーブルを持

ち運んでいる。

「そろそろ主達が帰ってくる頃か？」

「そうみたいだな」

「あらほんと、もうこんな時間ね・・・ゼロさん」

「なんだ？」

「なのは達を迎えに行ってもらえるかしら？女の子ばかりじゃ少し心配で・・・」

「わかった」

「アタシも行く！」

とヴィータが言ってきた。ゼロはそれを了承して一緒に翠屋を出ることにした。翠屋を出て、話しながら学校の方に向かった。バスに乗って学校近くで降りて、しばらく歩いていると多くの学生たちが帰っていた。そして、その中ではやて達を見つけた。

「はやて！」

「ヴィータ！」

ヴィータがはやての方に向かって走り、抱きつく。

「ゼロも！迎えに来てくれたんか？」

「ああ、なのはの母に言われてな」

こうしてゼロ、ヴィータ、はやて、なのは、フェイト、すずか、アリサで帰るのだが……

「どうしてこうなる？」

じゃんけんをして、はやてとなのはが手を繋ぐ。悔しそうにフェイトたちが見ているという状況だ。

「ええやん、別に。ゼロもいややないやろ？」

「……よくわからんが、周りの視線が痛い」

幼くも、可愛い少女たちが一人の男性を囲んでいればそれもなるだろう。そして負けた3人はというと……

「気にしないでください」

「つく……あそこでパー出しておけば」

「また負けちゃった……」

「……次こそ」

などと、言っている。そんなことをしているうちに翠屋へ戻る。そして5人の進学及び、はやての復学パーティが行われた。それは夜遅くまで続き、みんなはその楽しい時を楽しんだ。ゼロもこの時は静かにその時を楽しみ、微笑んでいた。



パーティが終わり、今は帰路についている。はやてとクロワールは爆睡中。はやてはゼロがおぶっている状況だ。

「それにしても今日は星が綺麗ね」

「そうだな」

雲一つ無く星がよく見える。これなら明日もいい天気になりそうだ。そんな中、シグナムがゼロを見つめていた。

「・・・ゼロ」

「なんだ」

「聞いてみたいことがあるんだがいいか？」

「ああ、構わないが」

「おまえが居た世界が見つかったらどうするつもりだ？」

一瞬空気が張り詰めた。

「そうだな、とりあえずレジスタンスに生きていることを教える。必ず帰ると・・・そう約束をしたからな」

「その後は？」

「エリアゼロの復興と、再生・・・シエルが望むであろう人とレプリロイドの共存について考えるつもりだ」

多くの自然があるエリアゼロ・・・そこを守るつとするシエルと人間たち・・・そんな彼女たちを守るのが、ゼロの役目でもある。

「その後は？」

今度はリインフォースが尋ねてきた。

「そうだな・・・その後個人的に旅をしようとも考えている。ネオアルカディアから逃れたキャラバンはエリアゼロだけではない。そんな彼らを、エリアゼロに導くつもりだ。今回の戦いで、俺たちの星は傷つきすぎた。そしてそれが終われば、またこの世界でお前達を見守っていくつもりだ」

ゼロがそういうと、全員がホツとしていた。

「どうした？」

「いや、何でもない」

「世界を回る旅も、復興作業する時もはやてちゃん達は手伝うって言うわね」

「そうだな。主達ならそう言うだろう」

「勿論私達もね」

「その時は遠慮なく我々に声を掛けてくれ」

「いいのか？」

ゼロが聞くと、リインフォースが微笑む。

「家族なのだからな。それにゼロ、私たちはおまえのおかげで生きて、こういった日々を送れてる。それくらいはさせてくれ」

「・・・そうだな、その時は頼むとしよう」

「ああ、まかせろ」

ゼロはシグナムたちの言葉に喜びを感じ、小さく微笑んだ。

MISSION・23 「今と未来」 (後書き)

ということ、ゼロの性格が優しくなっていくお話でした。後2話  
位で完結しますので、どうか最後までお付き合い合ってくださいませ・・・

MISSION・24 「悪夢、再び」(前書き)

次回でとうとう最終回となります。

MISSION - 24 「悪夢、再び」

はやてが学校に入学して、穏やかな日々・・・だが、管理局から要請が来ないわけではない。今日は学校が休みではあるが、管理局からの依頼がアースラに来ていた。研修期間と言うことで、全員がそこにいる。

「さて、行こう！」

アースラから無人世界へ向けて出発し、無人世界に降り立つ。

「・・・すごい世界だ」

そこは無人世界ではなく、人々が滅びた世界だった。砂漠に埋もれるビルの数々・・・そして、動物や人の骨

「これも、世界が崩壊した一つの結果・・・か」

「そうだね・・・そうだ、クロノ君。今回の任務は？」

なのはが通信を開き、クロノに聞く。

『今回は、その世界で探知されたロストログアの搜索だ。この世界を崩壊させた要因とも言える・・・十分気をつけてくれ』

「了解！」

こうして、ゼロたちは反応がある場所へと赴くことになった。

「ここもすごいね・・・」

街の中心と言える部分には、多くの瓦礫やらなにやらが散乱していた。

「・・・あ、あった!」

はやてが何かを見つけた。それは紅く光る宝玉だった。

「みんなー! あったでー!」

「おー! さすがはやて! んじゃ、さっさと帰ろうぜ!」

こうしてはやてたちが封印を施し、そこを立ち去ろうとする。だが、そこで宝玉が光り始めた。

「なっ!?!」

そして宝玉から触手のようなものがはやてに伸びた。

「はやて!」

ゼロはとっさにはやてを庇い、その触手の攻撃を受ける。だが触手は絡みついたかと思うと、そのまま離れてしまった。

「!?!」

そして紅い宝玉はさらに光を発し、一つの形を形成した。それはゼロと同じ姿・・・同じ武器・・・

「お、お前は……」

「ゼロが、二人……」

「違うよ……あれ……」

そう、ゼロと違うところ……それは額の宝石と、Zセイバーの色……翡翠ではなく、蒼……Zセイバーは紫色で、肌も薄い紫だ。そして決定的に違うのはその眼だった。鋭い眼光は紺ではなく、真っ赤な色で染まっていた。そして……この一言だった。

「我はメシアなり！はーっはっはっは！」

ゼロのオリジナルボディを持つレプリロイド……オメガの再臨だった。

「はやて、下がれ！」

ゼロはZセイバーを持って駆けだし、剣を交える。そんな攻防が続くから、シャマルが連絡を取っていた。そして驚愕に顔が染まっていく。

「そんな……」

「どうした、シャマル!？」

「あのロストロギア……あれは『幻想の悪夢』というロストロギア……触手が触れたものの記憶の中で戦闘能力が特化しているものを選び、コピーする……そういうロストロギア。この世界



が滅びたのも、多分誰かの悪夢ともいえる兵器がコピーされたことによる暴走だと思っわ・・・」

「それじゃあ・・・」

「あそこで戦うもう一人のゼロは！」

リインフォースがまさかという声でゼロたちを見る。

「そうよ・・・あれがゼロとクロワールが話していたレプリロイド・・・史上最強の体と、史上最悪の心を持った戦士・・・『オメガ』」

一方ゼロはオメガと戦いを繰り広げていた。そこに別の武器を使う余裕などない。Zセイバーとバスターのみでゼロはオメガに立ち向かう。

「おおおおっ！」

「滅びよー！」

互いの攻撃がぶつかり、衝撃波があたりを吹き飛ばす。ビルが倒壊し、砂が吹き飛ぶ。

「つくー！」

「はーっはっはー！」

「クロワール！防御機能を上げる！」

『も、もうやってるよ!』

そう、この前のオメガと違い、完全に戦ったことのある本物と同じ性能、力、耐久性・・・偽物であるのにもかかわらず、ほとんどが同じだ。

「消え去れ!」

「ぐっ!」

オメガの攻撃を避けてバスターを連射するが、いとも簡単に避けられ、同じようにバスターを連射される。その威力はけた違いだ。

「ぐあああああっ!」

「ゼロ!」

バスターをまともにくらい、地面に叩きつけられる。そのゼロのバスターの数倍違う攻撃に、ゼロは苦戦する。

「ぐっ・・・」

「消えるがいい!」

ゼロはその攻撃をZセイバーで受け止める。が、その勢いに押されてゼロが苦悶の表情を浮かべる。

「はあっ!」

一瞬の隙を狙い、Zセイバーを振り下ろした。それがオメガにヒッ

トする。

「ぐっ！」

「はぁ……はぁ……はぁ……」

20分のこの攻防でゼロは大きくダメージを負った。しかし、それに比べてオメガはかすり傷だけだ。

「さあ、終焉だ……」

「紫電……一閃！」

「むっ！」

紫の雷撃が舞う。シグナムがオメガに斬りかかったのだ。オメガはそれを避け、距離を取る。

「ゼロ、大丈夫!？」

そしてはやて、シャマルが駆け寄り、ヴィータとザフィーラ、リインフォース、アルフ、ユーノもオメガに向かって行く。

「くらええ！」

「鋼の軛！」

「飛竜……一閃！」

「チェーンバインド！」

「ストラグルバインド！」

5人の攻撃がオメガに当たった。しかし・・・

「ござかしいわぁ！」

「ぐあああぁっ！」

「うわぁ！」

「ぐぐうう！」

「わっ！」

「がっ！」

吹き飛ばされる。だが、策はこれだけではない。ヴィータとシグナムが声を上げる。

「なのはぁー！」

「テストロツサア！」

「はい！行くよフェイトちゃん！全力全開！」

「うんなのは！疾風迅雷！」

「「ブラストシューツ！」」

なのはとフェイトによる、中距離殲滅コンビネーションである、空間攻撃のカラミティ、ブラストシールドが発動し、それがオメガを包み込む。

「ぬおおおおおっ!」

オメガが光に包まれる。

「やった?」

なのはが言うが、その煙からバスターのエネルギー弾が発射され、正確なのはとフェイトが撃ち抜かれる。

「きゃあ!?!」

「うああっ!」

そのまま地面に叩きつけられる。

「ぬるい!ぬるいぞ!この程度で我を……!メシアである我を倒そうなどと!」

オメガにはヒビが入っているものの、致命的な傷は何一つ受けていない。それこそ、闇の書の防衛プログラムの数十倍の力を誇っていた。

「お前ら……逃げる……」

「ゼロ!?!」

「このまま、戦っても・・・相討ちか、負ける・・・」

ゼロはZセイバーを持って立ち上がる。

「ゼロ、何を・・・？」

「これ以上戦っても、勝ち目はない・・・せめて、俺が相討ちに・・・」

このときゼロらしくもないほど焦っていた。このままでは全滅する。その前に何とかしなければならぬ。どんな戦士にも、動揺は戦場で命取りになるのだ。

「ゼロ」

ゼロがはやくに言うと、はやくがゼロを呼ぶ。その瞬間、はやくが手を上げた。

パアアン！

「はやく・・・何を？」

「そないなこと、言うたらあかん！いつものゼロなら、もっと策を考えて戦はずや！なのに、なんでそないなこというねん！」

「はやく・・・」

ゼロは驚く。今自分は、はやくに殴られ、怒られている。

「相討ちとか、そないなこと・・・言わんといて・・・ゼロ、

お願いや・・・あきらめたら、絶対に、あかん！」

はやてはボロボロと涙を流し、ゼロの手を握っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・はやて」

そして、ゼロは立ち上がる。

「え？」

「ありがとう」

ゼロは再びZセイバーを握り、オメガに斬りかかる。

「クロワール！俺へのエネルギー供給を最大にしろ！一撃で仕留める」

「ゼロ・・・それは、相討ちのため？」

「違う、勝つためだ」

ゼロが言うと、クロワールはにっこりと笑った。

「うん、それでこそゼロだね・・・わかった、行くよ！」

ゼロの体に虹色の光が巻き起こり、Zセイバーへ光が溜まっていく。

「その程度で我に立ち向かうとは・・・笑止！偽物は偽物らしく、消えるがいい！」

オメガが笑いながら同じようにチャージを始める。しかし、ゼロは

迷わない。

「偽物だろうが、関係ない……俺はゼロだ。それ以上でも、それ以下でもない」

「正義の味方の英雄気取りの愚か者が！消し去ってくれる！」

オメガの言葉に、ゼロは目を閉じる。

「俺は……正義の味方でもなければ、自分を英雄と名乗った覚えはない」

それは、どこの場所でも、世界でも同じこと

「俺はただ、自分の信じる者のために戦ってきただけだ」

過去も、今も……そして未来も……それは変わることのないただ一つの意思

「俺は悩まない……目の前に敵が現れたなら……」

Zセイバーを強く握り、駆けだす。そして……

「叩き斬る、までだ！」

「じれかしい！」

「「おおおおおおおおおおおおおっ！」」

そして、二つの紅い閃光は互いの剣を振り下ろした。それがぶつか



り合い、輝きが生まれる。かたや怒りと憎しみの塊を纏う戦士・・・かたや、信頼と希望を携えて戦う戦士の光。互いに相いれるはずのない二つの存在が放つ光はぶつかり合い、美しい光を放った。そして・・・

ズガアアアアン！！

爆発が起きる。はやては煙が晴れたことを見計らい、煙の中心へ、シヤマルの制止を振り切って飛び込んだ。しかし、そこにあったのはゼロのものと思われるヘルメットだけだった。

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

「うっ・・・」

ゼロは、とある場所で目を覚ました。

「うっはっ..」

金髪を揺らして立ち上がると、そこは自然に囲まれた世界だった。

「馬鹿な・・・」

先ほどまで砂漠にいたのにもかかわらず、そこは自然に溢れ、穏やかな川が流れていた。そして、一つの看板を見つけた。まだ新しいものだ。そこに書かれていたのは・・・

エリア・ゼロ

「・・・戻って、来たのか？」

オメガとの戦い、最後の衝撃でこの世界に吹き飛ばされたのかと考  
える。だがそれ以前に、はやてたちの安否が気になった。

「ゼロ、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ・・・クロワール」

「何？」

「奴は・・・オメガはどうなった？」

「大丈夫、消滅するの、ちゃんと見てたから・・・」

クロワールの言葉にゼロは安堵し、ため息をついた。

「そうか・・・」

すると・・・

ドオオオン！

「なっ!？」

「爆発!？」

ゼロは立ち上がり、煙が立ち上がるほうを見た。

「あれは・・・集落のほうか！」

「行こうよゼロ！シエルやアルエットたちが心配だよ！」

「ああ！」

こうしてゼロは再び、戦いへと赴く。

MISSION・24 「悪夢、再び」（後書き）

今回のオリジナルロストロギア『幻想の悪夢』は、結構前から予定してました。

ゼロの冷静さを奪うための姿形、そして強さ・・・ゼロらしくないところをはやてに戻してもらおう。こんな話を書きたかったので書きました。できれば今回のことで悪く言うのはやめて欲しいです。

さて、次回で最終回となりますが、続編は予告通りにやりますので、お楽しみにしてください

MISSION・FINAL「ZERO」(前書き)

最終回です。今まで読んでくださった読者のみなさん、ありがとうございます。  
ございました。

これからは続編に取り掛かるので、出来次第読んでいただきたいと思います。  
思います。

それでは、最終回をお楽しみください

MISSION・FINAL 「ZERO」

エリア・ゼロ・・・それはかつて戦争があつた傷跡でもある。だがそんな傷跡から、自然がはぐくみ、人々は新たに樂園を手に入れた。そう、一人の英雄を代償に・・・そして、そんな英雄の戦いから早くも『一カ月』が過ぎようとしていた。

「ゼロ・・・」

科学者の少女、シエルは空を見上げる。絶望的とも言われているゼロの帰還・・・それを未だに信じ、人々の未来のために戦い続けている。

「シエル！」

「ネージュ」

紅い髪の女性。シエルに「ネージュ」と呼ばれた女性は、ジャーナリストの人間だ。彼女もまた、先の戦いで大切なレプリロイドを亡くしている。

「もうすぐお昼だから、どう？」

「え・・・ええ、行くわ。ちょっと待ってて」

シエルは現在、このエリア・ゼロの土の性質調査の途中だ。それとというのも、このエリア・ゼロの自然をどう拡大するか・・・というものだ。人とレプリロイドがよりよく暮らすために、シエルは日々

頑張っている。

「シエル、あんまり根気詰めちゃだめよ？」

「ええ、わかってるわ・・・でも、こうでもしないと」

「・・・ゼロのため・・・って？」

「・・・」

ネージユもわかっている。シエルが今どんなに悲しんでいるのか。そしてその悲しみを紛らわせるために研究に没頭しているのも。

「でも、そのゼロが帰ってきてあなたが倒れたりしたら、ゼロが悲しむでしょ」

「それは、そうだけど・・・」

「わかったならほら、行くわよ」

「あ、ネージユ！」

ネージユはシエルの手を引き、むりやり集落へと連れていくことにした。

集落に着くと、レジスタンスの面々と、集落の人間が楽しそうに食事をし、騒いでいる。一度は人を恨んだレプリロイド、一度はレプリロイドを拒んだ人間。だが、今は違う。互いに歩み寄り、その溝を埋めている。

「ほらコルボー！すっかりしねえか！」

「も、もう食べられませんよお・・・」

「何言っただ情けねえ！」

と、大柄な集落の人間が馬鹿笑いする。隣にいるアルエットはそれを見て大笑いしている。シエルはそれを見て、いつも安心する。これが自分たち・・・そして、ゼロが守ったものなのだ。

「ほら、シエルも食事にしましょう」

「ええ、そうね」

シエルは頷いて皿を取り、サラダや肉を取る。環境が整ってきたためか、栽培や牧場などでもできるようになってきたため、食料は安定している。さらにエネルギー水晶もネオアルカディアから取ってきたり、システム・シエルによってエネルギー問題が解決されている。

「そつだ、シエルさんよ」

「は、はい？」

「この間もらった道具だが、えらく良くてな！集落が拡大出来たよ！」

「それは良かった。また何かあったら言ってくださいね」



シエル自身、今までレプリロイドの中にいたので、人間と触れ合う機会は少なかった。だが今はこのように少しずつ慣れ始めている。こうして、エリア・ゼロは『本当の理想郷』へと変わり始めていた。だが、そんな平和も長くは続かなかった。

ズガアアアアン！

「な、何！？」

「敵襲だあゝ！」

「敵襲ですって！？」

シエルは報告するレジスタンスの言葉に驚く。バイル軍はもういない。なのになぜ、敵襲があるのだろうか。すると、集落の男が声を上げる。

「シエル、考えてもしかたがねえ！男は武器を取れ！コルボー！お前はレジスタンスを指揮しろ！」

「は、はい！」

コルボーが走り、戦場へと向かって行く。

「俺たちの指揮は「私がするわ」ネージユ！？」

「ぐずぐずしないで！武器を確認していくわよ！」

「だ、だがお前は・・・」

「女だからってなめないで。私だって戦えるわよ」

「そ、そうだったな。よし、行くぞ！女子供は避難しろ！」

こうして、戦いが始まる。

一方戦場

「な、なんだあれは！？」

それはかつてネオアルカディアに配置されたゴーレムに似たものだ。

『我らバイル軍がここを支配する！行け！』

「バイル軍・・・！？」

その指揮をするのはイナゴ型のレプリロイドだ。

「我が名はアバドン！バイル様の意思を継ぐものだ！」

声と共にバリアント・ファイアなどが出撃する。そう、彼らは残党なのだ。バイル勢力がここを襲う。あり得ない話ではなかった。

「応戦だ！撃てー！」

コルボアの指揮でレジスタンスが動く。そして、シエルもこの場にいる。

「シエルさん！？ここは危険ですよ！？」

「わかってる……でも、話せばきっと……」

「お前がシエルかあ？」

アバドンがシエルを見る。

「そうよ！どうしてこんなことをするの！？どうしてこんな……」

「我らはバイル様を継ぐ！人間の支配！それこそ我らの絶対のルールだ！」

「バイルはもう死んだわ！」

「だからこそ継ぐのだ！この世界の暗黒を！」

バイルの意思……詰まる話、このレプリロイドにはバイルのバックアップデータがあったのだ。

「そして目障りな英雄はもういない」

「違う！ゼロは生きてる！」

シエルは声を張り上げる。

「ほっ？」

「ゼロは生きて、きつと帰ってきてくれる！」

「なら、英雄に助けてほしいと願ってみるんだなあ！」

アバドンの拳がシエルへと振り下ろされた。前に出ていたせいで、他のレジスタンスと人間はシエルを助けられる位置にはいない。

「シエル！」

ネージュが叫ぶ。間に合わない

「ゼロ・・・！」

シエルはその場に座り込み、必死に願った。そして・・・

ガキイーン！

「ぐあああああああ！手が！俺の手があ！」

アバドンの手が斬り落とされた。

「え・・・？」

シエルは恐る恐る目を開けた。そこに立つのは、金色の髪をなびかせ、翡翠の剣を持ち、紅いボディを輝かせた戦士・・・その名は

「ゼロ！」

ゼロが、シエルの前に再び姿を現した。

「ゼロ・・・」

「シエル、下がってろ」

ゼロはZセイバーを構え、敵を見据える。

「ゼロ！？お前があのだと！？」

「・・・そうだ」

「だったら、死ねえ！」

アバドンが背中から小型のイナゴロボットを射出する。だが、ゼロはバスターでそれを消し飛ばし、再び斬りかかる。

「ぐあああつ！」

「失せろ！」

エネルギーがチャージされ、その一閃がアバドンに見事命中した。

「ば、馬鹿な・・・この俺が・・・バイル様の意思を継ぐはずのこの俺がああ！」

「バイルの薄汚れた野望・・・今度こそ消えろ」

爆発が起きる。それはバリアント達を巻き込み、消えていった。

「・・・シエル」

「ゼロ・・・」

「任務完了帰還した」

「ゼロっ！」

シエルがゼロに抱きつき、それにつづいて他のレジスタンスや集落の人間たちもゼロのもとへと駆け寄った。

「ゼロ！」

「ゼロさん！」

「ゼロお！」

そのあと避難していたアルエット達もゼロに泣きながら抱きついた。こうして、ゼロは無事に自分の世界へとたどり着いたのだった。

.....

八神家

ゼロがいなくなってから、早くも『一ヶ月』が過ぎた。

「はぁ・・・って、あかんあかん」

こんな顔をしたら、みんなに心配をかけてしまう。つらいのは自分だけではないのだから。はやては自分にそう言い聞かせ、料理を作り続ける。

「はぁ・・・」

しかし、ため息は出でしまう。ゼロがオメガの偽者を倒した時、ゼロが居なくなつた。むしろ忽然と消えたと言つた方が正しいのかもしれない。はやてたちで必死になつて探した。・・・何時間も何時間間も。それでも見つかつたのはゼロのヘルメットだけだつた。生きているのか、死んでいるのかさえ、わからない。

「ゼロ・・・」

泣きそうになる。いつもだつたら隣で一緒に朝ご飯作っているはずの時間だ。クローフルがつまみ食いをして、それをゼロが止めて、はやてが笑う。はやてはゼロのことばかり考えてしまう。

「って、あ、お鍋お鍋」

お鍋に入れていた味噌汁を沸騰させそうになる。ゼロの顔が浮かぶ。買い物の時、任務の時、リハビリの時、学校の送り迎えの時、ゼロがいつもはやての隣にいた。戦士として戦うその姿と、戦い終わつて見せてくれた小さな笑顔を見て、いつも胸が熱くなった。強力な敵や、指名手配の犯罪組織のアジトに乗り込むときは、いつも不敵な笑みをよくしていた。それがまたはやてにはかっこよく見えた。しばらくしたら日常生活の方はいつもと変わらない笑顔に戻つた。いつからだつたらうか。気付いた時にはゼロのことをよく目で追つていた。なるべくゼロの傍にいたいと思つた。ゼロがなのは、フェイト、すずか、アリサ、リインフォースと話している時はちよつとイラつてすることがあつた。自分はゼロのことをどう思つていたのか。ただの家族。いや、違う。これはまた、別の感情。

「好き・・・なんやろうなあ・・・」

ゼロが頭に浮かぶ

「ゼロ・・・何で、急にいなくなってしまったん・・・？」

涙が零れた

朝食の時間になって、八神家が全員揃い、朝食となった。ただ、ゼロの席は空席だった。そして、とても重い沈黙が続いた。このところ、八神家の食卓はいつもこうだ。はやてはこの場を乗り切るため、話題を出した。

「あんな・・・実は今日、ゼロの夢を見たんや。」

「ゼロの!?!？」

「うん。ゼロがバイル軍ちゅー軍隊の残党と戦って、シエルさんを助ける夢や・・・レジスタンスのみんなも、人間の人達も・・・みんな喜んでった」

全員が驚いていた。そのはやての言葉に。そこまで驚くことを、はやては言っただろうか？

「はやて・・・それとまったく同じ夢・・・アタシも見たぞ」

「ヴィータ・・・お前もか。主はやて、私も同じ夢を見ました」

「ええ!?!二人もなの!?!私も同じ夢を見たわ」



「お前達もか・・・私も同じ夢を見た」

はやてだけではなく、ヴィータもシグナムもシャマルもザフィーラも同じ夢を見ていた。それでは・・・

「リインフォースも？」

「はい。私自信も驚いているのですが皆と同じ夢を見ました。ゼロが勝って、エリア・ゼロの平和を取り戻す夢を」

やはり、リインフォースも同じ夢を見ていた。

「しかし全員揃って同じ夢を見るとはな・・・恐らくあの夢は・・・」

「本当にあつた事・・・でしょ？」

「そやね。それ以外考えられへん。こんな偶然は普通は起らへんし・・・よかった。ゼロとクロワールは無事や。間違いなく生きている・・・ほんまによかった。」

そうはやてが言うと、みんなが凄く安心した顔になった。はやて自身も凄く安心していた。

「なあ、はやて。ゼロは・・・」

「大丈夫、絶対また会えるで・・・家族なんやからな。」

そう言った後全員に笑顔が戻った。

「そや、後で買い物に行かへん？」

「買い物ですか？」

「せや。ゼロはいつも同じ服ばっか着てたし・・・また新しいの買っておかな・・・帰って来た時のために」

「そうですね」

「ゼロも喜ぶと思いますよ、はやてちゃん」

「ゼロの奴ほつといたらいつつも同じだからな。たくさんも買っとかね」と

「あはは、そやね」

ふと窓から外の天気を見してみる。夢で見た、ゼロの世界と同じような、雲ひとつないすばらしい青空。

「あ、いい天気」

なぜだろうか、この空を見ているとまた会える。はやてはそう感じた。

Fin

MISSIONAL・FINAL「ZERO」(後書き)

次回、あとがきです

## MISSION・AFTER 「後書き」

これにて、魔法少女リリカルなのはA's〜真紅の英雄〜の連載を終了いたします。

ロックマンゼロCOLLECTIONの発売を記念して作成したこの作品ですが、私としても予想外の20万アクセスを超える結果となりました。これも、読んでくださった皆様のおかげだと思います。もともとは単なる発売記念だったのですが、予想外にも私のがのめりこみ、こんな結果となりました。書いていても楽しかったので、私としても満足です。

今回は、続編を作成いたしますので、そちらをお楽しみください

MISSION・NEXT 「次回作予告」

それは、新たに始まる伝説<sup>レジェンド</sup>

「お前は、マザーエルフ」

『ゼロ……助けて……この世界を』

新たな旅立ち

「この世界は？」

「世界が、別にあるのね……」

そして再会するのは、成長した家族

「ゼロ！？ほんまに、ゼロなんか!？」

「お前は、はやて……なのか？」

新たなる敵

「私はジェイル・スカリエツティ・・・科学者さ！君が欲しい！」

新たなる仲間たち

「私、スバル・ナカジマつています！」

「ティアナ・ランスターです」

「僕はエリオ・モンディアルです！」

「私はキャロル・ルシエ、こっちはフリードです！」

今、新たなる伝説が始まる

「こちらゼロ・・・これより任務を開始する」  
ミッション

To be continued

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0529m/>

---

魔法少女リリカルなのはA'S～真紅の英雄～

2010年10月10日00時10分発行